長征

創刊号　1979.10

――第一回大会決定報告集――

結成宣言　2
綱領草案、規約　5
政治報告・序章　統合を戦取するに至った闘いの軌跡　25
・第一部　ブンドを全面的に総括し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成へ　30
・第二部　国際―国内情勢とわが同盟の当面する任務　51
・第三部　党建設　87

共産主義者同盟（革命の旗）

長　征　創刊号

共産主義者同盟(革命の旗)中央委員会

1917年10月，ロシア革命・冬宮攻撃

共産主義者同盟（革命の旗）

結成宣言

全国の共産主義者諸君！　革命的労働者諸君！　革命的農民・学生諸君！

我々は、心からの歓びと革命的決意・情熱をもって共産主義者同盟（革命の旗）が結成されたことを報告する。

一九七九年七月×日、共産主義者同盟（革命の旗）第一回大会は、綱領草案・規約・政治報告を採択し、旧共産主義者同盟游撃派と旧共産主義者同盟マルクス・レーニン主義派との統合を実現し、共産主義者同盟（革命の旗）を戦取した。

＊　＊　＊

共産主義者同盟（革命の旗）は、ブンドの「現代修正主義に転落した日本共産党から訣別し、トロツキズムの革共同に反対してきた。」（綱領草案）革命的伝統を継承し、「日本プロレタリア階級のマルクス・レーニン主義党を創建し、プロレタリア階級の世界軍の一部隊として、全ての国々の共産主義者と共に、世界共産主義革命の勝利を目指して闘う。その途上にあって、日本革命、つまり日本帝国主義打倒・米帝国主義追放・プロレタリア階級独裁・社会主義革命の実行を当面の任務とする。」（同）

＊　＊　＊

共産主義者同盟（革命の旗）は、ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義を獲得し、（分派闘争の時代から統合へ）と転換するブンドの新たな時代の中核・先鋒隊である。

我々は、この闘い取られた地歩を打ち固め、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの結成へと前進していかねばならない。

しかも我々の党建設の闘いは、この段階に留まるものではない。「修正主義・現代修正主義と仮借なく闘い、日本プロレタリア階級を組織し、支配階級へ高めあげるマルクス・レーニン主義党を創建しなければならない。」（綱領草案）

この壮大・不可欠な任務は、今まさに、新たな地平へと押し上げられた。

＊　＊　＊

今日、新たな戦争と革命の時代が始まりつつある。嵐の時代の序鐘は打ちならされている。こうした中で日本帝国主義の体制的危機は始まり、激化している。帝国主義戦争と社会主義革命の接近という情勢の中で、プロレタリア階級は、様々な細流・水路を通じて反抗を強め、資本の専制支配との対決を強め、拡大している。

こうした闘いの一切の現われを我々は、マルクス・レーニン主義党の創建に結びつけ、プロレタリア階級の指導を通じ、貧農＝半プロレタリアと同盟し、中農・都市小ブルジョア階級をひきつけて社会主義統一戦線を結成し「暴力革命で日本帝国主義、つまりブルジョア階級独裁を打倒すると同時に、米帝国主義を追放し、プロレタリア階級独裁を樹立し、資本主義的生産関係を社会主義的生産関係にとってかえる」（綱領草案）一大会戦へと進撃していかねばならない。

＊　＊　＊

共産主義者同盟（革命の旗）綱領草案は、ブンド総括を基礎とし、マルクス・レーニン主義の原則を復権し、反スタ・トロツキズムを批判し、反帝・反社帝の毛沢東思想を支持し、アジアの社会主義国、民族解放闘争と結合し、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の日本革命と反ソ反米反覇権の国際人民闘争を結びつけて推進することを簡潔に、しかも力強く示している。我々は、この綱領草案を日本共産主義運動の再編・統一に向けた公然たる戦闘旗として提起する。

＊　＊　＊

五八年のブンド結成以来、特に六九年七・六事件以来のブンドの苦難の分派時代、その困難な条件の中で、なおブンドの革命的伝統を守らんとし、志なかばに倒れていった多くの同志がいた。彼らこそ旧共産主義者同盟マルクス・レーニン主義派と旧共産主義者同盟游撃派の統

合の真の組織者・原動力であった。

＊　＊　＊

全国の同志諸君！　闘い取った地歩を固めよ！　絶対不屈の確信を呼びおこせ！　この地歩は、全国の各地で異なった諸条件の下で活動している全ての共産主義者、革命的労働者、革命的農民・学生の共通の地歩となるべきものであり、又ならねばならない。たとえかつて異なった歩みを進んできたとしても、わが綱領草案と固く結びつくことによって共に前進する地歩をつかみとることができるであろう。

我々の事業は、決して革命的気分をもったインテリゲンツィアの小群を統合することにあるのではない。我々の事業は、今日革命的勃興を示しつつあるプロレタリア運動の全ての先進闘士、全国の先進闘士を、厳格な原則に基づいて単一の党へと統合することである。我が綱領草案は、原則的厳格な統合のための力強い基盤をつくり出し、その旗印とならねばならない。

＊　＊　＊

全国の共産主義者諸君、革命的労働者諸君、革命的農民・学生諸君！

今こそ真の長征に出発せよ！　七十年代の一時期にわたる苦闘によって準備され、戦取されたこの統合を礎とし、「革命の旗」を掲げ、マルクス・レーニン主義の単一の全国的な革命党を創建する新たな長征に出発せよ！史上三度目の戦争と革命の時代の様相がますます公然たるものとなり、社会主義革命に向けた革命的情勢がくっきりと刻印されている現在、アジアの社会主義国、民族解放闘争と結合して、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命を実行するマルクス・レーニン主義の単一の全国的な革命党を速かに、立派に無駄なく創建し抜くことは、最も緊要の任務であり、この真の長征を共通の事業としなければならない。

この事業において、今後我々に襲いかかってくる試練がどれほど苛酷であろうとも、最後の勝利は我々のものである。

全国の共産主義者諸君！　革命的労働者諸君！　革命的農民・学生諸君！

共産主義者同盟（革命の旗）に結集せよ！

共産主義者同盟（革命の旗）結成万才！

日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命万才！

綱領草案

(1)　一九一七年のロシア十月革命によって始まった世界プロレタリア共産主義革命は、その後中国革命、インドシナ三国革命を始めとした共産党の指導する被抑圧民族の革命闘争が中心となって発展し、二十世紀の中期から今日にいたる基調をかたちづくっている。この時代にあってわれわれ共産主義者同盟は、現代修正主義に転落した日本共産党から訣別し、トロツキズムの革共同に反対してきた。われわれは、日本プロレタリア階級のマルクス・レーニン主義党を創建し、プロレタリア階級の世界軍の一部隊として、すべての国々の共産主義者と共に世界共産主義革命の勝利をめざして闘う。その途上にあって、日本革命、つまり日本帝国主義打倒・米帝国主義追放・プロレタリア階級独裁・社会主義革命の実行を当面の任務とする。

第一章　資本主義とプロレタリア共産主義革命

(2) 前進しつつあるプロレタリア共産主義革命は、資本主義の発展が不可避に導いたものであり、ロシア共産党の綱領は、この資本主義とブルジョア社会の本質、それが共産主義社会に発展する不可避性について次のように正しく特徴づけた。

(3) 「このような社会の主要な特質をなすものは、資本主義的生産関係にもとづく商品生産である。この生産関係のもとでは、商品生産および流通の手段のもっとも重要な、いちじるしい部分が、少数の人間からなる階級に属しているのに、他方住民の圧倒的多数は、プロレタリアと半プロレタリアからなっており、彼らはその経済状態にせまられて、常時あるいは定期的に自分の労働力を販売することを余儀なくされている。すなわち、資本家の雇い人となって自分の労働で、社会の上層諸階級の所得をつくりだすことを余儀なくされている。

(4) 技術の不断の改善が、大企業の経済的意義を増大させる一方、独立の小生産者を駆逐し彼らの一部分をプロレタリアに転化し、残りの部分についても、その社会＝経済生活に占める役割を縮小し、そこここで彼らを資本に対する、多かれ少なかれ完全な、多かれ少なかれ明白な、多かれ少なかれ重圧的な従属におとしいれるにつれて、資本主義的生産関係の支配分野はますます拡大する。

(5) この同じ技術上の進歩は、そのうえ、商品生産および流通の過程に婦人労働と児童労働をます

ます大規模に利用する可能性を企業家に与える。しかも他方では、それは労働者の生きた労働に対する企業家の需要を相対的に減少させるので、労働力に対する需要は、必然的にその供給にたちおくれる。その結果資本にたいする賃労働の従属が増大し、その搾取の度合が高まる。

(6) ブルジョア諸国の内部におけるこのような事態と、世界市場におけるそれらの諸国相互のたえず激化していく競争とは、たえず増大する数量で生産される商品の販売をますます困難にする。過剰生産は、多かれ少なかれ鋭い産業恐慌となって現われ、恐慌のあとには多かれ少なかれ長びく産業沈滞期が続くが、この過剰生産は、ブルジョア社会において生産力が発展していくことの不可避の結果である。恐慌と産業沈滞期は、それはそれで小生産者をさらにいっそう零落させ、資本に対する賃労働者の従属をさらにいっそう深め、労働者階級の状態の相対的悪化に、ときにはまた絶対的悪化にも、いっそう急激に導いていく。

(7) こうして労働生産性の増大と社会的富の増加とを意味する技術の改善が、ブルジョア社会では、社会的不平等の増大、有産者と無産者の隔りの拡大、勤労大衆のますます広範な層にとっての生活の不確かさと失業とさまざまな種類の困窮との増大の条件となる。

(8) しかしブルジョア社会に固有なこれらすべての矛盾が増大し発展していくにつれて、現存の秩序に対する勤労被搾取大衆の不満もまた増大し、プロレタリアの数と結束が増大し、自分たちの搾取者に対する彼らの闘争が激しくなる。それと同時に、技術の改善は、生産および流通の手段を集積させ、資本主義企業における労働過程を社会化することによって、資本主義的生産関係を共産主義的生産関係にかえる物質的可能性——すなわちプロレタリアートの階級運動の意識的表現者である国際共産党の全活動の終局目標である、あの社会革命の物質的可能性をますます急速につくりだしていく。

(9) プロレタリアートの社会革命は、生産および流通手段の私的所有を、社会的所有にかえ、社会

の全成員の福祉と全面的発展を保障するために、社会的生産過程の計画的組織化を実施することによって諸階級への社会の分裂をなくし、こうして抑圧されている人類全体を解放するであろう。それは社会の一部分による他の部分の搾取のあらゆる形態をおわらせるだろうからである。

(10) この社会革命の不可欠の条件をなすものは、プロレタリアートの独裁である。すなわちプロレタリアートに搾取者のあらゆる反抗の鎮圧を可能とする政治権力を、プロレタリアートが闘いとることである。

(11) プロレタリアートに偉大な歴史的使命をはたす能力を獲得させることを自己の任務とする国際共産党は、プロレタリアートをすべてのブルジョア政党に対立する独自の政党に組織し、プロレタリアートの階級闘争のいっさいの現われを指導し、搾取者の利益と被搾取者の利益とが和解しえないように対立していることをプロレタリアートの前に暴露し、きたるべき社会革命の歴史的意義と必要な諸条件とを彼らに対して明らかにする。それと同時に国際共産党は、その他の勤労被搾取大衆全体にむかって、資本主義社会では彼らの地位は絶望的であり、彼ら自身を資本の圧制から解放するには社会革命が必要であることを明らかにする。労働者階級の党である共産党は、勤労被搾取住民のすべての層を彼らがプロレタリアートの立場にうつってくるかぎり、自己の隊列によびいれる。」

(12) 共産主義の低い段階である社会主義は、相当長期にわたる歴史的段階であり、終始、階級、階級対立、階級闘争が存在し、プロレタリア階級とブルジョア階級との、社会主義と資本主義との二つの道をめぐる闘争が存在し、資本主義の復活の危険性が存在する。だからプロレタリア階級は、社会主義の全歴史段階を通じて、プロレタリア階級独裁を堅持し、社会革命を継続しなければならない。こうしてこそ資本主義の復活を防ぎ、社会主義を強化することができ、最終的にブルジョア階級を消滅させ、階級、階級対立を消滅させ、共産主義の高い段階を実現できるのであ

る。このプロレタリア階級独裁のもとでの継続革命の理論と実践は、毛沢東思想によるマルクス・レーニン主義の発展であり、われわれはこれを継承する。

第二章　帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代

(13) 資本主義は帝国主義に移行し、世界プロレタリア共産主義革命の開始に導いた。そうした時代の特徴をロシア共産党の綱領は次のように正しく特徴づけた。

(14) 「資本の集積と集中の過程は、自由競争を排除することによって、二十世紀の初頭に、経済生活全体で決定的な意義をもつようになった強大な独占的資本家団体——シンジケート、カルテル、トラストを成立させ、銀行資本と途方もなく集積された産業資本家とを融合させ、外国への資本の輸出を強化させた。資本主義列強の幾多のグループを包括するトラストはすでに地域的に分割ずみの地球の経済的分割を開始した。これは資本主義諸国家のあいだの闘争を不可避的に激化させる金融資本の時代、帝国主義の時代である。

(15) ここからして帝国主義戦争が、すなわち販売市場のため、資本の投下地域のため、原料のため、労働力のため、つまり、世界支配のため、弱少民族にたいする支配のための戦争が不可避的に生じる。一九一四～一九一八年の最初の帝国主義大戦争こそまさにそういう戦争である。

(16) 世界資本主義一般がきわめて高い発展水準に達していること、国家独占資本主義が自由競争にとって代ったこと、銀行ならびに資本家団体によって物質の生産と分配の過程にたいする社会的

規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して、物価騰貴と労働者階級にたいするシンジケートの圧迫が増大していること、労働者階級が帝国主義国家によって隷属させられていること、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争が巨大な障害に直面していること、帝国主義戦争が惨禍や災厄や零落を生みだしていること、――すべてこれらのことは資本主義の破綻とより高度の型の社会経済への移行とを避けられないものにした。

(17) 帝国主義戦争は公正な講和で終ることができなかったばかりではなく、総じてブルジョア諸政府のあいだにいくぶんでも安定した講和が締結されたことで終わることもできなかった。今日資本主義が到達している発展段階にあっては、帝国主義戦争は、我々の眼の前で不可避にプロレタリアートを先頭とする被搾取勤労大衆のブルジョア階級にたいする内乱に転化した」。

(18) ロシアの十月革命は、プロレタリア階級独裁を樹立し、最初の社会主義革命を実現した。プロレタリア階級は、貧農すなわち半プロレタリアの支持をうけて共産主義社会の基礎を創出し始めた。それを根拠地として全世界における帝国主義と搾取者に対するプロレタリア階級、勤労人民の反抗はいちじるしく強まり、プロレタリア階級の国際的結束が飛躍的に強化された。さらに植民地・従属諸国においては、プロレタリア階級・農民を中心とした帝国主義にたいする闘争もまた大きく発展し、国際共産党と国際プロレタリア階級の革命運動と緊密に結びつくことによって、世界プロレタリア共産主義革命の一環に転化した。これらの諸国の多くに共産党が誕生し、民族解放闘争を指導することによって、その勝利をひきつづき社会主義革命に向けて発展させる可能性が生み出された。かくてプロレタリア階級の闘争は、被抑圧民族と結合し、文字通り世界的なものとなった。

(19) こうして帝国主義から社会主義への世界史的過渡期に入った。この過渡期世界には帝国主義国相互間の矛盾、帝国主義国におけるブルジョア階級とプロレタリア階級の矛盾、帝国主義国と被

抑圧民族の矛盾、社会主義国と帝国主義国との矛盾という四つの基本矛盾が存在する。世界プロレタリア共産主義革命は、プロレタリア階級独裁を堅持し、社会革命を継続する社会主義国の革命、民族解放・民主主義革命から社会主義革命へ進む植民地・従属諸国の革命、帝国主義国の社会主義革命という三ブロック革命の結合である。

(20) この三ブロック革命の前進に対抗し、帝国主義諸列強は、二度にわたる世界大戦を経て、米帝国主義が二流帝国主義を従属させ、国際支配体制を確立した。こうした中で、最初の社会主義国ソ連は、現代修正主義が党と国家を支配し、国内的にはプロレタリア階級独裁と継続革命を放棄し、官僚ブルジョア階級独裁のもとで資本主義が全面化し、対外的には他民族を抑圧し、世界再分割戦に参加することで社会帝国主義へ転落した。同様に東欧諸国も官僚ブルジョア階級が支配する国家資本主義になり、かつソ連社会帝国主義の従属国となった。こうして一時期存在した社会主義陣営は、崩壊した。これに対し中国を先頭とするアジアの社会主義国は、プロレタリア階級独裁を堅持し、社会主義継続革命によって社会主義建設を推し進めた。民族解放・人民民主主義革命から社会主義革命へ推し進めて勝利した中国革命を模範とする民族解放闘争が、アジアの社会主義国と結合し、前進し、世界革命の主力軍となっている。こうして現代世界の基本矛盾が一層深まり、激化している。

(21) 今日、新たな戦争と革命の時代が始まりつつある。社会主義国である中国、朝鮮民主主義人民共和国等が大後方となり、一九七五年のベトナム・ラオス・カンボジアの抗米救国闘争の勝利をはじめ、民族解放闘争がアジア、アフリカ、ラテンアメリカ全域に拡大し、米帝国主義を先頭とした帝国主義の植民地支配体制を危機におとしいれつつある。米帝国主義は、いまだ最大の帝国主義として、崩壊しつつある覇権の維持、再編に向い、これに従属的に同盟しつつ、その枠内で勢力圏再分割を目指す西独、日本帝国主義が登場している。またソ連社会帝国主義は「社会主

義大家族論」「民族解放闘争支持」を掲げ、実際では東欧を一層従属国化し、社会主義国への干渉を強め、民族解放闘争を抑圧、隷属、変質させ、米帝国主義にとってかわって新たな世界支配体制を確立しようとして登場し、両者の間で覇権争奪戦、第三次世界再分割戦が始まり、激化している。そして二流の帝国主義国である西欧、日本では、資本主義の高度成長が破綻し、プロレタリア階級、勤労人民の反抗が増大し、ブルジョア階級独裁が危機に陥りつつある。これに加えて、アジアの社会主義国を大後方とする民族解放闘争の前進によって帝国主義的権益をおびやかされ、また、ソ・米二超大国の帝国主義が世界再分割戦を強めていることから、一層体制的危機を深め、階級闘争を激化させ、社会主義革命に向けた革命情勢が端緒的に始まりつつある。

(22) すべてこうしたことから、ソ・米を策源地とする第三次帝国主義世界大戦の危険性が増大している。と同時に、社会主義国を大後方とする民族解放闘争が拡大し、社会主義国の祖国防衛戦争と、二流の帝国主義国での社会主義革命戦争が結びつくことは不可避である。

(23) こうした事情の下では、議会を通じた平和革命、帝国主義国と社会帝国主義国の国際的緊張緩和（デタント）や、国際的軍備縮少（ＳＡＬＴ）などのスローガンは反動的ユートピアであるばかりか、勤労人民を露骨に欺瞞するものであり、プロレタリア階級を武装解除し、搾取者の武装解除という任務からプロレタリア階級をそらせることを目的とするものである。帝国主義と帝国主義戦争とがつくりだす袋小路から人類を脱出させることができるのは、世界プロレタリア共産主義革命だけである。革命が一時期失敗することがあろうと、反革命の波がどんなであろうと、プロレタリア階級の最後の勝利は避けられない。

(24) 世界プロレタリア共産主義革命の勝利を目指す闘いにおいて、社会主義国、帝国主義国、被抑圧国におけるプロレタリア階級間の完全な信頼と、最も緊密な同盟と、革命的行動のできるだけ大きな統一を闘いとることが必要であり、マルクス・レーニン主義党の結束を闘いとらねばならない。このためには、プロレタリア階級の隊列内のブルジョア階級の手先である修正主義、現代修正主義、総じて口先では「社会主義」、実際では帝国主義である社会帝国主義と訣別し、闘わねばならない。

(25) ロシア共産党の綱領は、帝国主義の時代とともに日和見主義、社会排外主義として登場し、以降ブルジョア階級独裁の社会的支柱をなしている修正主義の物質的基礎を、次のように正しく特徴づけた。「こういう潮流を生みだしたのは、先進資本主義諸国家が植民地民族や弱小民族を略奪することによって、ブルジョア階級に、この略奪によって獲得した超過利潤の一小部分でプロレタリア階級の上層に特権的な地位を与え、それによって彼らを買収し、平時には相当の小市民的生活をこの上層に保障し、この層の指導者を自分の召使いとする可能性を与えているという事情である。」

(26) 現代修正主義は、社会主義国では、プロレタリア階級独裁と社会主義継続革命を放棄し、官僚ブルジョア階級独裁と資本主義を復活させた。ソ連は社会帝国主義として登場し、世界革命に敵対し、世界支配を目指している。現代修正主義は帝国主義国では、修正主義と物質的基礎は同一であり、暴力革命とプロレタリア階級独裁を放棄し、議会主義、改良主義に転落している。植民地国では、民族解放闘争の主導権をブルジョア階級に譲り渡し、新植民地主義に屈服している。これと訣別し、闘争しなければならない。

(27) 世界プロレタリア共産主義革命の終局の勝利のためには、世界単一のマルクス・レーニン主義党が必要であり、単一の世界プロレタリア階級独裁が必要である。現在、国際共産党は存在していないが、現代修正主義、社会帝国主義と原則的に断乎として手を切り、仮借なく闘争しているマルクス・レーニン主義党は、アジアの社会主義国をはじめとしていくつかの国に存在している。世界プロレタリア共産主義革命の発展は、全世界でマルクス・レーニン主義党の結成と成長を促

し、それの国際的統一を促さずにはおかない。

第三章　日本革命におけるプロレタリア階級の任務

(28) 帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代にあって、世界プロレタリア階級の共通の終局目標の途上における、各国のプロレタリア階級の当面の任務は、各国の国家と社会の性質が異なるので、各々異なったものとなる。

(29) 第二次大戦までの天皇制の下で、また大戦後の米帝国主義の占領下で日本革命は敗北した。こうして日本帝国主義は米帝国主義を後楯として復活した。現在の日本の国家権力は、ブルジョア階級が掌握するブルジョア階級独裁である。しかしこれは米帝国主義に補完され、依存し、また一定支配され従属している。日米安保体制がそれであり、日米安保条約によって日本の自衛隊が在日米軍と不可分に結びついていることに集中的にあらわれている。現在の日本の社会は、高度に発達した資本主義で、独占資本と金融資本が支配的であり、資本輸出が行なわれ国家独占資本主義へと発展し、植民地支配を行なっており、帝国主義である。

しかし日本のブルジョア階級はプロレタリア階級と勤労人民を搾取、収奪、抑圧するため、社会主義革命への反革命のため、またアジアにおける植民地支配と中国、朝鮮等の社会主義国に対抗するため、そして更にはソ連社会帝国主義に対抗するために、米帝国主義と従属的に同盟している。米帝国主義は日本帝国主義を目下の同盟者とすることによって、アジアの植民地支配と民

族解放闘争、社会主義国およびソ連社会帝国主義への番犬、突撃隊としている。他方では、日本帝国主義と米帝国主義の間に勢力圏をめぐる対立が存在し、米帝国主義の相対的下降と日本帝国主義の相対的上昇によって対立は激化している。しかし依然として米帝国主義は一流帝国主義であり、日本帝国主義は二流帝国主義である。だから勢力圏の分割は、日米安保体制のなかで進んでいる。

(30) 以上のことから当面する日本革命の対象、つまり敵は、日本帝国主義つまり日本のブルジョア階級と、米帝国主義である。革命の任務は、暴力革命で日本帝国主義、つまりブルジョア階級独裁を打倒すると同時に、米帝国主義を追放し、プロレタリア階級独裁を樹立し、資本主義的生産関係を社会主義的生産関係にとってかえることである。従って、当面する日本革命の性質は、米帝国主義追放を含む社会主義革命である。

(31) 当面する日本革命の原動力は、プロレタリア階級と貧農＝半プロレタリアである。高度に発達した日本資本主義は、生産の社会化を高度に実現し、社会主義革命の物質的基礎を準備すると同時に、農民と都市小ブルジョア階級を分散させ、巨大なプロレタリア階級を形成した。生産の社会化を代表するプロレタリア階級が社会主義革命の原動力である。また貧農＝半プロレタリアは農民の大多数を占め、しかも量的に増大しており、ブルジョア階級に直接搾取されており、社会主義革命において原動力になることができ、プロレタリア階級の同盟軍となる。中農＝小ブルジョアと都市小ブルジョア階級は、小商品生産者である。しかし同時にブルジョア階級に間接に搾取されており、一部が資本家に上昇するが、大部分は没落してプロレタリア化する運命にある。それ故、社会主義革命の原動力ではないが、敵でもない。だからプロレタリア階級は、中農と都市小ブルジョア階級を引きつけねばならない。こうして、当面する日本革命においてわが同盟は、プロレタリア階級の指導を通じ、貧農＝半プロレタリアと同盟し、中農と都市小ブルジョア階級

を引きつけて、社会主義統一戦線を結成し、　暴力革命で日本帝国主義を打倒し、米帝国主義を追放し、プロレタリア階級独裁を樹立し、社会主義革命を実行していかなければならない。

(32) 日本革命の前途は、共産主義の高い段階であり、これは世界プロレタリア階級の共通の終局目標であり、世界プロレタリア共産主義革命の勝利によってのみ達成される。だから日本のプロレタリア階級は、日本で社会主義を建設した後も、プロレタリア階級独裁を堅持し、社会革命を継続し、世界革命の根拠地を建設していかなければならない。

(33) 今日、アジアの社会主義国を大後方とした民族解放闘争が、インドシナで米帝国主義に勝利し、朝鮮を次の最前線としつつある。またアジアでソ連社会帝国主義が覇権争奪を強め、米帝国主義・日本帝国主義との勢力圏をめぐる再分割戦を激化させている。これに対して日本帝国主義は、米帝国主義と同盟し、朴政権を手先として朝鮮侵略反革命を強化し、朝鮮南半部人民の反米反日朴打倒の民族民主革命に対する反革命を強め、朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮人民の自主的平和統一闘争への敵対を強めていると同時に、ソ連社会帝国主義への対決を強めている。日本帝国主義は、朝鮮侵略反革命のため、またプロレタリア階級の反抗の増大、社会主義革命に対する反革命のため、天皇制を前面化し、官僚機構、軍隊、警察を一層強大化し、両者を結合させ、差別を強め、ブルジョア階級独裁を反動化しつつある。と同時に、資本主義の高度成長が破綻し、恐慌が進行し、長期に不況が続くなかで国家独占資本主義を強化し、プロレタリア階級、勤労人民への搾取、収奪、抑圧、差別を一層強めている。これに対してプロレタリア階級、勤労人民は、朝鮮侵略反革命と戦争に反対する闘争、　反動化に反対する闘争、差別に反対する闘争、搾取、収奪、抑圧に反対する闘争などを激化させ、発展させている。総じて日本帝国主義の体制的危機は深まり、社会主義革命の情勢は、端緒的に始まりつつある。加えて、米帝国主義とソ連社会帝国主義のアジアでの覇権争奪と戦争の要素の増大によって、一層促進されているのである。それ故

現在の情勢は、社会主義革命の実現のために、政治権力を獲得する準備をプロレタリア階級に全面的に整えさせるという任務を客観的にのぼらせている。

(34) この任務を遂行するため、修正主義、現代修正主義と仮借なく闘い、日本プロレタリア階級を組織し、支配階級へ高めあげるマルクス・レーニン主義党を創建しなければならない。

現在、日本の労働運動を支配しているのは、労働貴族を基礎とする修正主義、現代修正主義である。日本帝国主義の超過利潤の一部で買収された彼らは、今日では社会帝国主義としてブルジョア階級独裁の社会的支柱をなし、その反動化に忠勤をなし、帝国主義戦争に労働者階級を屈服させ、あるいは動員しようとしている。こうした政治勢力・潮流と闘わなければならない。とくにプロレタリア階級をマルクス・レーニン主義党に組織するためには、修正主義、現代修正主義の社会党、日本共産党との闘争が重要である。社会党は社会民主主義のいくつかの傾向の連合体であるが、中心は社会主義協会である。社会主義協会は、暴力革命を放棄した「平和革命」の議会主義であり「社会主義革命」「プロレタリア階級独裁」の名で、実は社会主義革命、プロレタリア階級独裁を放棄し、資本主義とブルジョア階級独裁に対する民主主義的な改良を追求する改良主義である。共産党は現代修正主義に支配されている。現代修正主義は、日米安保体制下の日本を従属国として把え、日本の独占資本主義に対する革命を民主主義革命として把え、結局日本帝国主義に対する社会主義革命を放棄する誤りから発生した。こうして現代修正主義の共産党は暴力革命を放棄した「平和革命」の議会主義であり、「民主主義革命から社会主義革命の二段階革命」の名で、実は社会主義革命、プロレタリア階級独裁を放棄して、ブルジョア階級と資本主義に対する民主主義的改良を要求する改良主義である。共産党と社会主義協会は、アジアの社会主義国と民族解放闘争、特に社会主義国中国と朝鮮人民の反日闘争に敵対して日本帝国主義と結合しており、プロレタリア階級を小ブルジョア階級に追随させ、ブルジョア階級に屈服させており、ソ

連社会帝国主義と結合した社会帝国主義潮流である。

(35) 以上からして、日本プロレタリア階級の前衛であるマルクス・レーニン主義党は、日本帝国主義打倒・米帝国主義追放・プロレタリア階級独裁・社会主義革命のために首尾一貫して闘い、その具体的内容をなす以下の諸任務を掲げる。

(一) 一般政治の分野で

(イ) 党は、日本帝国主義、つまりブルジョア階級独裁の国家権力である自衛隊、警察、官僚機構などを解体し、プロレタリア階級と勤労人民の武装を実現し、プロレタリア階級独裁の新しい国家権力、赤軍、革命政府などを樹立するために闘う。天皇制を廃止し、共和制を実現するために闘う。

(ロ) 党は、国内の沖縄人、アイヌなどの少数民族に対する日本帝国主義の民族的抑圧に反対して闘い、これらの民族の自決権、つまり国家的に分離する権利を承認し、国家を構成するすべての民族の完全な同権を実現するために闘う。

(二) 対外関係の分野で

(イ) 党は、米帝国主義の追放のために在日米軍の撤退、在日米軍資産の没収、安保条約およびすべての関連条約、秘密協定の破棄のために闘う。

(ロ) 党は、日本帝国主義の植民地支配の廃棄のために、日韓条約の破棄、在朝鮮南半部の日本帝国主義の資産の無条件の放棄、朝鮮民主主義人民共和国の承認のために闘い、植民地被抑圧民族の自決権を承認する。米帝国主義と日本帝国主義の朴政権を手先とした朝鮮侵略反革命に反対し、朝鮮人民の自主的平和統一闘争、朝鮮南半部人民の反米反日朴打倒の民族民主革命、在日朝鮮人の民主的民族的権利のための闘争を支持し闘う。

(ハ) 党は、ソ・米二超大国の覇権主義に反対し、社会主義国と共に植民地・従属諸国の民族解放闘争を支持して闘う。

(三) 経済の分野で

(イ) 党は、ブルジョア階級が私有し独占する生産手段、および流通手段を収奪、没収し、プロレタリア階級独裁の下で社会主義の国家所有とするために闘う。そして、銀行、および勤労農民が所有する以外の土地を、プロレタリア階級独裁の下で、社会主義の国家所有とするためにたたかう。

(ロ) 党は、農民を始めとする勤労人民が他人労働を搾取しないで私有している土地、その他の生産手段については、プロレタリア階級独裁の下で、社会主義の集団所有とするよう説得する。

(ハ) 党は、プロレタリア階級と勤労人民が、資本主義による破壊から生活を守るために経済闘争を闘うのに対して支持し、指導すると同時に、改良主義に反対し社会主義によってのみ完全に生活が保障されることを主張する。

(四) その他の分野で

党は、日本の現在の国家および社会制度に対して闘われる部落解放闘争や女性解放闘争、「障害者」解放闘争、その他の勤労人民の解放闘争を支持し、指導すると同時に、改良主義に反対し、完全な解放は日本帝国主義打倒・米帝国主義追放・プロレタリア階級独裁・社会主義革命によってのみ可能になることを主張する。

規約

第一章　同盟員

第1条　同盟の綱領と規約を承認し、同盟の一定の組織で活動するものは同盟員である。

第2条　同盟員は同盟の機密を保持し、同盟費を納入し、決定に従い、所属する同盟組織に全活動を報告する義務を負う。

第3条　同盟員はその意見を原文のまま、中央委員会または大会に伝達する権利を有する。

第4条　同盟への加盟を決意した者は、二名の同盟員の推薦に基づき、当該同盟組織の三分の二以上による決議と、中央委員会の承認を得て、同盟員となれる。

第5条　同盟細胞は同盟員候補の加入を決定できる。加入方法は加盟に準じ、上級機関の承認を得て、中央委員会に報告しなければならない。

同盟員候補は、同盟員とともに活動し、責任をともにするが、議決権を有しない。候補の期間は六ケ月とし、中央委員会の承認を得て、同盟員となれる。

第6条　獄中同盟員は同盟員としての資格は継続するが、権利と義務の一部は凍結される。

獄中における加盟も、第4条の精神にのっとり、一定の条件の下でこれを承認する。

第二章　組織

第7条　同盟は大会、中央委員会および政治局の中央組織と、地方委員会および細胞の地方組織の機関をおく。

第8条　大会は同盟の最高機関である。

大会は中央委員会が招集し、原則として年一回開催される。ただし同盟員の三分の一以上の要請がある場合、中央委員会は大会を招集する義務を負う。

第9条　大会は中央委員、中央委員候補、地方委員会および中央委員会により設置された同盟機関の代議員によって構成される。代議員選出の比率は中央委員会がこれを定める。

第10条　大会は中央委員会を選出し、大会から大会までの間、大会決定の執行と同盟活動の指導に中央委員会をあたらせる。

第11条　中央委員会は議長、副議長および政治局員を選出し、中央委員会から中央委員会までの間、同盟活動の恒常的指導にあたらせる。

中央委員会は中央委員候補を任命することができる。中央委員候補は議決権をもたない。

第12条　中央委員会は、一定の地方もしくは一定の専門機能に関する任務を遂行するための地方組織・専門組織の機関を設置し、委任することができる。

地方委員会は同盟細胞を組織するとともに、必要に応じて地区委員会をおくことができる。

第13条　同盟の会議は全体の三分の二以上の出席をもって成立し、特に規定のある場合を除いて、出席者の過半数の賛否で議決される。

第三章　財政

第14条　同盟の財政は同盟費、カンパおよび同盟が組織する特別の事業によってこれを行う。

第四章　規律

第15条　綱領から逸脱し、規約に違反するものは、権利停止を含む最高除名に至る処分を受ける。

第16条　処分は当該同盟組織の三分の二以上による決議と、中央委員会の承認を得て、決定される。

処分を受けた同盟員は再審査を要求することができる。また除名された同盟員の再加盟は中央委員会がこれを決定する。

第五章　付　則

第17条　規約に定められていない問題については、中央委員会が規約の精神にのっとり処理し、解決する。

〔目次〕

序章　旧共産同游撃派と旧共産同マルクス・レーニン主義派は、どこから来て何を闘い取ったか……25
——統合を戦取するに至った闘いの軌跡——

第一部　ブンドを全面的に総括し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成へ……30

Ⅰ　ブンド総括の今日的意義と総括観点……30
——清算主義と無総括主義に反対する——

Ⅱ　第一次ブンドの路線の総括……31
a　第一次ブンドの継承すべき革命的意義
b　第一次ブンドのえぐり出すべき弱点
c　第二次ブンドは第一次ブンドをどう総括したか

Ⅲ　第二次ブンドの路線と党的敗北の総括……38
a　第二次ブンドの革命的意義の核心
b　第二次ブンドのえぐり出すべき弱点

Ⅳ　ブンド総括のまとめと、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想のプロレタリア革命路線……46
a　ブンドの急進民主主義を清算して、マルクス・レーニン主義にとってかえ、反スタ・トロツキズムの側面を清算して毛沢東思想におきかえよ
b　ブンドの急進民主主義の「過程としての戦術「反帝ヘゲモニーとしての組織活動」から、計画としての戦術・中央集権党へ転換せよ

第二部　国際ー国内情勢とわが同盟の当面する任務……51

序　戦争と革命、国家と革命に対する態度を整え、「革命の旗」を掲げ、戦争と革命の八〇年代へ進撃せよ……51

Ⅰ　帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代と今日の基調……54
a　帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代の発展
b　史上三度目の戦争と革命の時代の特徴
c　反帝反社帝を堅持し、三つの革命の要素を結合し、反ソ反米反覇権
d　国際人民闘争を発展させ、戦争に備え、革命を促進せよ

Ⅱ　第三次帝国主義戦争の第一段階と革命の要素の増大・反ソ反米反覇権国際人民闘争の発展……59
a　第三次帝国主義戦争の第一次段階が始まっている
b　ソ社帝に対する批判・武装・闘争を強化せよ
c　米帝・西欧諸帝・日帝の新たな戦争準備に対する闘争を強化せよ
d　第三世界と日本・西欧における革命の要素の増大と、反ソ反米反覇権国際人民闘争の発展

Ⅲ　マルクス・レーニン主義と現代修正主義への分裂と闘争の新たな拡大と発展

Ⅳ　日本帝国主義の体制的危機とその歴史的地位……65
a　戦後日本帝国主義とブルジョア階級独裁・安保体制
b　七〇年代中期から始まった日本帝国主義の体制的危機の根底性と歴史的地位

Ⅴ　帝国主義戦争と社会主義革命の本格的接近……69
a　日本帝国主義の体制的危機と大平政権
b　「総合安保戦略」の本質＝帝国主義戦争の総合的準備
c　帝国主義と社会主義革命の本格的接近＝戦争と革命の八〇年代へ
d　体制的危機の第二段階への移行と革命的昂揚の第二歩への準備ー現局面の性格

Ⅵ　日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の政治路線と反ソ反米反覇権の国際人民闘争を結合し、「正規の攻囲」を組織せよ！……75
a　戦争と革命に対する労働者階級の態度を整え、革命的祖国敗北主義を真に確立せよ
b　国家と革命に対する労働者階級の態度を整え、暴力革命・プロレタリア階級独裁を真に確立せよ
c　新旧修正主義、社会帝国主義と闘い、社会主義労働運動の創出・発展へ闘う統一を促進せよ
d　プロレタリア階級を全ての人民闘争の指導者へと高めあげ、社会主義統一戦線を形成せよ

Ⅶ　マルクス・レーニン主義の全国単一党創建の真の長征へ！……84
a　トロツキズム潮流の反動性を暴露せよ
b　急進民主主義の混迷と動揺を批判・改造せよ
c　マルクス・レーニン主義の全国単一党建設へ、全ての先進的労働者の思想的＝組織的統合を推し進めよ

第三部　党建設ーマルクス・レーニン主義の単一党建設へ、新たな長征に出発せよ……87

Ⅰ　ブンドの分派から統合の時代を、自力更生と統合をもって更に推し進めよ……88
a　党建設の一般原則
b　マルクス・レーニン主義の第三次ブンドを結成せよ
c　党の型——職業革命家を中核として、工場細胞を基礎とする中央集権制
d　宣伝・煽動・組織化と全国政治新聞

Ⅱ　日本共産主義運動の分化・再編に分け入り、大胆に党派論戦を組織せよ……99
a　ブンドの総括論争とマルクス・レーニン主義
b　国際共産主義運動の分裂に規定された政治勢力の分化

共産主義者同盟（革命の旗）第一回大会

政治報告

序章　旧共産同游撃派と旧共産同マルクス・レーニン主義派は、どこから来て何を闘い取ったか

――統合を戦取するに到った闘いの軌跡

労働者諸君、農民・学生諸君！

ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの結成に向けた中核・先鋒隊が戦取された。共産主義者同盟游撃派と共産主義者同盟マルクス・レーニン主義派は、ブンドに対する無総括主義・清算主義に反対し、批判し、ブンド総括をやりきり、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想＝反帝反社帝のプロレタリア革命路線を確立し、もって共産主義者同盟（革命の旗）第一回大会を開催し、綱領・規約を採択し、政治報告を採択し、組織統合し、共産主義者同盟（革命の旗）を戦取した。かくてマルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成に向けた闘いは、第二段階に突入した。

六九年七・六事件を契機として第二次ブンドは、急進民主主義のテロリズムと経済主義に引き裂かれ大分派闘争の時代に突入した。しかし、この分裂は七二年連合赤軍事件等をテコに、七四～五年からマルクス・レーニン主義と急進民主主義の分裂・対立へと質的に転化した。つまり、ブンドのマルクス・レーニン主義的側面が成長・発展し、様々なマルクス・レーニン主義分派が各々の地点で急進民主主義との闘争を通じて結成を闘い取っていったのである。

七八年から本年にかけて国際的には、史上三度目の戦争と革命の時代輪郭が明らかになり、第三次帝国主義戦争の第一段階が始まり、国際共産主義運動も一大転換＝分化・再編へ突入し、国内的には〈反動と戦争〉の要素が共に増大し、こうした国際―国内情勢に押し上げられブンドのマルクス・レーニン主義分派の統合問題が急速に煮つまった。

様々なマルクス・レーニン主義分派の結成は、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成に向けた闘いの一段階であった。かかる分派を統合することが第二段階であり、まさに、この時期、各分派は第二段階へ飛躍することを問われたのである。游撃派、マルクス・レーニン主義派、紅旗派、労共委は、各々「統合の六条件」を提起した。しかし、紅旗派はブンドに対する清算主義（反スタ・トロツキズム）を残存させ、労共委がブンドに対する清算主義を残存させていた。と同時に、こうした誤りに固執し、統合に踏み出すことをちゅうちょした。これに対し、

游撃派とマルクス・レーニン主義派は、日本階級闘争の全局・大方向、日本共産主義運動の核心問題をつかんで離さず、断乎として組織統合を決意し、実行したのである。こうして第二段階のささやかではあるが重大な第一歩が踏み出されたのである。

労働者諸君、農民・学生諸君！

諸君の中から「どうして旧赤軍派と旧再建委という対極的流れを組む両派が結合したのか」という意見が出るかもしれない。回答しよう。確かにかつて一方はテロリズム、他方が経済主義として旧赤軍派と旧再建委は、対極的地位を占めていた。しかし、これは同一地平での対極でしかなかった。つまり、共に急進民主主義であったのだ。故に、急進民主主義の経済主義を清算し、マルクス・レーニン主義の獲得へ進んだ游撃派と急進民主主義のテロリズムを清算し、マルクス・レーニン主義の獲得へ進んだマルクス・レーニン主義派は、マルクス・レーニン主義の旗の下、思想、政治、組織路線で一致し、組織統合が可能であった。路線が全てを決定する。過去の出来事の事実関係だけに執着し、それがどのような政治の継続であったのかを見、総括しないならば、団結することは永遠に出来ない。われわれは、路線を第一とし、それを基礎に過去の様々な問題を解決し、〈革命の旗〉を戦取したのである。

労働者諸君、農民・学生諸君！

七四年八月游撃派は、旧再建委の「革命的止揚」を通じ、他方七五年二月マルクス・レーニン主義派が旧プロ革派との党内ー分派闘争を通じ、各々の結成が闘いとられ、別々の地点からマルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成の道を踏み出したのである。

游撃派は、一全総・二全総の組織化の中で、長崎前衛党における綱領・組織の欠如を暴き出し、「党の技術主義」と「盟約としての個的共同体的ブンド」を根底的に対象化し、批判し、「党建設における組織思想の内実」を獲得する理論的営為を推し進め、原則的資本主義批判において「労働手段すなわち生活源泉の領有者に対する労働者の経済的隷従が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨・精神的退廃および、政治的隷属の基底に横たわっている」という第一インター規約前文の見地を復権し、またプロレタリア階級と革命党について「党と階級の二元主義的固定化」を批判、総括し、「有産階級の団結せる力に対する闘争において、プロレタリアートが階級として立ち現われることができるのは、プロレタリアートが有産階級の手で作られた従来のあらゆる政党に対立する特別な政党を自らの手で構成する場合だけである。政党へのプロレタリアートの団結は、社会革命とその窮極の目的の勝利ー階級の廃止ーを確実なものとするための必要・不可欠なことがらである。」というマルクス・レーニン主義の見地・立場を築き上げた。つまり、一全総、二全総の中で游撃派は、マルクス・レーニン主義分派として自己を思想・政治・組織的に打ち固め、純化する、と同時に、ブンドの階級形成主義を総括し、ブンド総括の前進を闘い取ったのである。

しかし、一全総、二全総は、急進民主主義の資本主義批判を基本的に清算しつつも急進民主主義のブルジョア国家批判を残存させており、従って〈国家と革命〉の問題に対する実際の態度では、ブルジョア国家権力の打倒を日帝の対外政策に対する闘争、即ちその政策主体である政府に対する闘争に切り縮め、プロレタリア階級の階級闘争をプロ独・社会主義革命へ高め、組織していくことが放棄されていたし、また政治路線、特に国内路線において米帝追放の任務を全く欠落させていた。更には、反スタ・トロツキズム批判、毛沢東思想支持をあいまいにしていた。こうした諸点での弱点をもっていた。　故にブンド総括も部分的なものに止まっていた。三全総を経、「党の転換」を通じた四全総の組織化こそ、こうした諸弱点をえぐり出し、総括し、全面的にマルクス・レーニン主義・毛沢東思想＝反帝反社帝のプロレタリア革命路線を獲得する過程であった。

七七年の部落解放闘争における党的敗北の中で游撃派は「三全総以降の反帝戦略主義批判の不徹底性・不充分性」を容赦なく切開し、えぐり出し、これを「反スタ・トロツキズム・急進民主主義の清算と〝党の転換〟の闘い」と位置づけ、路線の全面的再構築へ立ち向っていった。第一に、三全総において提起された〈総蜂起路線〉を「資本主義批判の基本的眼目が正しくすえられていない。」「帝国主義の結果としての侵略反革命（戦争）や、排外主義に対置される『プロレタリアートの独自性』であるならば、……急進民主主義に転落する以外にない」と総括し、その根定にある急進民主主義のブルジョア国家批判を清算し、マルクス・レニーン主義のブルジョア国家批判にとってかえ、もって日本の国家権力の問題と日本革命の性質を具体的に分折することによって「米帝追放のスローガンを獲得し、　日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の国内路線を確立した。第二に七七年十・一四反覇権集会の闘いの地平を防衛・発展させ、反スタ・トロッキズム批判、毛沢東思想支持をいよいよ鮮明にし、反帝反社帝の思想武装を促し、強め、革共同との分水嶺を一層深く引ききり、同時にまた「現代世界の基本特徴は、史上三度目の『戦争と革命の時代』に突入していることである。」との当面する国際情勢の認識を整え、米・ソ二大超大国の覇権主義、全ての覇権主義に反対する反ソ反米反覇権闘争を支持し、これと国内路線を結合する政治路線を確立した。第三に、ＣＲＦに象徴される急進民主主義の組織路線を総括し「中央集権非合法党建設を要とした組織方針を確立」し、旧来の「過程としての戦術」から「全階級戦線に神経系のように張りめぐらされた工場細胞建設をもって、武装蜂起・プロ独・社会主義革命の勝利に向け『正規の攻囲戦』に本格的に着手する」という「計画としての戦術」へ戦術を転換する、と同時に、「地区党方式から工場細胞方式」へ党の型を転換した。第四に、第一から第三の転換は、ブンド総括と不可分に結びつき、党内討議・党派論戦をつうじブンド総括を深める中で闘い取られたのであ

り、かくてマルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成の党建設路線が確立されたのである。

第一から第四までの一切が四全総へ注ぎ込まれ、刻み込まれブンド系のマルクス・レーニン主義分派の統合に向けた主体的条件が形成され、仕上げられたのである。

マルクス・レーニン主義派は、七五年春に結成の経過、当面の任務、終局の目標を次のように明らかにした。

「我々は、一向＝西条フラクの職業革命家の組織の建設からの逃亡、解党主義への純化を粉砕し、十二名の同志達の遺志を引き継ぎ、マルクス・レーニン主義に立脚したプロレタリア革命路線の獲得、体系的非合法党創建を克ち取らなければならない。この偉大な事業は長く困難な道程をたどるだろう。しかし、我々は前進しなければならない。プロレタリア階級の経済的従属、賃金奴隷制からの解放に向けて」と。

マルクス・レーニン主義派の歩みは、この「偉大な事業」を階級闘争の鉄火の中で、苦闘の中で、少しづつ、確実に推し進めていく過程であった。

マルクス・レーニン主義派の前身である赤軍派「マルクス・レーニン主義」編集委員会第一回総会から同第二回総会＝マルクス・レーニル主義派第一回大会への時期は、連赤総括を基礎に六つのスローガンを軸に出発し、ブルジョア階級独裁との闘い、社帝派との闘い、急進民主主義の塩見一派との党派闘争、党内闘争という「四重対峙戦」に耐え、貫き、党的個性を確立すべく、ブンド総括の基本的観点を整え、全勢力を綱領草案の獲得に注ぎ込む時期であった。

この中で、基本的に「急進民主主義の清算、マルクス・レーニン主義の獲得」に成功する、と同時に、党内の反スタ・トロッキズムを整風し、毛沢東思想支持、反スタ・トロッキズム批判の態度を明らかにし、一方ではプロ革派の急進民主主義を通じた毛沢東思想の受容を、他方では毛沢東思想と反スタ・トロッキズムの折中主義を批判し、思想・政治路線の深化を闘い取っていった。更には、党内の一部にあったブンドに対する清算主義も整風し、ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドを結成しようという党建設路線が闘い取られた。

七七年二月マルクス・レーニン主義派第一回大会は、綱領草案・規約を満場一致で採択すると同時に、「名称の変更に関する決議」を可決した。

第二回大会に至る中でマルクス・レーニン主義派は、綱領草案を武器に一方では政治暴露・煽動・組織化を一定工業化し、革命的党活動の方法・形態の確立をめざし、他方では〈国家と革命〉〈戦争と革命〉の問題をめぐりブンド系諸派との論争を目的意識的に組織し、もって本格的に建党闘争に着手していった。こうして、労働者・勤労人民との結合と論戦を深め、路線と組織を鍛え、訓練し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの思想・政治路線、当面の国際・国内情勢認識を整え、確立していった。

七八年八月第二回大会は、かかる成果を打ち固めつつ、綱領草案を三点にわたり改正し、ブルジョア階級独裁の反動化を、即ファシズムと見る急進民主主義の「なし崩し（天皇制）ファシズム論」的傾向を清算し、このことと結びつけて政治報告の中で、ブルジョア議会制民主主義の下での議会主義としてプロレタリア階級を支配し、ブルジョア階級独裁を支え、執行している修正主義、現代修正主義・社帝に対する批判を強め、プロレタリア階級をマルクス・レーニン主義党に組織し、社会主義統一戦線を結成し、革命戦争・武装蜂起を目指す「計画としての戦術」を大胆に打ち出した。

第二回大会の成果をもってマルクス・レーニン主義派は、七八年二・二六三里塚闘争以降の日本階級闘争の歴史的転換を見据え、プロレタリア階級を政治舞台の前面へ押し上げるために自力更生の党建設を促し強める、と同時に、当時の〈共産主義と労働運動の結合〉の問題をめぐるブンド系の論争にわけいり一方ではプロ独・社会主義革命の宣伝・煽動を欠落させ、プロレタリア階級の階級闘争を民主主義闘争・経済闘争に限定する傾向を批判し、他方ではコミンテルン第七回大会の「労働者統一戦線」に解消する傾向を批判し、もって組織路線の転換を一層おし進め、職業革命家を中核とし、工場細胞を基層とする組織路線を確立した。

七五年から七九年の建党運動の試練の中でマルクス・レーニン主義派は、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成に向けた思想・政治路線を練り上げ、鍛え、「統合の六つのスローガン」に絞りこんだのである。

游撃派とマルクス・レーニン主義派の党建設の苦闘の全成果全内容は、各々の「統合の六つのスローガン」に刻みこまれている。

両派は「統合の六つのスローガン」即ち、①ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの結成、②急進民主主義の清算、マルクス・レーニン主義の獲得。反スタ・トロッキズム批判、毛沢東思想支持、③反ソ反米反覇権の国際路線と日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命を結合し、推進する、④当面する国際＝国内情勢を史上三度目の《戦争と革命の時代》との認識にたち、⑤プロ独・社会主義革命を宣伝・煽動し、民主主義闘争・経済闘争に注ぎこみ、プロレタリア階級を党に組織し、社会主義統一戦線を結成し、革命戦争・武装蜂起を目指す「計画としての戦術」、⑥職業革命家の組織を中核とし、工場細胞を基礎とする中央集権主義の党建設での一致を基礎に、綱領全体、革命的党活動全体の厳格な一致を目指し、逐にこの問題での一致を闘い取り、共産主義者同盟（革命の旗）第一回大会を開催し、綱領・規約の採択について、今、更に政治報告を採択することによって組織統合し、共産主義者同盟（革命の旗）の結成を戦取したのである。

第一部　ブンドを全面的に総括し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成へ

第一章　ブンド総括の今日的意義と総括観点

われわれは、かつてのブンド総括上の論争を、国家と革命の問題、戦争と革命の問題での論争から、更に革命党の戦術・組織の問題にまで押し拡げ、統合のための六条件を相互に提起することを通して、統合のためには今、何が必要なのかを明らかにし、広々とした統合のための論争の舞台を形成した。この六条件は、両派が統合に成功した段階において更に煮つめあげられたものになったが、基本的態度・観点はいささかの変更もない。それはブンドの総括論争の全歴史を対象化したものとして、今大会で採択された綱領草案・規約とともに重要な位置を占めている。まさにブンドの総括は、今日のわれわれの到達地平からのなで切り的批判ではなくして、歴史性を含めた上でのものでなければ、静止したものになり、今日の党建設に生かし切れるものではない。

われわれは、この総括を正反両面で正しく組織し、継承すべきものは継承し、清算すべきものは一切の躊躇なく清算するという態度を堅持した。とりわけ、第一次、第二次ブンドがめざした政治がどのようなものであり、それがどのような弱点によって貫かれえなかったのかを、共産主義者同盟が、階級闘争の前進に寄与し、そうであるが故に真に深い敗北を経験するに至ったという現実を見すえていくことと結びつけてとらえ返すことに他ならない。

まず、第一次、第二次ブンドを通じての、その積極的な意義の第一は、ブンドが現代修正主義に転落した日共との分岐・訣別をもって革命党建設の途に着いたように、常に日和見主義・改良主義との闘争を推し進めたこと。そして、特にプロレタリア階級独裁の観点を復権したように、端緒的ではあれ反帝闘争と反修闘争の結びつきをもっていたことである。第二にハンガリー動乱によって触発された革共同の「人間解放の論理」ではなく、階級闘争の現実に根ざしつつ、その実践のなかでマルクス・レーニン主義の復権を行なおうとし、階級闘争を組織し、前進させるなかで自らの革命的世界観を打ち立てようとしたことである。第三には、新たな世界認識を形成したことである。それは、反帝民族解放闘争の新たな高揚を、戦後帝国主義世界体制の動揺との関連でとらえ、世界革命のなかに位置づけ、帝国主義本国階級闘争を民族解放闘争への連帯としてとらえ、反帝国際主義の基調を明らかにしたことである。そして、民族解放闘争から社会主義革命への方途を明らかにし、更には国家権力と諸階級相互の関係をつかみ出し、現実の革命闘争に立脚して世界革命の動因を、三ブロックの革命勢力の結合として提示したことである。まさにこれこそ、第一次、第二次ブンドを貫くブンドのマルクス・レーニン主義の要素であり、これをより拡大・発展させ、その部分性を正しく総括し、全体化・豊富化しなければならない。まさに、われわれの闘いとはこのブンドの急進民主主義、反スタ・トロツキズムを大胆に清算し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想のプロレタリア革命路線を打ちたてることによって、党建設に勝利していくことである。両派の統合の闘いの勝利こそ、この事業の着手に他ならない。

今日、ブンドの革命的伝統を清算し、修正主義へ転落していった国際主義派や塩見、あるいは、ブンドを墨守し、無総括で〝栄光〟を夢見ている反スタトロツキズムの諸君の失敗を充分に教訓化して、われわれの態度を明らかにしよう。

第二章　第一次ブンドの路線の総括

a　第一次ブンドの継承すべき革命的意義

第一次ブンドは、六〇年安保闘争を指導し、その先頭で闘いを担いつつも、党建設に勝利しえず、解体した。しかしながら、第一次ブンドが階級闘争全体に与えた影響を無視することはできない。われわれは、ブンド総括の問題では、第一次ブンドが突き出した問題を正しく受けとめ教訓化し、継承させるとともに、その弱点を明らかにし、第一次、第二次ブンドの共通性とその相対的に独自な観点を踏まえて、総括する必要がある。

第一次ブンドは、現代修正主義に転落した日共から、党内反対派というあいまいさを排して訣別し、革命党建設を開始した。ブンドが日共によって投げ捨てられたマルクス・レーニン主義の原則を復権し、それを現実の階級闘争の中で生かし切らんとした観点は、次のように要約される。

第一に、共産主義者の任務、つまり資本主義生産関係を廃絶

して共産主義生産関係を打ちたてることを明らかにしたことである。それは第三次綱領草案の冒頭が「I資本主義と共産主義ブルジョア権力を打倒し、プロレタリア独裁を樹立せよ」と提起されているように、資本主義批判と革命の根本問題が示されていることをみれば、当時のブンドのかまえは明らかになる。第二に、フルシチョフの登場以降、国際共産主義運動が現代修正主義にむしばまれ、それに影響されて、日共をはじめとしてブルジョア民族主義と議会主義になだれを打って転落しているときに、議会主義を批判し、暴力革命でブルジョア国家権力を打倒して、プロレタリア階級独裁を樹立する観点を打ち出していることである。第三に、日共の反独占人民民主主義革命から社会主義革命への二段階戦略の修正主義を批判して、日帝打倒・社会主義革命の政治路線を打ち出したことである。第四に、国家権力と諸階級の相互関係、とりわけプロレタリア階級の独自性ープロレタリア階級の独自の利害をつきだし、日共がプロレタリア階級の独自性を他階級、とりわけ小ブルジョアの利害に従属させ、諸階級、層と同一の地平にひきずりおろし、プロレタリア階級を支配階級へと高めあげる闘いを放棄したことに対して批判したことである。その批判・克服の観点を第三次綱領草案は次のようにいっている。「プロレレタリアートは、この闘争のなかで農民をはじめとした中間的諸階層を味方につける現実的努力をはからねばならない。しかしプロレタリアートは、ブルジョアジーに対する闘争において自己の階級的力量以外に基本的には何もたのむことはできない。プロレタリアートが独力でも非妥協的に闘うとき、はじめて農民をはじめとした中間諸階層もプロレタリアートに味方する可能性が生まれるであろう」と。

以上の問題を明確にしたところに、第一次ブンドが安保闘争の最前線で闘い、階級闘争を牽引しえた根拠が存在しており、まさに、われわれはこの観点を積極的に評価し、継承するものである。

b　第一次ブンドのえぐり出すべき弱点

日本革命の政治路線を日帝打倒・社会主義革命として正しく打ち出したのであるが、この強さと表裏一体をなして対外関係の問題、日本革命の権力問題、党建設上の問題、そして思想路線に重大な弱点を含んでいたのである。

まず第一次ブンドは、現代修正主義の規定を世界革命の放棄による一国社会主義建設においており、同時に社会主義の規準を価値法則の存在の有無に求めており、ソ連をスターリン主義官僚の支配する歪められた過渡期と規定していた。この規定によって、それ故に、帝国主義ブルジョアジーの全世界的打倒の過程でスターリン主義官僚打倒の補足政治革命を完遂することが要求されているとする。まさにここにトロツキズムを受容した第一次ブンドの限界が存在している。日共現代修正主義から訣別したブンドにとって真に問われたのは、日共の理論にかわってスターリンの反対者としてのトロツキーの復権ではなくして、マルクス・レーニン主義の復権が問われたのである。特にソ連論ー社会主義論での真の復権が問われたのである。それは、今日的な観点からすれば、プロレタリア階級独裁を堅持した社会主義継続革命の重要性をはっきりと押し出すべきであったといえる。この第一次ブンドの社会主義論の問題の立て方は、当然にも、帝国主義と民族植民地問題の把握にもあらわれざるをえず、レーニン主義の復権ではなくしてトロツキズムの受容として、その弱点は拡大したといえる。それは、帝国主義とプロレタリア共産主義革命の時代における民族民主主義革命の正しい評価が打ち立てられないことにも示されている。たとえば、「後進国における民族革命のなかで自己のブルジョア的発展をとげようとする民族ブルジョアジーも必然的に国家資本主義的な政策をとるようになった。プロレタリア運動は、ここでも明確に自己の権力の確立の任務に直面しているのである。植民地の民族革命運動も本国のプロレタリア革命とともに、単一のプロレタリア革命を形成してこそ勝利の道はひらかれるのである」と、後進国（植民地従属国）の民族解放闘争の中の民族ブルジョアジーの、プロレタリア階級との対立（闘争）面を強調して協調（連合）面を切り捨て、民族民主主義革命の前途を、帝国主義本国のプロレタリア革命の帰すうにのみ求めているのである。そしてまた「帝国主義との協調に夢やぶれたスターリン主義官僚は、この危機にあってソ連邦国境安全のためコミンフォルムを結成し、ブルジョア支配に対する階級闘争を民族独立と民族主権の擁護の闘争にすりかえる」としていることでも明らかなように、民族解放闘争の世界史的登場の根拠を一層掘り下げて解明しえなかった。それは、帝国主義本国のプロレタリア階級の闘争だけを世界革命の主力軍とみなしていることに決定的な根拠があった。そして、帝国主義の運動を資本の論理としてみ、「資本が生みだした世界市場は、全世界を一つの共同体に組織する可能性を生みだした」として民族解放闘争の世界史的登場の根拠を、資本主義の全世界的な波及がもたらしたものとして理解（認識）していたといえる。

植民地従属国の民族解放闘争において、プロレタリア階級を中心として共産党を組織し、その党の指導を通じて農民と同盟し、民族ブルジョアジーを引きつけて、反帝民族解放民主主義革命の勝利から社会主義革命の勝利へと導く段階性と連続性をつかみとることこそが重要であった。だがブンドは、植民地従属国のこの革命は、先進国のプロレタリア革命と単一のプロレタリア革命を形成することによってのみ勝利がかちとられ、それは同時に社会主義論の問題においても、先進国（帝国主義本国）の工業力との結合によってはじめて社会主義建設が可能だとする見地に立っていた。たとえば「一国におけるプロレタリア革命は、全世界プロレタリア革命の直接の導火線となり、プ

ロレタリアートは全世界的にのみ勝利しうることはますます明らかとなる。後進諸国のプロレタリアートも先進諸国のプロレタリアートの援助によって、直接に社会主義生産を組織することが可能になる。プロレタリア革命を一民族社会の域内での自足的なものと考える幻想は、帝国主義社会の現実のまえに、決定的に破綻する」としているが、実際の革命闘争は、このような立論の無効性を証明している。（ここには、何点かの問題が残されているが、それは第二次ブンドの章で再展開したい）

この点について、われわれは「植民地従属国諸国においてはプロレタリア階級、農民を中心とした帝国主義に対する闘争もまた大きく発展し、国際共産党と国際プロレタリア階級の革命運動と密接に結びつくことによって世界プロレタリア共産主義革命の一環に転化した」（綱領草案）としてコミンテルン二回大会のレーニン・テーゼの重要性を確認しつつ、更に今日では、「民族解放・人民民主主義革命から社会主義革命へ推し進めて勝利した中国革命を規範とする民族解放闘争がアジアの社会主義国と結合し、前進し、世界革命の主力軍となっている」（同）ことをはっきりと確認しえるだろう。すなわち、第一次ブンドの指摘を越えはるかに成長しており、第二次ブンドは、こういった現実を前に、革共同のアジアの社会主義国・民族解放闘争への敵対に対して「ベトナム革命戦争勝利」を掲げ、その闘いとの連帯を帝国主義本国プロレタリア階級・人民の第一級の任務とすることを通じて、国際路線の側面で第一次ブンドの限界を実践的に突き破り、三ブロック革命の結合の観点を突き出したのである。

日本革命の権力問題について、第一次ブンドは大きな弱点を有していた。それは権力問題に対する急進民主主義的態度であり、とりわけ、米帝の問題を日本の国家と権力問題において厳格につかみ出しえていなかった点にある。そしてこの弱点は、ブンドの政治を急進民主主義政治へ傾斜させる要因ともなり、第二次ブンド―七回大会へと結びつき、今日、われわれが日帝打倒・社会主義革命路線に、米帝追放を正しく位置づけ、克服するまで長期にわたってブンドの基調をなしていた。

第一次ブンドは、日共から訣別し、日共現代修正主義の二つの敵（米日反動勢力）論を批判するにあたって、日本資本主義を帝国主義と規定する正しい側面を突き出しつつも、一方で小野義彦等の「日帝自立論」に依拠していた。「一応政治安定をかちとった日本ブルジョアジーは、アメリカブルジョアジーとの間に帝国主義的な階級同盟を結び、経済力量を強化して、ふたたび海外市場への進出と一大帝国主義への飛躍を夢見ている」。そして「彼らは自己の政治、軍事両面でも一流の帝国主義強国としての体制をかため、東南アジアなどへ資本輸出をはじめとした経済進出をめざしている。」として情勢が把握され、更には「資本家階級は、アメリカ帝国主義との同盟を更に対等なものに修正し、自己の階級支配の維持の重要な要因としながら自力で進出を開始している」と日帝を規定している。

この第一次ブンドの日本資本主義分析―日本帝国主義の規定は、日本のブルジョア階級の意図をはっきりとつかみ出し、それと日米安保体制の問題を関連づけたことで、凡百の修正主義者に対しては圧倒的な優位性をもっていた。しかし、この点の強調は、現実に日帝は「復活」したが、それはあくまでも米帝を後楯としたものであることをあいまいにした。

たしかに米帝による日帝の支配は、五〇年代を通して、量的かつ同時に質的変化をもたらしたが、単純に日帝が米帝から自立したと考えるのは誤りである。今日でも、五〇年代と比重は変わったとしても、日本の国家権力、とりわけ自衛隊をめぐる米（帝）軍の位置と、米軍および基地の存在でも明らかなように、日帝は米帝に対する従属的同盟関係をとり結んでいる。安保条約は、日帝との間の帝国主義的同盟関係を示しているとはいえ、その帝国主義相互の対立と協商の側面、すなわち帝国主義不均等発展による争奪の面のみを強調し、その従属的側面を欠落させてとらえたことは、当時のブンドが「日帝の自立・従属論争」の枠内に存在し、客観的に規定されていたことによる。この米帝追放の任務の欠落は、日共に対する批判、つまり反米反独占人民民主主義革命を批判し、日本革命の性質を社会主義革命として正しく位置づけ、突き出しつつも一方で、米帝の問題を日本プロレタリア社会主義革命の権力問題として正しく位置づけ、対象化しえなかったことを示している。

ブンドのめざした政治

次にブンドがめざした政治を検討してみよう。

それは、冒頭明らかにしたように、第一次ブンドは、共産主義者の根本任務を突き出すと同時に、原則資本主義批判の重要性を明らかにするというマルクス・レーニン主義の原則の復権を図からんとした。われわれは、この観点が帝国主義批判とどのように結びついているのかをみなければならない。

第一次ブンドは、帝国主義のあらたな延命の方式を国家独占資本主義としてとらえ、その国家独占資本主義の巨大な発展した生産力を、資本主義がみずから自由な運動様式のなかに包摂しえなくなったとし、米帝や西独帝による自己金融による「乗り切り」を日帝にもあてはめる。つまり「支配権を握る株主は、中小資本を無力化し、会社の利益をかならずしも全部配当にあてることなく、会社の内部に留保し、固定資本の巨大化にともなう莫大な資金を調達する機構としてそれを確立する。この自己金融の結果、資金は資本市場の制約から解放されて、企業拡張をきわめて容易のものにすると同時に、独占の形式は極度に進行する。」という自己金融の蓄積様式を明らかにする。そしてこの「国家機構によって補完された自己金融による蓄積方式の展開は、株式資本の発展したものであり、資本所有と経営機能の新らたな関係にともなってあたかも資本の社会化が行なわれ

ているような幻想を生み出す。……私的資本の限界を越え、資本主義再生産に不可欠な部門は、会社所有から国家所有に移される。私的資本は、このような国家の直接の介入によってますます強化される」として当時の日本資本主義の諸特徴を示している。第一次ブンドがこの自己金融論で明らかにせんとした眼目は米帝と西欧帝に自己金融の面で遅れをとった日帝が自己を確立するためにこの蓄積様式をとり入れ、一大合理化を推進せんとし、これがためにプロレタリアートの反抗がますます増大し、ブルジョアジーの攻勢は、プロレタリア階級・人民の民主主義的権利さえも押しつぶさんとしている、とブルジョアジーの政策（六〇年安保をめぐる）に対する阻止闘争を位置づけることに存在していた。それ故、六〇年安保闘争を政治決戦として闘い抜き、政策阻止闘争から階級決戦を準備するというブンドの「反帝戦略主義」を裏付けるものであった。とくに帝国主義の政策的環がどこにあり、その政策の主体が日帝であるのか米帝であるのかを問題にし、その政策の環を打ち破るものとして諸闘争を政策阻止闘争として位置づけることによって急進民主主義政治に陥った。この限界は、第二次ブンドにも多少の強弱はあれ、克服されないままに続いたのである。

最後に、党建設の問題を検討しよう。第一次ブンドは〝真のプロレタリア前衛を組織し共産主義者同盟を強化せよ〟の冒頭で次のように提起している。「労働者階級は、自然発生性によっているあいだは、自己を解放することができない。労働者の意識は、資本の下ではただちに単一の階級意識によって貫かれることはない。したがって労働者階級は自己を解放するために、階級全体から組織的に独立し、最高の階級意識によって武装された前衛組織の指導によって、はじめて革命を達成することができる」（第三次綱領草案）はたしてそうか。第一次ブンドは、資本の下で労働者が個々分断されており、労働者の即自的編成のままでは、階級的意識を高めることができないので「階級全体から組織的に独立」することの必要を説いている。が、この党組織観は、ブンドの資本主義批判の反映であり、第一次ブンドの「労働者階級の日々の労働はただ資本家階級の富をふやすだけである。……労働者は働くことによってますます自らを資本の鉄のくびきにしばりつけるのだ」（同）という疎外革命論の影響を多分に受けており、資本主義が生産の社会化によって労働者を結合させ、労働者階級のその経済的地位からして、資本主義の墓掘人として日々成長していくのだという観点が欠落されている。それ故、共産主義と労働運動の結合が彼岸化され、党―階級二元論の下、小ブルジョア組織観に不断に道を開くことになるのである。

労働者階級が資本主義の即自的編成の下ではそれに規定される階級意識でしかなかったとしても、そのことを批判的に摘出するだけでは、単に資本主義的分業の止揚を目指すことにとどまり、労働者階級を支配階級へと立め上げる闘いに結びつけることができない。この党組織観の「党―階級二元論」は、情勢

や党建設の困難性に突きあたったときに、党そのものの〝純化〟になったり、〝階級〟に融解してしまうという党建設上のジグザグを生み出すのである。この弱点は、克服されないままに第二次ブンドに引きつがれ、第二次ブンドはこの矛盾を党と階級の〝中間組織〟を次々に生み出すということで解決せんとした。

まさに党組織問題のかなめは、次のようにたてられなければならない。プロレタリア階級の解放は、プロレタリア階級自身の事業であり、そのためにプロレタリア階級をブルジョア政党に対立する独自の政党に組織し、プロレタリア階級の階級闘争の一切のあらわれを指導し、搾取者の利益と被搾取者の利益とが和解しえないように対立していることをプロレタリア階級のまえに暴露し、きたるべき社会革命の歴史的意義とその諸条件を明らかにすることでなければならない。（第三部参照）

c　第二次ブンドは第一次ブンドをどう総括したか

現代修正主義の日共が投げ捨てたマルクス・レーニン主義の復権に偉大な貢献をした第一次ブンドの革命性が生み出した新生事物は、また一方で歴史的制約性による弱さを内包していた。第一次ブンドがめざしたものを、そしてその革命的伝統を継承せんとして出発した第二次ブンドは、旧同盟を次のように総括している。

「共産主義者同盟は、例えば安保闘争において……大衆の意識を運動として実現させ、意識の深化をダイナミズムとして外化させてきたのであり、これこそ共産主義者同盟の最もすぐれた点であった。

しかしそれが意識化されて推し進められておらず多分に無意識的であったこと、第二に意識に〈運動の形態〉を与えるということにおいて、その〈運動の形態〉は少なくとも、戦術・スローガン・組織体制の三点を含まねばならないにもかかわらず、それらをいわゆる戦術の提起のみに矮小化したこと、第三に獲得すべき共産主義に関する同盟の一致の浅さからくるところであるが、階級意識の外化としてかちとる〈現在〉の運動の具体的形態が〈未来〉から規定され、採用されるのではなく、未来が現在の運動の形態から直接に展望、構成される傾向をもったことである。

旧同盟に決定的に欠落していたことは、このプロレタリアの階級形成（→ソビェト）を指導する過程における党の独自的活動の重要性である。党活動は大衆闘争内部における反帝国主義のヘゲモニーをますます拡大しつつ、これを指導する任務を持っている。だが旧同盟は、この階級形成の意義を根底的に把握しえず、党活動を大衆運動内部における活動＝戦術指導に一面化させたのであり、安保闘争の挫折後も、この一面化の傾向を再生産するものになった」（七回大会報告集）

この総括では、まだ第一次ブンドを正反両面から正しく評価

し切れていない。特に急進民主主義の政治と階級形成のヘゲモニーとしての党建設の二つの問題が正しく総括しえないところに、第二次ブンドの党的敗北の遠因が存在しているといえよう。それ故、かかる弱点を内包した第二次ブンドの闘いとその総括を次章の展開の中で明らかにしたい。

第三章　第二次ブンドの路線と党的敗北

a　第二次ブンドの革命的意義

第二次ブンドは、第一次ブンドの国際路線の限界の突破を革命闘争の現実の実践の中で獲得してきた。特に革共同のアジアの社会主義国・民族解放闘争への敵対に抗して、ベトナム革命戦争勝利、安保―ＮＡＴＯ粉砕を掲げて、米帝の侵略反革命戦争とそれに加担しながら世界再分割―侵略反革命に進み出した日帝に対する反戦反帝闘争として闘い、反帝国際主義の内容を鮮明に突き出した。

七回大会報告は「任務」で「世界同時革命の達成を先進国、後進国、労働者国家の階級闘争の三つの有機的結合をもって同時に追求する方針が、我々の世界革命の基本方針であり、日本革命もこの国際階級闘争の任務の一環として闘い抜かねばならない」と過渡期世界の三ブロック革命の結合を提起した。この国際路線は、アジアの社会主義国、民族解放闘争と結合して、日本のプロレタリア階級独裁・社会主義革命を推進せんとするものであり、この革命性は継承されなければならない。第二次ブンドは、このように基本的には階級闘争の前進に寄与しうる観点を打ち出したのであるが、第一次ブンドの弱点を全的に克服するものとはなりえず、部分的に残存させ、自らが推し進めた階級闘争の前進の中で、逆にそれを拡大する要素をもっていた。われわれはそれをえぐり出さなければならない。

b　第二次ブンドのえぐり出すべき弱点

第二次ブンドは、プロレタリア国際主義を「三ブロック階級闘争を世界同時革命として結合すること」において、その基本的任務を五つのスローガンとして提起している。一、帝国主義打倒・世界革命をめざすプロレタリア独裁の樹立！　二、帝国主義政府の侵略と抑圧と反革命粉砕！　三、民族解放・社会主義革命！　四、労働者国家人民への一切の反革命粉砕！　五、世界革命を放棄し、プロ独をさん奪する労働者国家の党官僚打

倒！がそれである。

ここでは、以下の点を問題にし、総括しなければならない。その第一は、今日もまだ論争が継続している世界同時革命の問題である。第二次ブンドの世界同時革命の主張は、次の三点によって基礎づけられている。①帝国主義の危機の深化は、不均等発展によって世界的＝同時的であり、現代過渡期世界では、中ソに対する政治的軍事的同盟の下での、後進国への侵略と対立の激化として進行するが、他方帝国主義の世界支配がベトナム解放闘争によって突き破られることによって、危機の発現が同時的たらざるをえない。②社会主義への移行は、唯一世界的＝同時的にのみ可能であり、従って「労働者国家の階級闘争」も、「民族解放・社会主義革命」も、世界同時革命への永続性としてあり、帝国主義の世界再分割―侵略・抑圧・反革命と衝突して階級危機を迎えざるをえない。③帝国主義の打倒も、世界的＝同時的打倒を追求してこそ初めて可能となり、この帝国主義の世界的＝同時的打倒こそ、最も重要な環である、としている。この主張は、後に、三ブロック階級闘争を世界同時革命として単一に統合する要は世界プロ独であり、世界プロ独を組織する闘いとして、帝国主義の侵略反革命と国際的人民戦線派（もしくは社会帝国主義の武装反革命）に対峙し、各国の権力闘争を闘わねばならないと、「発展」させられた。これは、今日まで多くのブンド系の諸君の中に引き継がれている。そうした諸君は、〈帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代〉の権力問題＝世界プロ独とし、そうすることによって、世界革命の異った発展段階・異った時代を直接に現在にあてはめるか、各国の権力問題を事実上昇天させてしまうのである。しかし、現代は依然として、二十世紀初頭に始まり、ロシア十月革命で公然のものとなった〈帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代〉であり、この時代は、四つの基本矛盾の作用の下での三ブロック革命の勝利・結合としてしかありえない。すなわち、帝国主義国では、ブルジョア階級独裁―自国帝国主義の打倒を基本とするプロ独・社会主義革命の実行であり、植民地従属国では、民族民主主義革命から社会主義革命へ進む二段階の連続革命であり、社会主義国では、プロ独と継続革命を堅持して、世界革命の砦として強化し抜くことであり、現在も依然としてそうである。

第二次ブンドの世界同時革命＝世界プロ独、その直接的実現を担うものとしての各国の権力闘争という提起は、①一国社会主義不可能論に基き、又現代修正主義の起源を一国社会主義建設そのものに求めることから、レーニンの「社会主義革命の勝利は、はじめは数カ国もしくは一国ででも可能である」の否定にまで導くことによって基礎づけられており、②帝国主義の打倒がプロ独・社会主義革命としてではなく、侵略・抑圧・反革命粉砕、すなわち対外政治との闘争にのみ狭められ、一面化され、だから資本主義的生産関係を廃止して社会主義にとってかえることではなく、帝国主義がもたらす国際関係―諸民族・諸

国家の相互関係の変革に一面化され、それを実現するものとして世界革命が展望されていること（ここから国際階級闘争の環が、帝国主義の侵略・抑圧・反革命との対決であるという、革命に並列された第二スローガンに示されている指針が導かれている。）③従って、各国革命を世界革命の有機的一構成部分として見るのではなく、各国革命＝世界革命、世界革命の場所的実現としてみなされているのであり、④だから当面する各国の任務と性質を、その国の国家と社会の性質に基いて明らかにするのではなく、「世界革命の未来からの逆規定」づけんとするものであり、⑤とくに、日本革命における米帝追放の任務を正しく位置づけられないことによって、それを直接に世界革命の実現をなす米帝打倒の闘いと規定することによっているのである。ここに、反スタ・トロツキズムの今日的な影響が急進民主主義と分かち難く結びついて現われているといわねばならない。（又こういうことから、「三つの世界論」や社会主義国の国家外交に対する全く的はずれな批判や評価も生み出されている。）現代を直接に「世界プロ独をめぐる世界プロレタリア共産主義革命の時代」と規定している紅旗派の混迷の根拠もここにある。

第二に、民族解放闘争についてである。これは疑いもなく、第一次ブンドに対する第二次ブンドの発展と前進であった。「後進国革命は、社会主義革命の性格を持つと同時に、帝国主義の侵略反革命と対決して民族解放をかちとる国際階級闘争の性格をもっている。従って後進国革命は、帝国主義心臓部の階級闘争と同時に結合した国際階級闘争として闘わなければ、勝利的結着を得られない性格としてある。」として「民族解放・社会主義革命」を提起している。それは、民族民主主義革命から社会主義革命への段階性と連続性と把握しきれずに、民族解放闘争そのものの性格を社会主義革命とイコールに把握した側面はあったとしても、今日のわれわれの到達点への道を拓いたものとしてあった。だが、他ならぬこの段階性と連続性の把握の欠如が、すでに述べた世界同時革命の主張の基礎にはらまれている諸観点と結びつくことによって、植民地従属国の革命は、帝国主義の世界的同時的打倒―社会主義への世界的同時的移行の決定者となる先進国革命と結合することなしには、社会主義建設へ前進し、勝利していくことはできないという、「先進国革命主義」の偏向、すなわち、先進国革命に植民地従属国の革命を従属させていく偏向が生み出されている。

第三に、社会主義継続革命とソ連論についてである。第二次ブンドは、中国とソ連を同一視して「労働者国家」と規定しており、非資本主義社会（過渡期社会　）と社会の性質を規定して、「帝国主義の包囲下でプロレタリアが権力を握った過渡期社会は、一定期間国家を形成せざるをえない。従って、労働者国家は、旧社会の母斑と帝国主義の包囲のために『世界革命後の過渡期世界のあるべき規準』から見れば、常に歪められざるをえない」として、労働者国家を歪めている党官僚の打倒を呼びかける。ここでは、何よりも、ソ連及び中国を、一国社会主義

建設による世界革命の放棄としての修正主義としていること、そして「労働者国家」＝非資本主義群としてとらえ、社会主義でもなければ資本主義でもないという、党官僚の支配する第三の範疇としていることを指摘しなければならない。つまり、ソ連において資本主義的要素の残存と復活の中で、プロ独と社会主義継続革命を放棄した現代修正主義が党と国家の大権を奪い取ることによって、ブルジョア階級独裁にとってかわり、資本主義が全面的に復活したこと、この「党官僚」とは他ならぬ新たなブルジョア階級であり、しかも官僚独占ブルジョア階級であること、従ってソ連が社会帝国主義に転落したことを見ていないのである。第一次ブンドの段階では、フルシチョフの登場から時を経ていず、ハンガリー動乱からその変化を見出すという段階であったが、第二次ブンドにとっては、中ソ論争・中国プロ文革・ソ連のチェコ侵略の根拠を明らかにすることによって明確に出来る条件は生み出されていた。この社会帝国主義に対する無理解は、政治的にはソ社帝を美化し、「帝国主義に対する日和見主義」として、とみに覇権主義を強めるソ社帝を尻押しする結果に導いていく。これは、現代修正主義の根拠をプロレタリア階級独裁と社会主義継続革命の放棄に求めるのではなく、一国社会主義建設に求めることと不可分に結びついており、従って中国プロ文革に対しても、この階級闘争が何をめぐる階級闘争であるかをつかむことができずに、対外路線―帝国主義に対する戦闘性と反官僚闘争として評価する一面性を持たずにはおかなかった。そしてこのことは日本革命においても、日帝打倒を主張しつつも、革命の政治目的・性質と任務、つまりプロレタリア階級独裁を樹立して社会主義革命を実行することをあいまいにし、それを直接に世界革命に、更には世界プロ独に解消するものとして現われざるをえなかった。その意味では、プロレタリア階級独裁・社会主義革命の口先での承認、実際での放棄になっている。

この点での理論的かつ実践的突破は、今日のブンド総括の一根本問題であり、七回大会を墨守したり、無総括の諸君は、この観点にしがみつき、マルクス・レーニン主義の側面さえ投げ捨てて、反スタ・トロツキズムの温存・助長に力を貸し、また急進民主主義を一層固定化せざるをえないのである。

帝国主義批判・権力問題に対する急進民主主義と「過程としての戦術」

七回大会報告は、「情勢」の第三章帝国主義の侵略反革命に抗し　国際階級危機を世界革命に転化せよ！　で次のように提起している。「①東洋における米帝の戦略は、アジア市場に拡大された日帝の位置を承認し、日帝にアジア支配の一部を基本的に対立をもたらさない限界で認めることによって、米帝のヘゲモニーの下に、反革命同盟に体制的に組み込み、対中共軍事戦略を築くことであった。②日帝にとって、東南アジア市場は、死活をかけた利害をもっていた。六〇年安保で外交路線上の相

対的独自性を要求するまでに成長した日帝は、日韓条約を転機として独自の世界戦略をアジアにしぼった。帝国主義世界の再編が破綻する過程で支配力を弱め、後退する米帝に代って、日帝が日韓を突破口としてアジアに進出を開始、五〇年代後半から六〇年代前半にかけて築き拡大したアジア商品市場シェアを更に拡大し、原材料資源地を政治的に安定確保することが、独自の利害であった。日帝の独自の利害、すなわち東南アジア路線とベトナム解放闘争は真向うから対立した。日帝は独自的利害から日米反革命同盟に加担した。③日米両帝国主義の不均等発展は日帝のアジアにおける地理的位置、すなわちEECのように連合する同格の帝国主義を持たぬという条件に規定されて、六〇年安保から日韓条約を経て七〇年安保にいたる過程にみられるような競合協調の道をとり、西ヨーロッパ帝国主義とは異った発現形態をとった。」

この第三章の戦略スローガンに提起されているところに第二次ブンドの急進民主主義政治が体現されている。つまり、日帝の対外路線、急進民主主義政治が体現されている。日帝の対外路線、軍事外交路線の暴露に重点を置き、帝国主義を対外政策の体系としてみることによって、日帝の侵略反革命阻止を実力闘争として闘うこと＝権力闘争と訴えているのである。

それは、三ブロックの階級闘争を結び、当面の環をベトナム反戦闘争として「七〇年安保を国際反帝闘争の一大決戦として闘い、プロレタリア革命と世界革命の展望を切り拓くのである」と提起して、当面の反米帝の国際闘争と「日帝打倒・安保粉砕」の国際路線の結合による「世界同時革命の意識的追求としての日本革命」をめざした。

これは、アジアの社会主義国・民族解放闘争を支持し、これと日帝打倒・社会主義革命路線の結合をおしはかり、その結び目として反米帝の問題をとらえこまんとするものであり、第一次ブンドからの前進を示すものであったが、ここでも第一次ブンドの弱点を全的に克服するものになりえず、階級闘争の前進の中で一層拡大する要素をもっていた。

それ故、帝国主義を侵略反革命の対外政策の体制とみなして、それを実力で打ち破ることを、すなわち、権力闘争とする、帝国主義批判と権力問題に対する急進民主主義に端的に刻印されている。（従ってその闘争の最高目標は、「政策の主体、政策の執行機関としての政府」打倒とならざるをえない）そしてこの限りにおいて、米帝の問題を「権力問題の一環」にとらえこまんとしたのであり、このことが「世界同時革命」と結びついて、日・米の侵略反革命の軍事―外交政策の体制＝日米軍事同盟粉砕から、日米帝同時打倒＝世界同時革命の場所的実現というように歪められざるをえなかったのである。（これは後に、自国政府打倒・国際反革命軍＝安保軍粉砕や、日帝打倒・国際反革命軍事体系粉砕等、様々なバリエーションをもって主張されている）

だから、第二次ブンドの政治は、帝国主義の対外政治に対する闘争に重心を据えたが、政治の中でも最も本質的な、根本的なものである国家権力の問題そのものをとらえ、それを全中心に据え、他の一切をそれに結合・従属させるというものではなかったのである。それゆえ又、国際路線と国内路線を同一視し、相互に解消し、国際人民闘争の大方向と日本革命の政治路線の正しい統一・結合が闘いとれず、その国際主義を、超国際主義の空論へ、すなわち、単一の（性格の）世界革命戦争や、むしろ一国主義への水路をなす世界革命の場所的実現としての日本革命へと導いたのである。第二次ブンドは、このような志向に、侵略反革命と結びついた国内での反動と抑圧の強化＝「帝国主義的統治機構への全社会的再編」に対する闘いの組織化を結合させて、「日本全体を日米軍事同盟に反対する攻勢の波で埋め尽し」、三ブロック階級闘争の前面で安保粉砕闘争を押し拡げるとした。この点でも、対外政策に対する闘いと国内政治に対する闘いを、他ならぬ日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をめざす闘い、プロレタリア階級独裁の準備へと結合・従属させ、指導し抜くことではなくて、民主主義闘争の戦闘的発展を目的化していることが示されている。すなわち、ブルジョア階級独裁をプロレタリア階級・被搾取大衆にとっての民主主義の否定に一面化し、その反動化との闘争、プロレタリア階級独裁をプロレタリア階級・被搾取大衆＝多数者の民主主義の実現に一面化し、後のなし崩しファシズム論に見られる如く、権力問題を不断に統治形態の問題に一面化する傾向を孕んでいたのである。

以上からして、第二次ブンドは、反帝と結びついた反修闘争も、反戦反帝闘争の左派性を競う戦術的分岐としてしか組織することができなかった。これは、七回大会の第一次ブンド総括の「党活動が大衆闘争内部における反帝国主義のヘゲモニーをますます拡大する」指導が欠落していたとする見地と不可分に結びついており、その後の「なし崩しファシズム論」に代表される戦術思想、つまり「反帝闘争」「反帝ヘゲモニー」の「戦略・戦術」として体系化されている。すなわち、経済闘争、民主主義闘争の戦闘化の延長上にプロ独・社会主義革命を展望し、この戦闘化を大衆闘争の自衛武装の発展として、「社会主義・共産主義の未来から現在をみる」立場で いろいろ意味付与し、民主主義闘争の暴力的抑圧を「なし崩しファシズム」とみ（「プロレタリア階級の階級闘争を現存の秩序内に抑圧し、賃金奴隷制に暴力的にしばりつけておくブルジョア階級の階級支配の機関・組織された暴力としてのブルジョア階級独裁」が露わとなることをファシズムとみることによって、逆にブルジョア民主主義を何か別のものとして美化することにつながっている）、この衝突が「ファシズムかプロ独か」へと到らざるをえないとする見地だったのである。そして社共を、「社共はこのような攻撃の前に無力な人民戦線派」と批判することによって、結局、社共に、経済闘争、民主主義闘争の戦闘化、そのための指導の優位性＝反政府闘争のヘゲモニー争奪でもって対決していたと

言わねばならない。これは〈階級形成のヘゲモニーとしての党〉の「過程としての戦術」であり、社会主義と労働運動の分離である。これでは労働者階級を支配階級へと高めあげる　独自の政党に組織し、結集させる必要がなくなるのであり、労働者階級を首尾一貫してプロレタリア階級独裁へ準備させ、教育し、訓練していくことはできない。これを「計画としての戦術」にとってかえ、プロ独・社会主義革命の宣伝・煽動を労働者階級の中に持ちこみ、労働者階級の階級闘争の一切の現われを、プロ独・社会主義革命へ指導・統率し、社会主義と労働運動の結合をもって、労働者階級を組織し、革命戦争・武装蜂起をめざす「正規の攻囲」軍を組織しなければならない。

第二次ブンドの党的危機と八回大会から分派闘争へ

六十年代後半のベトナム反戦闘争と全共闘運動の高揚―政府打倒闘争への発展は、〈階級形成のヘゲモニーとしての党〉たる第二次ブンドに国際・国内路線の結合、戦術問題、党建設全体にわたる指導上の転換を突きつけるものとしてあった。

それは、六九年四・二八闘争で頂点に達したが、プロレタリア階級独裁に導いていく政治への転換ではなく、急進民主主義政治の拡大へと進むものとしてあった。つまりこの高揚の自然成長性に拝跪するのではなく、党の綱領―戦術―組織全体の転換が問われたのである。

第二次ブンドは、その転換を、八回大会で綱領委員会を設置することによって、「戦略・戦術の党」(六回大会)から「共産主義を組織する党」(八回大会)へとして、図らんとした。この全体を位置付けて、九回大会の報告は、七回大会を次のように総括している。「わが同盟は、職業革命家による上からの党建設路線をともに確定した。これはレーニン主義による『計画としての戦術』の革命論上の具体的復権―世界一国同時革命戦略の提起と共に、わが同盟の統一再建を名実ともに軌道にのせたのである。……だが、このことは同時に次の問題を内包するものである。第一にわれわれが戦略的観点からの闘争の組織化をはかろうとも、それ自身は階級形成―大衆闘争の党の任務を限定し、そこに従属せしめ、かえって単なる戦術主義への転落と同時に『党の組織』の空洞化―解体―潜在的分裂をはびこらせること。まさに『計画としての戦術』に反したような『過程としての戦術』が好むと好まざるとに同盟の基軸たらざるを得ないこと」であるとしている。たしかに指摘の正当性を認めつつも、このような諸傾向をどのような政治で克服するのかである。そして、党解体の危機を、八回大会は　真正面から受け止めようとするのではなく、逆に未来社会の先取りから今日を逆規定して、それを党の意識性で突破せんとするものであった。たとえば、田原は、「共産主義者同盟の総括と綱領問題」のなかで「……一七年以降のロシア革命以降、まさにレーニンもいうごとく、これまでの綱領の主たる関心事としてきた『権力奪取』

をめぐる問題と共に、いかに「社会主義を組織するか」という領域をまさしく綱領たらしめる領域として要請しているのである」としてブントの思想・政治路線の転換を素直に表明している。

この提起は、八回大会当時としては当然のこととして「労働者国家」規定や世界プロ独規定を根幹とするものであったが、問題はそのことにあったのではなく（それ自身の批判については既に明らかにしているのでここではくり返さない）、現実に抜き差しならないものとして突きつけられている急進民主主義政治からの転換・過程としての戦術からの転換とそれを基礎づける党の思想統合と組織性格の変革の課題に答えようとするものではなかった点にある。かえって逆に、急進民主主義政治をマルクス・レーニン主義政治へと転換せずに、「未来から現在を見る」という綱領思想そのものの誤りと様々な未来学を生み出すだけで、むしろ地上の階級闘争から昇天し、階級闘争の全体の要請を部分性に狭めてしまい、綱領―戦術―組織の全体を真に変革しえなかったという点にこそ、問題は存在するのである。

それゆえに、現実は、政府打倒を要求する反政府闘争の自然成長的昂揚に押し上げられて、次のような党内闘争として進展した。すなわち、一方は、武装蜂起―権力奪取へと突撃せんとしたが、労働者階級の経済的解放を実現する社会革命の遂行のために、ブルジョア国家権力の打倒・プロレタリア階級独裁の樹立をその政治目的とするものではなく、ファシズムの全面化を先制的に粉砕するという民主主義的憤激と革命的熱望を基礎とし、従って、社会主義革命の原動力たる労働者階級の階級闘争を組織し、それをプロレタリア階級独裁にまで拡張・発展させて社会主義革命を実現する闘いとして武装蜂起を遂行したのではなく、小ブルジョアの闘争に求めるテロリズムとなった。他方は、武装ソビエト運動（十党の軍事）を対置し、つまるところ、経済闘争・民主主義闘争の徹底化＝大衆実力闘争とその自衛武装に、党の軍事を結合させることによって、永続的に権力闘争へと高めるという運動過程論であり、世界プロ独を意識した党の軍事が大衆の側での民主主義の実現の要求を保証するという、権力問題を欠落させたものであり、その後ここからは、労働運動を強調しつつも、他ならぬ社会主義と労働運動を結合し、労働者階級をプロレタリア階級独裁にまで拡張・発展させることを眼目とするのではなく、経済闘争・民主主義闘争に狭める経済主義を生み出した。それぞれの現われは異っていても、社会主義と労働運動の分離・急進民主主義の同一の土俵の上で、一方の極に赤軍派があり、他方の極に再建委があった。そして、七・六事件を契機として分裂し、大分派時代に突入した。それは、ブンドが、「国家と革命」の問題に対する急進民主主義的態度によって、日帝打倒・社会主義革命を実現する戦術問題を正しくたてることができずに、経済闘争、民主主義闘争の戦闘化の延長上にプロ独・社会主義革命を展望するという「過程としての戦術」に根拠があったといわなければならない。

九回大会が客観主義的指摘にとどまらざるをえず、踏みこんで解決しえなかった問題も、急進民主主義政治にはまりこんだまま、露呈している否定面をみえるがままに指摘しているからにすぎない。

以上のことから、われわれは、ブンド総括の基本問題は、マルクス・レーニン主義の原則的資本主義批判ならびに帝国主義批判の確立によって急進民主主義を清算することであると結論づけることができる。つまりブンドの帝国主義批判が帝国主義を政策の体制としてみ、民主主義の破壊に一面化し、従ってブルジョア国家批判を民主主義の問題に軸をすえていた急進民主主義であったということは、資本主義批判ー思想路線の根幹における急進民主主義の反映であり、それは同時に、反スタ・トロツキズムの受容をもたらした。（なお、第二次ブンドにあっては、資本主義批判はそれとして展開されてはいないが、六回大会から七回大会への転換にあっても、また八回大会綱領委員会にあっても、基本的には、労働力商品化論と、直接的生産過程での疎外された労働論及び分業論を基軸とし、「資本制分業社会が内には国家として、外には民族として編成される」ことに批判の眼目を置き、「民族国家の障壁の打破」に実践上の核心を据えていたことは明白であろう）

この急進民主主義は、社会主義と労働運動の分離を生み出すものであり、小ブルジョア社会主義の傾向を生み出すものである。この克服のために、先に述べた問題も含めて、その観点の要約を対比しながら、以下のように提起する。

第四章　マルクス・レーニン主義、毛沢東思想のプロレタリア革命路線の獲得へ

a　ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義にとってかえ、反スタ・トロツキズムの側面を清算し、毛沢東思想におきかえよ

急進民主主義の諸特徴は次の通りである。

(1)ブルジョア階級とプロレタリア階級の関係では、資本と賃労働の関係を対等な私的商品所持者の売買と見、生産手段の所有制の問題をあいまいにし、批判を生産における人と人との関係や分配問題に一面化する。

(2)ブルジョア国家とプロレタリア階級闘争および共産主義革命の関係では、生産の社会化と資本主義的所有との矛盾が、プロレタリア階級とブルジョア階級との対立として現われることを否定して、社会主義革命の原動力を、労働者階級の階級闘争に求めず、小ブルの空想社会主義のテロリズムと、他方では労働者階級の階級闘争の目標をプロレタリア階級独裁・社会主義

革命に定めず、経済闘争、民主主義闘争の戦闘化にその展望を求める経済主義に陥る。

(3)プロレタリア階級とマルクス・レーニン主義党との関係では、党建設と階級形成を二元化して党をプロレタリア階級から分離して小ブルの集団にし、他方ではプロレタリア階級を党から独立させ、労働組合、ソビエト、赤軍などに大衆を組織することに押し止めるのである。

マルクス・レーニン主義は、つまるところ労働運動と社会主義の結合である。その方法および観点は、(1)ブルジョア階級とプロレタリア階級との関係で、資本と賃労働の関係での対等な私的所有者の売買関係が「流通に属する仮象」でしかなく、労働者の資本家に対する経済的隷属を隠蔽するものであると見、(イ)生活手段及び生活源泉を独占的に私有する資本家に対し、そこから分離した労働者階級が経済的に隷従し、その結果、(ロ)生産における人と人との関係で労働者は剰余価値の生産を目的とする資本家の指揮の下で奴隷労働を強制され、(ハ)生産物の分配について労働者は、必要労働分を賃金としてうけとるだけであり、剰余労働分は資本家が無償で取得し、搾取する、と暴露する。つまり、所有制に批判の眼目を置き、資本家階級から生産手段・生活源泉を収奪し、社会の共有に移すことを共産主義革命の中心任務とし、生産における人と人との関係について、資本家の労働者への奴隷化を廃止し、三大差異を消滅させつつ、生産物の分配について、搾取を廃止し、能力に応じた労働・労働に応じた分配を実現し、次に能力に応じた労働、必要に応じた分配を実現するのである。

(2)ブルジョア国家とプロレタリア階級闘争、及び共産主義革命の問題では、ブルジョア国家、それは資本家階級が国家権力を掌握し、ブルジョア階級独裁を実行し、ブルジョア階級とプロレタリア階級の階級闘争を押しとどめ、打ち砕き、資本主義とブルジョア社会の秩序に労働者階級を服従させておくための機関であると見、しかし資本主義生産関係が資本関係を拡大再生産し、資本蓄積の拡大再生産の過程で、資本主義的生産関係を共産主義生産関係に変える物質的可能性をますます急速につくり出すと同時に一方では、より多くの、より大きな資本家を生み出し、他方ではより多くの労働者を生み出し、彼らを一層生産手段から排除し、資本関係の敵対的性格はいよいよ露わになり、プロレタリア階級とブルジョア階級の階級対立が一層激化し、プロレタリア階級の階級闘争が増大せずにはおかないことを暴露する。つまり、資本主義的所有と生産の社会化の矛盾の解決を共産主義革命で、すなわちブルジョア国家権力を暴力革命で粉砕して樹立するプロレタリア階級独裁でもって実現するのであり、常にプロレタリア階級独裁を準備し導いていく闘いを組織するのである。

(3)プロレタリア階級とマルクス・レーニン主義党との関係では、「プロレタリアートをすべてのブルジョア政党に対立する独自の政党に組織し」ていく党建設を確立し、何かしら階級形

成と分離するさまざまな試みに反対する。

次に反スタ・トロツキズムとマルクス・レーニン主義と毛沢東思想についてみてみよう。反スタ・トロツキズムの特徴は次のようである。

(1)プロレタリア階級独裁と社会主義の関係で、社会主義の全歴史において、共産主義の高い段階のために、プロレタリア階級独裁の必要をみとめず、労働証書制論による労働力商品化の廃止を社会主義のメルクマールにおいており、所有面の変革をみようとしない。特にソ連がプロ独と継続革命を放棄して社会帝国主義に転落したことを認めない。

(2)一国社会主義建設を不可能と見、一国におけるプロレタリア階級独裁の下での社会主義継続革命を認めない。

(3)世界革命の勝利に向けて根拠地を建設することに反対している。

(4)植民地、従属国での人民民主主義革命から社会主義革命への段階性・連続性を認めず、(イ)民主主義革命での農民の革命性とプロレタリア階級と農民の革命的民主主義独裁を認めず、(ロ)それは、結果的にブルジョア階級の主導権を認め、封建地主階級と妥協して民主主義革命を不徹底に終らせるのを許し、社会主義革命への連続的発展を不可能にする。第二次ブンドは、この反スタ・トロツキズムに対する防壁を築くことができず、むしろこのような傾向に陥っていった。

それでは、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の方法・観点は何か。

綱領草案に刻みこまれているように毛沢東思想は、社会主義においても、階級、階級闘争、階級矛盾、階級闘争が存在し、社会主義と資本主義をめぐる二つの道の階級闘争が存在しており、プロレタリア階級独裁を堅持して、生産手段の社会的共有制を保持し、これを基礎として、生産力の発展を促し、生産における人と人との関係や、分配制の面で、更には上部構造の側面で共産主義革命を継続する。更には、一国社会主義建設は、プロレタリア階級が国民経済の管制高地を掌握し、所有制を変革して、プロレタリア階級独裁のもとで社会主義継続革命をおしすすめることによって可能であり、世界革命を勝利に導く根拠地をつくり出すことのためにぜひ必要であることを明らかにしている。かつてのソ連や今日の中国においてこの問題が正しく打ち立てられていたことを見れば、反スタ・トロツキズムの空論主義の破産は明らかであり、毛沢東思想に反対すると称してマルクス・レーニン主義の根本を洗い流していることは歴然としている。更には毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の永続革命論と解放前の中国の国家と社会の性質の具体的条件を結合し、反帝・反植民地、民族解放人民民主主義革命から社会主義革命への二段階の連続革命路線を確立し、マルクス・レーニン主義を創造的に発展させた。

第一次ブンド、第二次ブンドの二十年の歴史のなかで、その主要な傾向であった急進民主主義と反スタ・トロツキズムを清

算し、マルクス・レーニン主義の側面を全面的に発展させ、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の革命路線を打ち立てなければならない。

b ブンドの急進民主主義の「過程としての戦術」「反帝へゲモニーとしての組織活動」から計画としての戦術・中央集権党へ転換せよ

われわれは、ブンドの戦争と革命をめぐる主観的な情勢分析をあらためて、当面の国際—国内情勢の特徴をはっきりとつかみとらなければならない。第二次ブンドは、七回大会で三プロック階級闘争の結合を提起して、当面の国際—国内情勢の特徴を、革命が戦争を打ち破るとしてみ、革命の要素の増大に重点を置いていた。つまり植民地従属諸国の民族解放闘争の拡大、朝鮮革命の爆発に日本社会主義革命の開始をみ、日米帝による朝鮮侵略反革命戦争の危険性を強調したが、それをその後も固定化して、米ソの覇権争奪による世界大戦の危険性の増大についてみず、従って民族解放民主主義革命への連帯という国際主義の観点は打ち出していても、帝国主義戦争に対するプロレタリア階級の任務の問題を正しく解決しない傾向として固定化され、七十年代に及んでいる。現在でも多くのブンド系の部分は、かかる認識のままである。現在は、史上三度目の戦争と革命の時代であり、いよいよそれが成熟している。たとえばベトナムのソ連社会帝国主義を後楯とするカンボジア併合をはじめとした覇権主義が拡大し、中越問題をはじめとして、戦争と革命の要素がともに増大している。一方、日帝は、人民闘争の爆発に対して、ブルジョア階級独裁を反動化し、戦争への熱望を強めている。つまり国際情勢に連動して日本においても戦争と革命の要素が増大している。それゆえ、われわれは、国家と革命の問題、戦争と革命の問題でのマルクス・レーニン主義的見地を労働者階級・勤労人民に、宣伝・煽動し、押し広げ、この観点で武装させることがいよいよ重要になっている。われわれは、今日の擁帝祖国防衛主義を批判し、これときっぱり一線を画し、革命的祖国敗北主義の「帝国主義戦争を内乱へ」の態度と路線を打ち固めなければならない。そのためには、ブンドの過程としての戦術を清算し、計画としての戦術にかえることがないならば、この路線の貫徹は不可能である。かつてブンドは、プロレタリア階級独裁・社会主義革命を路線として承認しつつも、実際の宣伝・煽動においては、経済闘争、民主主義闘争に狭めてしまい、それを実行していなかった。

「過程としての戦術」を「計画した戦術」にとってかえることは、プロレタリア階級独裁の党の指導内容をマルクス・レーニン主義の資本主義批判に結びつけ、基礎づけられたものに転換しなければならない。

原則的資本主義批判の確立がぜひ必要であるということは、ブンドの歴史の中で、党の綱領—組織—戦術の全体がその資本主義批判の内容を反映したものであり、常に急進民主主義政治

によって弱点が拡大していったことを見れば明らかである。

第二次ブンドの宣伝・煽動の方法・活動形態は、民主主義闘争のスト、デモ、集会に動員して、党派部隊として登場させることのみに限定していた。一方で全国政治新聞を軸とした活動を党活動の中心に据えず、一種の認識にとどめていた。

最後にブンドの党建設の組織問題を明らかにする。第一次ブンドについては、第一章で、第二次ブンドの詳細については、第三部にゆずるとして、克服すべき中心点を明らかにしよう。第二次ブンドは、地区委員会によって組織されており、従って細胞建設は、居住細胞を第一とし、工場細胞建設を軽視して、その結果、党活動の中心が経済闘争、民主主義闘争、特に反帝反戦闘争の集会・デモの組織化におかれていた。それは同時に、地方委員会を肥大化させ、分権主義を生み出した。ここに非合法中央集権党を彼岸化する傾向が生み出される根拠があった。

われわれは、急進民主主義の党活動からマルクス・レーニン主義の革命的党活動への転換をかちとらねばならない。それはプロレタリア階級独裁をかなめとする共産主義政治の宣伝とそれを実行する全国政治新聞の定期発行配布と組織化の方法を獲得して、工場細胞を建設して、マルクス・レーニン主義の中央集権党を鍛え上げ、練り上げるのである。こうして職業革命家を中核として工場細胞を基礎とする中央集権党へと自己を打ち鍛え、第三次ブンド建設―プロ単一党創建の中核へと高め上げていかなければならない。

今やわれわれは、ブンドの思想路線での急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義にとってかえ、反スタ・トロツキズムの側面を摘出し、批判し、毛沢東思想を支持し、そのことによってブンドの政治路線におけるマルクス・レーニン主義の側面を継承・発展させて、真に確立し抜き、社会主義と労働運動を結合するマルクス・レーニン主義、毛沢東思想のプロレタリア革命路線を獲得したのである。この獲得された路線の下に、攻勢的党建設を推し進め、正規の攻囲軍の大胆な登場を戦取し、六九年以来のブンドの分派闘争に結着をつけるときはきた。ブンドの正しい総括の上で創建された共産主義者同盟（革命の旗）こそ、重大な使命を担っている。

第三次ブンドをその基礎としてプロレタリア単一党の創建をめざし、日本社会主義革命の先頭に立ち、労働者階級の前途を照らし出していかなければならない。

第二部　国際―国内情勢とわが同盟の当面する任務

序　章　戦争と革命、国家と革命に対する態度を整え、「革命の旗」を掲げ、戦争と革命の八〇年代へ進撃せよ

七〇年前後から始まった史上三度目の戦争と革命の時代は、十年間にわたる序曲の変動を経て、今や文字通り戦争と革命の大動乱へと移行していく新たな局面を迎えている。この十年間、米ソ二超大国の全世界的な覇権争奪は激化の一途をたどり、七〇年代末の二年間は、ソ社帝の攻勢的な世界分割が、アフリカ、中東、インドシナでの一連の武力侵攻・転覆・干渉・併合の局地戦へと転化し、米帝がそれに対抗して西欧諸帝・日帝との同盟関係を再編・強化しつつ、新たな帝国主義戦争の準備を本格化するという、第三次帝国主義戦争の第一段階への移行を刻印した。と同時に、この十年間、アジアの社会主義国を大後方とする植民地従属諸国の民族解放闘争―民族民主革命闘争と第二世界諸国の広汎な反帝反植反覇権闘争はいよいよ勢いを増し、燃え上がり、七〇年代末の二年間は、民主カンボジア人民の抗越抗ソ救国闘争、イラン革命、ニカラグア革命、南部アフリカの解放闘争、そして朝鮮人民の自主的平和統一・南半部人民の民族民主闘争等、革命の要素が巨大な成長を遂げ、また第三世界諸国全般において反覇権・反支配主義の気運が昂まり、政治的自主、経済的自立、軍事的自衛の広範な反覇権統一戦線が、まさにベトナム、キューバの逆流に抗して、形成されつつあることを刻印した。

更にこの十年間、とくに西欧、日本における経済的、政治的危機が次第に発展し、深まり、七〇年代末の二年間は、ブルジョア階級の側での帝国主義戦争の準備と社会主義革命の鎮圧に向けた反動が強まり、プロレタリア階級の側での新旧修正主義のくびきをつき破って社会主義革命の準備に向かわんとする胎動の、死活をかけた闘いが始まりつつあることを刻印した。

こうして世界情勢は今、八〇年代に向かって戦争と革命の大激動へと動き出している。

我々は、この戦争と革命の大激動を能動的に迎えていく基礎として、日本プロレタリア階級の単一のマルクス・レーニン主義党創建の第一歩として共産同（革命の旗）の結成を闘いとった。我々は、日本プロレタリア階級をプロレタリア階級の世界軍の一部隊として組織し、社会主義国・被抑圧民族と固く団結し、反帝反社帝の赤旗を堅持して、当面の一時代の三つの革命の要素の成長・結合に奮闘・貢献し、反ソ反米反覇権の国際路線の下、ソ米の全世界的な覇権争奪と世界大戦に反対する国際人民闘争の発展の一翼を担いながら、世界革命の促進に貢献していかねばならない。なかんづく、我々は日本プロレタリア階級の革命的前衛として、〈戦争に備え、革命を促す〉という観点を当面する日本革命の具体的実践に結びつけ、米帝・日帝のアジアでの朝鮮侵略反革命戦争準備と対ソ帝国主義戦争準備に鋭く対峙しながら、自国帝国主義打倒をめざし闘い抜き、日帝打倒・米帝追放・プロレタリア階級独裁・社会主義革命をまっすぐめざして全力をあげ、奮闘していかなければならない。

史上三度目の戦争と革命の時代が、第三次帝国主義戦争の第一段階への移行として本格化し、現実のものとなっている今日の世界情勢において二流の帝国主義たる日帝もまた、不可避にその一環に転化し、米帝主導の下、帝国主義戦争の道を突き進んでいる。だがそれは同時に、日帝の経済的、政治的危機の醸成―体制的危機の深まりと相乗化しあっているのである。更に二流帝国主義として、ソ米覇権争奪の動向に左右されざるを得ないが故に、一層動揺的であり、それだけ人民闘争の爆発・発展をよびおこし、持続的に深め、広め、プロレタリア階級をその先頭へと押しあげている。こうして帝国主義戦争の接近とは同時に、社会主義革命の接近であり、革命的情勢―激動の、端緒が始まり、成長しつつあることをまざまざと示している。

こうした時代の到来は、戦後日本帝国主義の、米帝との従属的同盟の下における復活・成長・拡張が今やその不可避的な帰結――〈戦争と革命〉の一時代へと至りつつあり、寄生的な腐敗した資本主義という特徴と、死滅しつつある資本主義という歴史的地位がますます赤裸々となり、日本帝国主義の没落と社会主義革命の不可避性が現実のものとして日程にのぼりつつあることに他ならない。こうした情勢は、わが同盟に日本プロレタリア階級の単一のマルクス・レーニン主義党創建のために更に奮闘し、プロレタリア階級に社会主義革命実現のために政治権力を闘い取る準備を全面的に整えさせるという任務を課している。

当面する情勢は以下の特徴を示している。

第一にブルジョア階級が米帝との従属的同盟の下に世界再分割戦の一角を本格的に担い、日本資本主義の構造的再編の暴力的推進と帝国主義戦争の本格的・総合的準備に着手し、また社会主義革命と内乱の鎮圧のために、ブルジョア階級独裁の反動化と「挙国体制」づくりを全線にわたって押し拡げている。そして、社会帝国主義潮流がますます階級協調と再編を強め、ブ

ルジョア階級独裁の社会的支柱として、ブルジョア階級に忠勤を尽している。他方、労働者階級と被搾取勤労大衆の反抗と闘争が一層広がり、深まり、彼らの自覚と結束が高まっている。とりわけ、先進的労働者が政治闘争と経済闘争を結合して闘い、自己の階級闘争と人民闘争の先頭に立って、その主導力を強め、何よりも社会主義と結合し、労働者階級の革命的前衛党を建設することの緊要性を自覚し始めている。この希求に応えて、全国単一のマルクス・レーニン主義党創建の闘いがようやく、その苦汁に満ちた五年間の準備から真の長征へと向かう第一歩が闘い取られたこと。こうして全線にわたって、〈帝国主義と社会主義の分裂〉が始まり、従来の戦闘的な反帝反政府潮流・諸政治勢力の分化・再編が否応なく始まり、次第に激しい、深刻な、鋭いものとなり、社会主義革命の本格的な準備へと全線をつくりかえ、再編していく闘いが始まりつつある。一言でいえば、〈帝国主義戦争と社会主義革命〉の本格的接近という情勢が成長しつつあり、ブルジョア階級の帝国主義戦争の本格的準備とプロレタリア階級の社会主義革命の真剣な準備をめぐる死活をかけた闘いが全線にわたって拡がっていく、革命の本格的な準備期の性格が全て明らかとなりつつあり、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をめざす「正規の攻囲」の本格的組織化がはじまろうとしている。

我々は今、この情勢の歴史的節目をしっかりとつかみとり、この節目をめぐる闘いを、必らずや敵の要塞を奪取するプロレタリア階級の革命的攻撃の総力を発達させる、その確固たる礎を築き、最初の地歩として戦取し抜くために全力をあげて奮闘し抜かねばならない。そのためにこそ、我々は労働者階級の中で、マルクス・レーニン主義と新旧修正主義―社会帝国主義との仮借なき闘争を組織し、戦争と革命、国家と革命に対する態度を整え、プロレタリア階級独裁の思想で武装させ、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の旗の下に固く結束させていかねばならない。また、帝国主義戦争に、ブルジョア階級を打倒するプロレタリア階級の国内戦を対置する革命的祖国敗北主義と、アジアの社会主義国、民族解放闘争と固く結びつき、反ソ反米反覇権の国際人民闘争の大方向を結合する国際主義を打ち固め、社会主義革命をまっすぐにめざし、その勝利を闘い取るためにプロレタリア階級独裁を全ての方面にわたって準備することを全活動の内容としていかねばならない。社会帝国主義と仮借なく闘い、戦闘的左翼諸潮流、諸政治勢力の分化・再編に攻勢的・主導的に分け入り、先進的労働者をわが同盟の下に、単一のマルクス・レーニン主義党に組織し、統合するために休みなく奮闘せよ！　〈帝国主義戦争と社会主義革命の接近〉という今日の情勢があらゆる衝突を生起させている、社会生活の全ての分野、全ての面を社会主義革命のための一つ一つの水路としてとらえ尽し、労働者の中でのたゆみなき宣伝・煽動・組織化を強め、彼らの反抗のいくたの細流を社会主義のための巨大な革命的勢力、革命的奔流へとまとめあげるために全精力

を傾注せよ！

「革命の旗」を真に全国政治新聞として発達させ、全ての工場・地域に革命的前衛の組織＝細胞を建設し、全ての工場・地域を革命の要塞へとかえていくために系統的努力を注ぎ込み、着実に前進せよ！　以上を基礎・眼目として、全ての人民闘争の指導者として登場し、全ての被搾取勤労大衆をわが党の周囲に、社会主義的プロレタリアートの周囲に結合させ、社会主義統一戦線を形成していく準備に着手せよ！　こうして戦争と革命の八〇年代に進撃する礎を築き、来たるべき大会戦――ブルジョア階級独裁打倒に米帝追放を固く結合させた大会戦を、系統的・主導的に準備していかねばならない。

第一章　帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代と今日の基調

a　帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代の発展

第二次大戦後の一時期、米帝が西欧諸帝・日帝を従属的同盟に組みこみ、社会主義国の包囲と被抑圧民族に対する新植民地主義支配体制をもって築いた帝国主義陣営と、中国革命―東欧革命によって生み出された「社会主義陣営」と、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの民族解放闘争の抬頭として特徴づけられた世界情勢は、その後、五十年代～七十年代前後における激しい嵐と大分化・大再編を通じて劇的に変化し、七十年の前後から、史上三度目の戦争と革命の時代を到来させた。

この劇的変化をもたらしたものは、第一に、四九年中国革命の勝利、六一年キューバ革命の勝利、七五年インドシナ三国革命の勝利に代表される、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの被抑圧民族の革命闘争＝民族解放闘争の巨大な発展であり、世界革命の主力軍＝世界の革命的変化の原動力・機関車としての登場である。マルクス・レーニン主義党に代表されるプロレタリア階級が指導し、労農同盟を基礎とし、民族ブルジョア階級と連合・闘争しつつ、対外的には社会主義国を大後方として、帝国主義とそれに従属・結合した反動派の植民地支配を打ち破り、一掃する民族解放民主主義革命の勝利から、引き続き社会主義革命へ継続・発展・転化していく革命闘争を主導力として、総じて、「民族は解放を求め、国家は独立を求め、人民は革命を求める」歴史的潮流として発展してきた民族解放闘争こそ、その最大の革命的要素であったし、現在も依然として、世界革命と国際人民闘争の主力軍である。

第二に、第二次大戦後の永年にわたる米帝の世界支配が大きく動揺・後退し、一方では中国包囲網が解体し、その新植民地体

制はインドシナ三国を始めとして民族解放闘争の昂まりによって揺り動かされ、様々な環で次々と打ち破られ、他方では米帝、西欧諸帝、日帝の不均等発展の矛盾・経済対立と利権争奪・市場再分割競争と、資本の投下域・資源の獲保をめぐる角逐を強め、米帝の絶対的覇者から相対的強者への後退と、帝国主義相互間の対立を増大させ、こうして米帝を盟主とする戦後帝国主義陣営は、世界再分割戦と四分五裂の傾向を強めた。

第三に、世界最初の社会主義国ソ連で、フルシチョフ・ブレジネフの現代修正主義が、党と国家の大権を簒奪し、プロレタリア階級独裁の国家を変質させ、資本主義の復活を大々的に推し進めて、社会主義から官僚独占ブルジョア階級が支配する国家独占資本主義へと転化させ、東欧諸国をソ連に従属する国家資本主義へと変質させ、ソ連の半植民地従属国へとかえ、こうして社会帝国主義として登場した。ソ連社会帝国主義の歴史的登場は、かっての「社会主義陣営」を崩壊させた。更にソ連社会帝国主義は米帝にとってかわる新たな世界支配と被抑圧民族に対する支配権をめざして世界再分割戦にのりだし、一方では民族解放闘争の昂揚に乗じて、その背後から介入・侵透を推し進め、勢力圏拡大をはかり、他方では帝国主義相互間の対立の増大に割り込み、米帝との覇権争奪を強め、西欧諸帝・日帝を米帝から引きはがして自己の側へ引き寄せ、組み込うとする策動を強めた。

第四に、こうした現代修正主義の逆流に抗して、中国を始めとしたアジアの社会主義国では、プロレタリア階級独裁を堅持して、二つの道の階級闘争、社会主義継続革命を推し進め、資本主義の復活を防いで、社会主義建設を発展させ、またその闘いによって自国を帝国主義・社会帝国主義に対する革命的防壁として打ち固めながら「一国での革命の終局の勝利は、世界革命の勝利をもってはじめて達成することができる。」「社会主義国は、国際プロレタリア階級、被抑圧民族全体との団結を強めながら、世界革命の発展に貢献していかなければならない。」という観点の下、とくに現在の世界革命と国際人民闘争の主要な敵である米ソ二超大国とその覇権争奪に対決し、主力軍である第三世界の民族解放闘争との団結を強め、その利益の側に立ち、その大後方、促進者としての役割を果していくことを鮮明にしながら、反帝反社帝―反帝反植反覇権闘争の主柱として、自らを打ち固めた。

b　史上三度目の戦争と革命の時代の特徴

以上から、七十年前後以降の世界情勢は、①米ソ二超大国の世界支配・世界覇権をめぐる矛盾を規定的なものとする、帝国主義国相互間の矛盾、②米ソ二超大国をはじめとする帝国主義国と被抑圧民族との間の矛盾、③米ソ二超大国をはじめとする帝国主義国と社会主義国との間の矛盾、④帝国主義国でのブル

ジョア階級とプロレタリア階級との間の矛盾、という四つの基本矛盾の新たな発展・激化によって特徴づけられている。この中でも、米ソ二超大国の新たな世界支配をめざす世界覇権争奪と、社会主義国を大後方とする民族解放闘争の世界史的発展を主要なもの＝世界政治全体を規定する主要な要素として、発展激化の一途をたどり、こうして新たな戦争と革命の時代＝史上三度目の戦争と革命の時代が始まった。

1 米ソ二超大国は最大の国際的抑圧者・搾取者として、又新たな世界大戦の策源地として、従って社会主義国を砦とする国際プロレタリア階級・被抑圧民族の最大の敵として立ち現われている。

米ソ両超大国は、その経済力、政治―軍事力において極立った力を保持している超一流の帝国主義であり、その力でもって、世界的規模において「販売市場のため、資本の投下地域のため、原料のため、つまり世界支配のため、弱少民族に対する支配権のため」相闘っている。すなわち世界覇権をめざし「地上のすべての国の人民の系統的搾取を世界的規模で組織する」ことをめざしている帝国主義であり、世界政治全体を規定している帝国主義である。「帝国主義とは一握りの大国による世界の諸民族の抑圧が強まることである。それは民族的抑圧を拡大し、強固にするための大国間の戦争である」。「帝国主義にとって本質的なのは、いくつかの大強国がヘゲモニーを獲得しようとして、すなわち直接自国のためというよりも、むしろ敵を弱め、そのヘゲモニーをくつがえすために土地を占領しようとして互いに競争することである」。まさに二超大国はこのように世界支配のため、被抑圧民族全般に対する支配権のために世界的規模で相争っている。両者の間では、結託・協商は、一時的・条件的・相対的・部分的であり、争奪・争闘は、長期的・本質的・絶対的・全体的であり、激化の一途をたどらざるをえない。こうして両超大国は、今日新たな世界大戦の策源地となっており、両者の覇権争奪は高度に発達した資本主義地域であって、両者の世界的力関係を決定する位置を占める欧州を戦略的環としている。この両超大国の覇権争奪が世界的規模での四つの基本矛盾を激化させていく規定的要因となっており、四つの基本矛盾が世界的規模で広まり、深まり、戦争の要素と共に革命の要素を成長させている。

2 この史上三度目の戦争と革命の時代にあって、今日、最大の革命的要素・世界革命の主力軍として登場し、かつ二超大国とその全世界的覇権争奪に対抗し、戦争の要素と対抗し、その拡大をおし止めているのは、第三世界諸国の民族解放闘争の巨大な昂まりである。反帝反植反覇権闘争として闘われている民族解放闘争は、次のような二つの要素が相互に作用し、促進し合いながら発展させている。その第一の要素は、プロレタリア階級の指導の下に広汎な農民を動員し、民族ブルジョアジーと連合・闘争しつつ、帝国主義・社会帝国主義と反動派の打倒をめざし、民族解放闘争の勝利を、人民民主主義革命から社会主

義革命への段階性と連続性をつかみだし闘い抜かれるという道に沿って闘われている革命闘争である。この革命闘争は、今ではアジア・アフリカ・ラテンアメリカ全域に燃え広がっている。と同時に、この革命闘争の巨大な発展はそれがつくり出した国際的力関係の下で第二の要素も押し上げている。すなわち「国際新経済秩序」の要素や、OPECや非同盟諸国会議に体現されている国家主権と経済的自立の一歩一歩の回復を求める対外関係＝国際関係での民主拡大闘争がそれであり、こういう面で第三世界諸国の連携と結束を強め、帝国主義・植民地主義・覇権主義に打撃を加え揺がしている闘いである。こうした闘いは主として民族ブルジョアジーに担われ、反動派として存在してきた部分を巻き込みながら展開されているとしても、更にそれが客観的には諸国の資本主義的要素の自由な発展の要求を体現しているとしても、それは帝国主義、植民地主義、覇権主義、なかんずく二超大国に抗し、それに打撃を加え、国際関係における民族的＝民主主義的要素を体現している（決して真に革命的ではないにしても）ことにおいて、積極的・進歩的要素であり、国際プロレタリア階級が支持しなければならないものである。

こうした闘いは疑いもなく、民族解放民主主義革命によって押し上げられているのであり、と同時に、プロレタリア階級の指導する民族解放民主主義革命を促すものであり、社会主義革命への連続的転化と社会主義建設に際して有利な条件を準備するものに他ならない。

今日、中国をはじめとする社会主義国は、国内的にはプロレタリア階級独裁を堅持して、自力更生を主とする社会主義建設を推し進めつつ、対外的には民族解放闘争の大後方となり、民族解放民主主義革命を支持・支援しつつ、同時にその国家間外交政策において「あらゆる積極的・進歩的要素を結集して、集団的自力更生を促し、二超大国と覇権主義に反対する広汎な統一戦線を結成し」「戦争に備え、世界的規模での戦争の要素の増大に抗し、その拡大をおしとどめ」ながら革命の要素の成長を促進していくという方向をたどっていること。このようにして、世界革命の当面の大方向と国際人民闘争の大後方の役割を果している。

3 西欧諸帝・日帝は、帝国主義の不均等発展の結果、米帝との従属的同盟関係の下で、帝国主義的地位・勢力圏を築き、その拡張の傾向を強めている。しかしこれらの帝国主義は、両超大国＝超一流の帝国主義に比して二流の帝国主義であり、単独では自己の勢力圏を維持・拡張することができず、世界政治全体を規定する力となることができず、世界大戦をひきおこす力を持ってはいない。その帝国主義的地位・勢力圏を維持拡張しようとする傾向は、二超大国の覇権争奪に規定され、それに従属的に結びつきながら、世界的規模での覇権争奪の従属的一要素、連鎖の一環となることにおいてのみ実現されている。現在、西欧諸帝・日帝は、米帝との従属的同盟の下で、又その枠内で

勢力圏の再分割・拡張を進めているのであり、相互の矛盾・対立・相克の増大にもかかわらず、尚米帝の後楯なしには自己の勢力圏を維持・拡張していくことができない。こうした二流の帝国主義国は、一方では、民族解放闘争の昂揚によってその帝国主義的権益・勢力圏を脅かされ、他方では、二超大国の覇権争奪の対象となって威嚇・干渉・侮りを受けつつ、この中で自己の地域覇権主義・勢力圏拡大を進めて世界再分割戦の一環を担い、又このために、或いは超大国を後楯とし、或いは超大国との帝国主義的対立を強める等、動揺と矛盾に満ちた困難を深めている。と同時に、資本主義の高度成長が破綻し、プロレタリア階級・勤労人民の反抗が増大し、ブルジョア階級独裁の動揺と危機が始まり、ブルジョア階級独裁を反動化させている。もって体制的危機を深め、プロレタリア階級の階級闘争の激化と人民闘争の発展を一層おし広げ、社会主義革命に向けた革命的情勢を生み出し、成長させている。

こうして、社会主義国を大後方として「(二流の)帝国主義国におけるプロレタリア階級のブルジョア階級に対する内乱と被圧迫諸民族の帝国主義に対する民族解放戦争とが結合する」世界プロレタリア革命の発展の条件が次第に成長していくすう勢にある。

c　反帝反社帝を堅持し、三つの革命の要素を結合し、反ソ反米反覇権国際人民闘争を発展させ、戦争に備え、革命を促進せよ

こうして今日史上三度目の戦争と革命の時代は、二超大国を策源地とする第三次世界大戦の要素、又それに規定され、結びつき、その連鎖の一環となっていく二流の帝国主義国の帝国主義戦争の要素の増大と、社会主義国を大後方とし、民族解放闘争を主力軍とし、二流帝国主義国の社会主義革命を発展水路とする三つの革命の要素とその結合の増大という世界プロレタリア革命の発展の条件と発展方向を、次第に成長させている。そして帝国主義戦争が現実的なものになるに従い、不可避に三つの型の革命戦争の発展とその結合へと前進していかずにはおかない。

こうした情勢の下にあっては、ますます反帝反社帝を堅持し、戦争に備え、革命をつかみ、促進することを基本観点として、各国の革命闘争を推進し、社会主義国を大後方として、三つの革命の要素の結合を強めることを、世界革命の発展を推し進める根幹にすえ、当面の国際人民闘争である反ソ反米反覇権闘争を推し進め、帝国主義戦争に反対する闘争を発展させ、もって戦争の要素の増大に対抗し、押しとどめながら、世界革命の発展を促し、有利に前進させていくという戦略指針を堅持し、貫いていかねばならない。ここで国際的人民闘争の大方向とは、

二超大国間の矛盾と、二超大国と被抑圧民族の矛盾が主要なものとなり、二超大国の覇権争奪の戦争の要素が増大し、又、民族解放闘争—反帝反植反覇権闘争が発展・拡大し、かつ、それがとりわけ二超大国に対する闘争を軸に国際的結束を強め世界革命の主力軍となると同時に、二超大国・覇権主義・帝国主義に反対する国際人民闘争の主力軍となっているという比較的長期にわたる当面の時期にあって提起される大方向であり、それ故、反帝反社帝を堅持した各国の革命戦争—三つの革命の要素の結合—帝国主義世界大戦に備え、世界革命の発展を推し進めることに固く結びつき、それを有利に促進し、更にその構成要素となっていくものであり、こうして帝国主義・社会帝国主義、なかんずく、その主要なものたる二超大国を攻囲する闘いの一部分に他ならない。

第二章　第三次帝国主義戦争の第一段階と革命の要素の増大、反ソ反米反覇権国際人民闘争の発展

a　第三次帝国主義戦争の第一段階が始まっている

七〇年前後から始まり、七四年第四次中東戦争と七五年インドシナ三国革命の勝利によって公然のものとなった史上三度目の戦争と革命の時代は、この二年間、次の一連の事態によって、序曲戦から明確に帝国主義戦争の第一段階へと突き進んでいることを明らかにしている。

すなわち、後発帝国主義たるソ連社会帝国主義による、キューバを尖兵としたザイール・シャバ州に対する武力侵攻、エチオピアの掌握、南イエメンからアフガニスタンに対する干渉とクーデター、ベトナムのコメコン加盟・ソ越軍事条約をもってベトナムをその傘下に引き入れ、従属させながら、ベトナムの「インドシナ連邦」の野望＝地域覇権主義をそそのかし、道具としたカンボジア武力侵攻・軍事占領、ラオスの事実上の併合、中国に対する国境武力挑発等々の一連の武力侵攻がそれである。これら一連の事態は、ソ連社帝が七〇年中期以来とみに強め、拍車をかけてきた世界再分割と世界支配をめざす帝国主義政治が、今ではその継続として一連の武力侵攻—局地戦へと転換していることを示している。この局地戦は、ソ連社帝の側からは、世界支配と被抑圧民族に対する支配権を目指す覇権主義—とりわけ米帝に対する決定的優位の獲得、世界支配の確立＝西欧・日本の自己の傘下への獲得に向けた軍事的・経済的要衝の確保と今日の最大の革命の要素、革命の要素の主要な背骨の鎮圧・解体をめざす反革命という二つの側面を一体に結びつけた戦争であり、その焦点をインド洋地域においている。こういうもの

として世界政治全体を規定する第一のものであり、このような性格において帝国主義戦争の第一段階を画し、その主要な内容をなしているのであり、更に米帝とそれに多かれ少なかれ従属的に同盟している西欧諸帝・日帝を新たな戦争準備へと促進し、ソ米覇権争奪という世界的規模における帝国主義政治を、その別の手段による継続＝帝国主義世界大戦へと転化していく推進要素をなし、又それ故、これとの対峙・闘争を通じて、革命の要素と国際闘争の主要な環・主要な推進力が作り出されている。

b　ソ社帝に対する批判・武装・闘争を更に強化せよ

現下の帝国主義戦争の第一段階は「ソ・米二超大国・二大帝国主義が新たな世界大戦の策源地」であり、なかでもソ連社帝が世界大戦のより危険な策源地となっている。

官僚独占ブルジョア階級が全一的に支配する国家独占資本主義を経済的本質とするソ連社帝の経済は、腐朽化の度合が著しく、極めて寄生的である。こうしたソ連経済の特質は、一方では、その資本力・技術水準の低さを、西欧諸帝等からの資本導入・技術導入で補い、依存し、それをテコに超重化学工業部門―軍需産業を集中的に強め、ますます官僚的＝軍事的統制の下での苦役を強制し、他方では、第三世界諸国に対する支配権・勢力圏を拡大し、ソ連社帝の軍事基地建設・軍事力配備と結びついた若干の国家資本主義工業の育成とひきかえに、その原料資源・農業・労働力を収奪し、大量の兵器を「援助」の名目で売りつけ、それによる補完と依存を深めざるをえない傾向としてある。だが、こうした傾向そのものは、ますますその不均衡と矛盾を累積的に拡大せざるをえないものである。

だがソ連社帝の特質は、その経済以上に、政治的特質に著しく現われている。国内的には、一握りの官僚独占ブルジョア階級が、党と国家の全権を一手に掌握し、テロルの全一的な体系としたファシスト式の独裁でもって、プロレタリア階級と勤労人民を弾圧し、大ロシア排外主義の下に諸民族を隷属させ、再び「諸民族の牢獄」へと変えている。対外的にも、東欧諸国を「社会主義大家庭」論、「制限主権」論でもって、ワルシャワ条約機構をテコに政治的、軍事的に隷属させ、旧ツァーリ下のロシア帝国を上回る「大帝国」を築き上げている。まさに「汎ゆる方面にわたる反動と民族的抑圧の強化」とは、帝国主義の政治的特質である。

更に、ソ連社帝の狡猾な、従って又危険な特質は、まさにそれが「世界最初の社会主義国から逆戻りした(社会)帝国主義」という特徴を駆使し、民族解放闘争と社会主義労働運動をソ連社帝の利害・野望のために利用・歪曲・変質させ、自己の道具へと変えていく策謀を強めている点にある。

以上からして、ソ連社帝の世界戦略は、米帝にとってかわって自己の世界支配を打ちたてること、その最大の環として、西

欧・日本の奪取を戦略的眼目にしつつ、現在では、米帝との軍拡競争において軍事的優位を確保し、対西欧正面戦略の布陣を強化しつつ、とくに欧州の側翼であり、西欧・日本のエネルギーの命脈をなす石油資源国たる中東を米帝にとってかわって制圧することと、アジアでの中国包囲・封じ込めとインドシナ～マラッカ海峡地域の制圧にその力を注いでいるのである。

これらの現実そのものが、当面する国際闘争においてソ連社帝に対する批判・武装・闘争が重視されねばならないその根拠と性格である。

c　米帝・西欧諸帝・日帝の新たな戦争準備に対する闘争を強化せよ

他方、米帝を盟主とし、西欧諸帝・日帝を従属的同盟者としてきた西側帝国主義陣営は、七〇年代前―中期・史上三度目の戦争と革命の時代の序曲戦において、米帝のインドシナでの敗北・中国包囲の解体とアジアでの後退、又、アラブ・アフリカでの民族的昂揚に直面した一定の後退等、そのかつての世界支配が大きく揺らぎ、衰退の兆しを強め、更にその反映としての石油危機を媒介とする七三～五年の深刻な世界恐慌と、構造的な不況とインフレの同時進行という経済危機を深め、そして米・西欧・日の間での不均等発展の矛盾、市場再分割・経済対立の激化と、政治的ひび割れ、暗闘の増大と、その四分五裂傾向を生み出した。更に、ソ連社帝の攻勢的な覇権主義・第三世界への侵出、世界再分割への割り込み、軍事力の飛躍的強化に直面して、これまでの世界覇権を大きく後退させた。

こうした事態に対し、米帝は七〇年中期の一時期には、対ソ宥和―「デタント」を前面に押し立て、ソ連社帝との間に分割協定を追求しつつ、戦略的態勢の再編・たて直しをはかった。だがそれはただソ米の覇権争奪の新たな激化をもたらしただけであった。故に、この二～三年来、米帝は、ソ米覇権争奪の激化に応じて、対ソ対抗―巻き返し―新たな世界支配をめざす志向を不可避的に強めている。

米帝の対ソ重心世界戦略は、次のような特徴を示している。

第一に、その戦略的重心が欧州にあり、第三世界諸国に対しては、重要資源確保と欧州との結びつきにおいて、要衝の重点死守―とくに中東―に力を注ぎ、アジアでは朝鮮半島の現状固定化を結び目にした日帝との同盟強化―日帝による肩代り及び対ソ前線化と、ソ連社帝と対峙している社会主義中国の対ソ側翼としての利用においていることである。

第二に、このことを、世界恐慌と構造的不況から不可避に浮上してきた蓄積構造―産業構造の再編と、それをめぐる米・西欧・日間の市場・原料資源・資本の投下域をめぐる抗争の激化に対する、米帝の巨大な独占的地位の擁護をテコとしたグローバルな攻勢的対応に結びつけていることである。

第三に、米帝にとって動揺と後退の一途をたどってきた新植

民地体制の再編である。五〇～六〇年代に米帝が第三世界全域にわたって形成した新植民地体制は、七〇年代の全時期を通じて、民族解放闘争によって根底的に揺り動かされ、次々と打ち破られ、後退の一途をたどり、又ソ連社帝の「民族解放闘争支援」「社会主義国際分業」を掲げた攻勢的侵出・社会植民地主義によって食い破られてきた。しかも第三世界の再分割―支配権をめぐる闘争は、今日ソ米覇権争奪の直接の焦点・シノギを削る戦場となっている。こういう事態にあって、米帝は、あくまで戦略資源の独占的死守―戦略的要衝地域の死守のために、民族解放闘争―反帝反植反覇権闘争に対決しつつ、同時に他面では、第三世界諸国における資本主義的要素の増大とその一層の拡大要求―又それが生み出す「民主・平等・自主」の要求に一定譲歩しつつ、そうした資本主義的要素を新たに取り込み、帝国主義支配の下に再編・再包摂していく方向を推し進めている。

第四に、こういう対ソ戦略（及びそれに結びついた西欧・日諸帝に対する同盟関係の再編成・新植民地体制の再編成）の本格化の現局面が依然として守勢的防衛的まき返しにあり、この戦略態勢の再編成自体たえず動揺せざるをえず、なお一定の時間稼ぎと一層の準備を必要とするところから、現在、帝国主義の本性としての力の政策と共に、一定の宥和的術策の行使を不可避としている。以上四点である。

こうした米帝の覇権の維持・既存の権益・勢力圏の防衛と新たな世界支配をめざすまき返しはソ連社帝の攻勢に対抗して、新たな戦争を準備するものであり、戦争の要素の増大と緊張の昂まりを促進している。

西欧諸帝・日帝は、結局のところ、米帝の対ソ世界戦略と国際的蓄積構造―産業再編のヘゲモニーに服しつつ、その下で、あるいは、それをテコとして、自己の政治的軍事的再編と、蓄積構造―産業構造再編を推し進め、米帝の第三世界における後退に局地的にとってかわり、代位・補充する仕方での勢力圏拡大―地域覇権主義を強め、こういう枠内で相対的地位を高め、世界市場再分割をめぐる米帝との角逐を強めていくという方向に向かわざるをえないし、現に向かっている。こうして、西欧諸帝・日帝は、国内における階級対立の新たな激化とブル独の反動化・地域覇権主義―侵略反革命の強化と帝国主義戦争準備へと向かっている。「戦争と反動・反革命の挙国体制」の重圧と、人民闘争の拡大・激化が本格化しているのである。

d　第三世界と西欧・日本における革命の要素の増大と、反ソ反米反覇権国際人民闘争の発展

この帝国主義戦争の第一段階において、この第一段階の最も主要な要素をなしているソ連社帝の強盗的＝反革命的な一連の侵攻に対決し、帝国主義戦争の急速な拡大を押しとどめながら、世界政治全体において積極的・革命的役割を果し、その作用を及ぼしているものは何か？　それは、反ソ反米反覇権の自主勢

力として世界政治の舞台に登場している、アジアの社会主義国と民族解放闘争である。即ち、社会主義中国が依然としてプロレタリア階級独裁を堅持し、社会主義建設を推し進めつつ、ソ連社帝と最前線で対峙し、ソ連社帝の世界征覇をめざす侵攻の拡大に対する防壁をなし、民主カンボジアの抗越抗ソ救国闘争の大後方となり、ベトナムの中越国境武力挑発に対する自衛反撃戦争等、ソ連社帝の世界戦略の一方の環に重大な打撃を加えていること。民主カンボジアが、ソ連社帝の世界戦略の重要な一環を担うベトナムの地域覇権主義―カンボジアの武力制圧・併合を環とする「インドシナ連邦」の野望―に抗し、マルクス・レーニン主義党の指導の下に、抗越抗ソ救国人民戦争を組織し、持続し、ベトナム・ソ連社帝の野望に打撃を与え、それを押しとどめ、掘り崩していること。朝鮮労働党―朝鮮民主主義人民共和国が、ソ連社帝・ベトナムの支配主義に反対し、中朝の連帯を強め、ベトナムのカンボジア武力制圧を「社会主義への裏切り」と批判し、民主カンボジア人民の抗越抗ソ救国闘争を断乎支持し、同時に朝鮮南半部人民の反米反日反朴の民族民主革命を支持し、南北自主統一の原則的かつ柔軟な闘いを推し進めている。

又、ユーゴ・ルーマニア等の民族的な官僚ブルジョア階級が指導する反帝反植反覇権諸国が、非同盟・反帝反植反覇権、汎ゆる形態での従属・抑圧に対する反対を掲げ、社会主義中国と連携しつつ、ソ連社帝の圧迫・威嚇・干渉に敢然と抗し、ソ連社帝の西部戦略に打撃を与え、その野望を突き崩していること。

それだけではない。第三世界における民族解放闘争―「国家は独立を求め、民族は解放を求め、人民は革命を求める」歴史的潮流は、おしとどめようもなく昂まりつつあり、それはこれまでの最大の抑圧者・搾取者であり、又、相対的に後退したとはいえ、現在もなお依然そうである米帝を盟主とした西側帝国主義の支配・又それと結びついた反動派の打倒をめざし、民族民主革命をめざして、不断に蓄積され、次々と噴出している。

たとえば、中東では、米帝の支配・収奪とパーレビ王制の封建地主的圧政・買弁資本主義要素の増大・反動的軍国主義の打倒を目指したイラン革命が勝利し、もって中東は、ソ米の争奪の当面の最重心である、と同時に、民族解放民主革命と反覇権闘争の巨大なルツボへとかわりつつある。

ラテン・アメリカでは、サンディニスタ民族解放戦線を先頭とするニカラグア人民のソモサ打倒・米帝追放の武装蜂起が勝利し、民族民主革命が怒涛の勢いで燃えさかっている。

アフリカ南部では、ジンバブエ愛国戦線がアフリカ統一機構加盟国大半の支持を受け、前線諸国の支援の下に、欺瞞的な人種主義支配―反動融和政権の策動と弾圧をはねのけ、ゲリラ戦を各地で強めている。

こうして今日、第三世界における民族解放闘争は、各国内の民族民主革命闘争と国際的規模で結合した反ソ反米反覇権―反帝反植反覇権闘争―国家的独立と経済的自主・独立を求める闘

いとが相互に織りなしながら一層大規模に発展していくすう勢にある。然り、ソ米覇権争奪の激化と第三次帝国主義戦争の第一段階という今日の情勢そのものが、各国の民族民主革命の成長と反ソ反米反覇権の国際闘争としての結合を促さずにはおかず、そのように教育せずにはおかないのである。

現在では第三世界諸国ばかりではなく、西欧・日本でも体制的危機と革命的情勢が始まり、社会主義革命に向けた労働者階級の胎動が始まっている。七三～五年の世界恐慌・それに続く構造的不況とソ米覇権争奪―第三次帝国主義戦争の序曲という、体制的危機の第一段階では、ブルジョア階級の動揺をついて、むしろ現代修正主義が「ユーロ・コミュニズム」として純化しながら社会民主主義と接近し、始まったプロレタリア階級の反抗の増大を欺瞞かつ利用して彼らが政権の座に近づきプロレタリア階級をプロ独・社会主義革命から切り離して、「米ソの国際的緊張緩和」・議会主義の「左翼連合政権」・資本主義の「民主的改良」―「健全な資本主義―福祉国家」という欺瞞的幻想をもって、この体制的危機の救済者として立ち現われた。

しかし、米・西欧・日の世界市場をめぐる相互の対立と利権争闘の激化―各国の蓄積構造・産業構造の死活をかけた競合と新植民地主義的侵略の強化、及び第三次帝国主義戦争の第一段階への移行と共に拍車がかかった、米―西欧―日の、対ソ連社帝・対民族解放闘争をめぐる相互の連携・共同対処と戦争体制づくりという中でブルジョア階級の側からの全般的反動が急速に強まり、これに対抗して階級闘争が急速に強まり、これに対抗して階級闘争が尖鋭化・激化し、その結果、「ユーロ・コミュニズム」と社会民主主義の破産・相互の分解・内部矛盾も一挙に突き出されている。特に、ベトナムのカンボジア侵略・中越国境衝突の前で、再びソ連社帝との結託に向かうか（日本・仏）、渦にまきこまれたくない、その外にとどまっていたいという小ブル平和主義（伊・スペイン）へと分解し、各々党内対立や離反を生み出し、破産を深めているのである。ブルジョア階級の労働者階級に対する搾取・収奪・抑圧の強化・階級闘争の弾圧と政治反動の強化、戦争準備と新植民地主義的侵略への拍車と、「ユーロ・コミュニズム」・社会民主主義の破産・分解は、彼らをして一層ブルジョア階級への屈服と忠勤へと向かわしめずにはおかない。だがそれは階級対立と階級闘争が一段と深まり、尖鋭化しつつあることを示すものであり、労働者階級の深部からの闘いが新旧修正主義の桎梏を突き破って前進し、マルクス・レーニン主義の革命的政治潮流の成長を促進し、又革命的潮流と結びついて大胆に前進していく条件が増々拡大していることを示している。しかも、これは民族解放闘争の発展によって一層促進されている。

こうして第三次帝国主義戦争の第一段階は、西欧・日本の体制的危機の深化―第二段階への移行と社会主義革命に向けた胎動の本格化・革命の要素のくっきりした登場へと向かわせている。

だから、我々は次のように言わねばならない。ソ連社帝を攻勢的推進者として始まった帝国主義戦争の第一段階は、不可避的に米帝と西欧諸帝・日帝の対ソ戦争準備と反動と侵略反革命を強め、そうして又、第三世界における民族解放闘争の新たな発展激化と、西欧・日本における階級闘争の一段と深く、鋭い拡大・激化を導かずにはおかない。だからこそ、反ソ連米擁帝と戦争の要素一辺倒の傾向に反対して、反帝反社帝を根幹に堅持した反ソ反米反覇権の国際路線の下に、戦争の要素の増大の中にそれとからみあい、対抗的に革命の要素がいかに成長しつつあるか、その条件がどのように成長しつつあるかをこそつかみ出して、それに応じた任務を果していかねばならない。

第三章　マルクス・レーニン主義と現代修正主義の分裂と闘争の拡大・発展

（略）

第四章　日本帝国主義の体制的危機と歴史的地位

第三次帝国主義戦争の第一段階への移行と結びついて、日本帝国主義の体制的危機も一段と深まり、ブルジョア階級の帝国主義戦争の本格的準備への着手と、プロレタリア階級の社会主義革命の真剣な準備の開始という、〈帝国主義戦争と社会主義革命〉の本格的開始という情勢を明らかにしている。それ故、社会主義革命の真剣な準備という見地から、現在の情勢の真の性格・意義・歴史的地位を明らかにすることが是非とも必要である。

a　戦後日本帝国主義とブルジョア階級独裁・安保体制

戦後米帝占領軍による、革命的人民闘争抑圧と一連のブルジョア的諸改革によって、支配階級としての地位を打ち固めたブルジョア階級は、五〇年代初頭に、ブルジョア国家として独立すると共に、急速に自己の中央集権的国家機構を整備・強化し、強蓄積と独占資本主義の発展をおし進めた。この独立は米帝の

支配を除去したものではなく、広汎に残存させ、日本のブルジョア階級独裁がそれに依存し、補完され、かつ一定支配され従属するものとしてあり、また日本の独占ブルジョア階級が米帝の後楯の下に帝国主義復活をおし進めるための保障となし、よってもって米帝のアジア戦略を補完するという体制＝日米安保体制としてあった。この日米安保体制下で、独占資本主義の急速な発展と金融寡頭制の確立、それに照応する上部構造の反動的整備をおし進め、労働運動における日和見主義・改良主義を育成し、小ブルジョア階級をひきつけ、こうして帝国主義復活を遂げていった。

この上に立って、戦後世界資本主義の再編成に際して遅れをとった日本資本主義は、この遅れを急速にとりもどしつつ、新たな世界資本主義体制に自らを組み込み、その中で自己の帝国主義的地位を確立する段階へと向かった。六〇年安保改定は、日米安保体制を、この日帝の復興を背景に、米帝の世界支配の下での米・西独・日の世界資本主義の再編成―市場競争と、アジアにおける米帝の中国包囲・新植民地主義体制の日帝による補完―日帝の対外膨張を骨格とする、従属的な帝国主義軍事同盟へと再編するものとなり、依存と補完、一定の支配と従属は、国内面での比重を縮小しつつ、米帝のアジア支配と日帝の対外拡張の面でのそれへ重心を移すものとなったのである。こうして貿易・資本の自由化―「開放経済体制」への移行と、六一～二年の恐慌、それに引き続く不況の中で、「国際競争力強化」の下に、資本の大規模な集中、鉄鋼・造船・自動車・電機等での技術革新と生産の集積・集中をおし進め、重化学工業を中心とする独占体制と金融寡頭制を飛躍的に強め、欧州市場への割り込みとアジアへの新植民地主義侵出―対外拡張を一途におし進めつつ、これらに照応して政治反動を一段と強めた。この過程で、農村の分解―農民の広汎な層を都市労働者と貧農＝半プロレタリアへと転化し、中農に対する独占の支配と収奪を強めた。こうして巨大なプロレタリア階級が一層大規模に形成されると同時に、その上層を系統的に買収して労働貴族を育成し、帝国主義労働運動を育成し、現代修正主義の社会帝国主義への転化を促し、ブルジョア階級独裁の社会的支柱を強化し、他方では広大な下層を相対的過剰人口として滞留せしめ、あらゆる形での差別・分断支配を強化した。

こうして日帝は、七〇年代の初頭には、イ、重化学工業を中心とする、生産と資本の大規模な集積・集中と経済生活全体を支配する巨大独占、ロ、六大グループの金融資本の金融寡頭制支配と、ブルジョア国家機関と直接に融合するに到るほどのその強固な掌握、ハ、資本輸出、ニ、国際独占体への発展と新植民地主義支配、世界の経済的再分割、ホ、沖縄再併合と釣魚台諸島をめぐる領土分割の開始、という〈五つの標識〉を明確に刻印するほどに、帝国主義としての全特徴を露わにし、その国際的地位を築き上げた。しかしこれは、米帝の後楯の下に、また米帝を補完しつつ、その枠内での勢力圏拡大として進行し、米

帝に比して依然二流の帝国主義という、相互の地位と力の相互関係によって、日米安保体制の継続を不可欠としたものであった。他方、日米安保体制は、日本社会主義革命鎮圧のための、民族解放闘争や社会主義国に対する反革命的対抗のための、アジアにおける新植民地主義支配のための、そしてソ社帝に対抗し勢力圏を防衛し、世界再分割を推し進めるための、また以上における相互の関係を規定するものとして、公然たる帝国主義相互関係の体制たること―この性質に貫かれた依存と補完、一定の支配と従属たることをあからさまにした。

b　七〇年代中期から始まった日本帝国主義の体制的危機の根底性と歴史的地位

だが、日帝の帝国主義としての全面確立と世界再分割の一角への公然たる転化は、同時にその危機と没落の歴史的傾向の開始に他ならず、社会主義革命の接近と社会主義革命に向けた胎動の始まりに他ならない。そしてこのことは、史上三度目の戦争と革命の時代の公然化と固く結びついた、七〇年代中期からの体制的危機の始まりとして現実のものとなった。

第一に、七三～五年の過剰生産恐慌とそれに引き続く構造的不況は、五〇年代後半～六〇年代初頭の蓄積を基礎にし、更に六〇年代中期以降の「開放経済体制」下の、世界市場再分割・資本輸出と一体となった強蓄積の全帰結であり、その意味で戦後日本資本主義の発展の全帰結であり、まさしく日本資本主義の全構造に関わる、構造的矛盾・危機の露呈に他ならない。この構造的矛盾・危機の根底に横たわっているものこそ、生産手段が資本家階級によって独占され―なかんずく一握りの金融資本の下に膨大な生産手段が集積・集中され―、労働者階級が賃金奴隷として彼らに経済的に従属させられているという資本主義的生産様式の土台と、この下で賃労働の搾取を規定的目的・推進動機とする資本主義的生産の発展としてつくり出された生産の巨大な社会化と巨大な生産諸力とが激しく衝突していること、従ってまた、生産の社会化の全成果と巨大な生産力をわがものとして領有している金融資本の巨大な致富と、資本に対する賃労働の従属の深まり、労働者階級・被搾取勤労大衆の困窮という社会的不平等と隔たりが未曽有のものとなり、それと生産諸力の実現とが激しく衝突していること、更に社会的総生産の無政府性―発展の不均等性と諸部門間の巨大な不均衡が、技術の改善と生産諸力の新たな発展の桎梏へと転化していること、このことに他ならない。こういうことが、日本資本主義の蓄積の基軸となり、生産の巨大な社会化と巨大な生産力と巨大な独占体を成立させ、独占利潤獲得の基礎となってきた、重化学工業部門における膨大な過剰生産と過剰資本の累積―停滞と腐朽として集中的に現われているのだ。日本資本主義の構造的矛盾・危機とはこのことに他ならない

そして資本主義的生産関係の下では、それはただ、生産諸力

の暴力的破壊をともなった、諸資本の没落と一握りの金融資本の下への生産と資本の一層の集中、彼らの更なる致富、小生産者の一層の零落、資本に対する賃労働の従属の一層の深まりと労働者階級の状態の相対的、絶対的悪化、社会的総生産の無政府性と発展の不均等―より多くの資本を要する、より多くの独占利潤の取得をもたらす部門への資本の集中的投下と諸部門間の不均衡の一層の拡大、更に資本輸出への拍車と世界市場再分割の激化をもって、総じて矛盾を一層深刻化し激化させる方向でもって打開されていく以外にはありえない。

七〇年代後半期以来の「設備廃棄」(繊維はおろか、鉄鋼・造船にまでいたる)を伴った徹底した「減量合理化」、史上最高の企業倒産、百数十万人の完全失業者の常態化から、更に「国際競争力に耐えきれない業種を思い切って再編し、合理化・労働力削減をすすめる」や「原子力、航空宇宙、電子工業等『知識集約型産業構造』への転換」、「資本輸出の増強と国際分業関係の再編」等々がこのことを如実に示している。だがそうすることによって、プロレタリア階級の社会主義革命をいよいよ緊切な、いよいよ猶予ならないものへと押し上げ、よびさまされているプロレタリア階級の組織的反抗の増大を社会主義革命の革命的力へと鍛え上げ、訓練していく条件をますます広く深くつくり出していくのだ。二〇年の発展によって準備された社会主義革命の接近と社会主義革命への胎動が現実のものとなっていること―ここに日本帝国主義の体制的危機の根幹が存在する。

第二に、日本資本主義の構造的矛盾・危機のこのような打開の方向は、この危機が体制的世界史的なものである以上、巨大な国際的諸矛盾に突き当たり、それを一層激化させる方向に向かわざるをえない。民族解放闘争の高揚と、ソ社帝の攻勢的な世界再分割への侵出は、米帝の相対的後退をもたらし、戦後の国際的帝国主義体制そのものを揺さぶっている。民族解放闘争の昂揚と第三世界諸国の資源確保を通じた「新国際経済秩序」要求の昂まりは、日帝の新植民地支配・勢力圏を直接に脅かすと同時に、帝国主義間矛盾を激化させ、「持たざる帝国主義」西欧諸帝、日帝の危機を深めさせた。更にソ社帝の攻勢的な世界再分割と米ソ覇権争奪激化は、日帝をも世界再分割戦の死活をかけた一角へと一層つき動かしている。それに加えて帝国主義の不均等発展と対立の中で、六〇年代全期を通じて確立し、日帝の急速な発展・成長の基軸であった鉄鋼・造船・自動車・電機等の「戦略」産業が、市場そのものを狭められた大きな障壁にぶつかり、更に、列強間における蓄積構造―産業構造転換と資源確保をめぐる激しい主導権争奪・角逐の中で、逆に巨大な脆弱性へと転化しているのだ。

米帝は既に六〇年代から、その巨大な資本力と資源独占をテコに、原子力・石油・航空宇宙・電子工学産業を中軸とする国家的プロジェクトを開始し、この転換を推し進め、ここ数年それをとみに強化することによって、　他列強への主導権を確立せんとしてきた。(仏帝も六〇年代以来、独自の資源確保と共

にこれを推進してきている)むしろ西独帝・日帝等、米帝との従属的同盟の下に、資源・軍事力等で米帝に依存しつつ急速な発展をとげた帝国主義が、逆に現在新たな立ち遅れ、困難、脆弱性を示さざるをえず、米帝との政治的‖軍事的な従属的同盟の制約を受けざるをえない。

こうして、日帝にとっては、自己の安定・発展・国際的地位の保障であった米帝との従属的同盟が、逆に不断の動揺・危機・制約の一条件へと転化し、また巨大な成長をとげた「戦略」産業そのものが、逆に構造的矛盾の打開の巨大な困難・障害へと転化してしまっている。しかもなお、日帝にとっては、民族解放闘争・反帝反植反覇権闘争の昂揚に対抗し、ソ社帝の攻勢的再分割戦に対抗して勢力圏を維持・拡大するには、米帝を後楯とせざるをえず、米帝への依拠と独自の国際競争力をつけねばならないという矛盾をかかえざるをえない。それ故、不断にソ米覇権争奪の動向に左右されながら、米帝の世界戦略の一角を担う仕方で、帝国主義戦争の準備に向かわざるをえないのである。かくて日帝は、日米安保体制を結び目にして、ソ米覇権争奪の矛盾、帝国主義国と被抑圧民族との間の矛盾、帝国主義国間矛盾を一挙にかかえこまざるをえず、これらの矛盾は、戦争と革命の時代の深まりの中で激化せざるをえず、ますます日本を戦争と革命の直接の一環へと転化していかざるをえない。

以上の二つの結びつきにこそ、今日の日帝の体制的危機の根底性とその歴史的地位がある。また、そこに革命的情勢の成長の不可避性があり、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命を戦取していく現実性が示されている。

この体制的危機は、七〇年中～後期の第一段階から、今第二段階へと突き進み始めている。

第五章　帝国主義戦争と社会主義革命の本格的接近

a　日本帝国主義の体制的危機と大平政権

七〇年代中期以来、日帝の体制的危機に直面して、金融独占ブルジョア階級は、日帝の進路と内外政策をめぐる様々な色合いと傾向における一連の抗争をくり広げつつ、二つの点に全力を傾注した。第一は、「当面政府が、不安定になろうとも、警察・官僚機構がしっかりし、労使関係が安定していれば日本の社会が危機に陥ることはないだろう」(七六・桜田発言)に示されるように、自己の支配の軍事的支柱たるブルジョア国家権力―官僚的‖軍事的国家機関を更に固く握りしめ、強化肥大化し、労働貴族と社会帝国主義潮流を自己の支配の社会的支柱として

更に育成再編し、ブルジョア階級に対する一層の協力と忠勤にひきつけ、労働運動の戦闘的爆発と人民闘争の発展を抑圧し、「減量経営」「減産減収増益」と、原子力開発等の、暴力的な全般的資本攻勢を推進することであった。第二は、七六年経団連の「防衛力整備に関する我々の見解」に示された、「雇用問題・所得問題などの国民経済との関連を常に追求し、自主技術の開発と国産化の推進を図り、防衛率の向上に資する方策をとる」と、「日米防衛協力」をめぐっての「国防問題をめぐる総合戦略」を確定することであった。前者が当面のさし迫った危機の乗り切りであるとすれば、後者は戦争と革命の時代の本格化における、内外にわたる困難を打開していく日帝の進路―まさに八〇年代全般にわたる―の確定に関わるものであり、それ故、支配階級内での一連のジグザグと抗争をひきおこした。

すなわち、七六年福田は、経済的・政治的危機克服を軍事力の飛躍的強化・独自の核保有を前面に押し立て、これを国家的軸とする原子力・航空宇宙・電子工業中心の産業構造への急速な転換を推し進めることを掲げて登場した。それ故、中小資本や消費材部門、交通運輸部門の大規模な整理と集中、赤字国債の大量発行や一般消費税等大衆収奪の国家的実施と軍需投資―軍需インフレの推進、国家資本・国家独占の飛躍的強化と官僚統制の導入をテコとした金融寡頭制―国家独占資本主義の飛躍的強化、朝鮮南半部をその一環とした軍需産業の大々的育成と原子力開発の強行等を図らんとし、又中東・オーストラリア・アフリカ等へ石油・ウランの独自的確保に乗り出し、更には対ソ接近を強め、米帝からの独自的傾向を強めた。しかし、これは、一方で核燃料再処理や対ソ戦略をめぐって激しく米帝との矛盾を生起させ、他方、国内でも、ブルジョア階級内部の反発（一部独占から中小ブルジョア階級を含んで）を招き、一部労働貴族や小ブルジョア階級の危機感をつのらせ、又、人民闘争が鋭く激化する中で、更にそれに中国の反覇権外交と米帝の対ソ戦略による日中平和友好条約締結・米中国交樹立という国際関係の変化がつけ加わり、作用する中で破産し、大平政権へと移行した。

大平は「軍事力だけではなく、経済力・技術力・政治力など いろんな国力が緊張したバランスの中で、一つのチェーン（鎖）をつくり、国の安全が支えられていくものと思う。政治全体としては総合的安全保障戦略を頭において全体の政治運営をやる」という「総合安全保障戦略」を掲げ、その基軸に「日米安保体制の再編強化・自衛隊の質的強化による軍事的安全保障を根源とする」という、米帝の基本戦略との一致を据え、この「一つの戦略」を「二つの計画」（＝田園都市構想と家庭基盤の充実）や「民主・対話・連合」なる甘いオブラートでおおい包み、危機感を抱いた労働貴族、中・小ブルジョア階級を慰撫して全体的にひきつけ、金融独占ブルジョア階級全体の支持によって擁立された。このことでもって、支配階級は一連のジグザグと内部抗争に一定の決着をつけ、当面の日帝の進路と内外政策の基

本を確定したと言いうる。

b 「総合安保戦略」の本質＝帝国主義戦争の総合的準備

この総合安保戦略は、経済的には①対外協調の下での石油・原子力を中心とするエネルギー開発・資源確保、②米巨大独占に依拠かつ競合する下での技術開発と「知識集約」型産業構造＝原子力・航空宇宙・電子工学・情報産業を先導産業とした産業構造＝への転換、③赤字国債・増税・一般消費税・公共料金値上げ等大衆収奪の国家的実施をテコにした財政主導による不況対策（民需インフレ）―大規模な「公共投資」・大型プロジェクトによる、産業構造転換への「産業基盤整備」、④造船・アルミ・繊維等の構造不況業種の「過剰設備の廃棄」、小農的土地所有と食管制解体及び農産物輸入の大々化をテコとした農業解体の促進、⑤在来重化学工業部門を中心とする第三世界への資本輸出強化と国際分業再編（資源・エネルギーの現地調達と加工化をもって素材製品の日本国内への供給地として組み込んでいく「国際分業」）・「中国市場」への接近と石油共同開発―総じて「環太平洋国際経済秩序」なる勢力圏拡大・構築、以上を概要としている。

政治・軍事的には、①日米安保体制の再編・強化、とくに対ソ社帝対決・朝鮮「有事」を眼目とする米日韓軍事一体化と、「アジア太平洋安保」としての日米同盟の緊密化―日米防衛ガイドラインと安保分担の再編＝自衛隊増強による「防衛分担・軍事協力」の拡大、②自衛隊の質的増強（「防衛問題の国民的合意」形成、防衛二法の大改定と軍令の独立体系化、「基盤的防衛力」確立とバッジシステム等自衛隊の質的強化、海外派兵のなし崩し的実質化）と「危機管理体制」の構築＝「有事」体制の実質化、③政治的反動の促進―体制的危機と戦争準備に応じた治安弾圧体制の強化、④労働運動の右翼的再編統一を促進し、労働貴族を全体としてブルジョア階級に対する協力へ組織し、小ブルジョア層を再結集し、これらの政治的表現として「中道勢力」を事実上の部分連合へと取り組み、社会党の分解を促進し、ブルジョア議会制政府の欺瞞的「安定」を再確保すること、⑤戦闘的労働者人民の闘いと革命的戦闘的党派への弾圧を一層強化し、他方でブルジョア議会制の欺瞞、「民主・対話・連合」の欺瞞を駆使して、戦線の分断を策していくこと、以上を概要としている。

日帝は米ソ二超大国に対する二流帝国主義としての地位に規定されて、①ソ米覇権争奪の激化―第三次帝国主義戦争の第一段階への移行、ソ社帝のベトナムを足がかりとした南下政策・攻勢的再分割戦、米帝の西欧諸帝・日帝を引きつけた対ソ覇権争奪、防衛とまき返しの新たな戦争準備にあって、米帝の後楯の下に、ソ社帝に対抗して勢力圏を防衛・拡大し、米帝主導の新たな戦争準備の一角を積極的に担っていくこと。日米安保体

制の、この戦争準備体制への再編強化、②この軍事体制と結びついて、米・EC・日間での市場争奪の死命を制する資源確保及び先端技術産業の技術開発・資本投下・市場支配をめぐる争闘において、米帝の圧倒的独占的地位とその要求を認めつつ、それに依拠して、この面での立ち遅れ（仏帝等に比しても）、技術革新の停滞を打開し、財政主導―民需インフレをテコに国家独占資本主義を強化し、もって金融資本の支配・搾取・収奪を一層包括的に強め、その莫大な独占利潤の官僚的保証機構をつくり出し、かつ独占体間の国際的闘争を強化するテコとしていくこと、③民族解放闘争の昂まりと第三世界諸国の新国際秩序要求の高まり、更には韓国・台湾・香港・シンガポール等の、日・米独占資本の進出―買弁資本の育成・肥大化による「工業化」→日本国内産業との競合に直面して、米帝の軍事力を後楯としつつ米帝に地域的にとってかわり、在来重化学工業部門に累積する膨大な過剰資本の資本輸出を増強して一層広範囲で包括的な勢力圏を形成し、社会主義国にも触手を伸ばし、もって米帝の世界覇権争奪をも補完するという、世界再分割戦の一角を本格的に担い、推進する侵略反革命の拡大強化、④以上と不可分一体に、ブルジョア階級独裁の反動化―官僚的＝軍事的国家機関の膨張とプロレタリア階級・被搾取勤労大衆に対する弾圧を強め、労働貴族全般・社会帝国主義潮流の全般的忠勤・協力をテコにプロレタリア階級を帝国主義国家に更に隷属せしめ、とくにその下層・被差別大衆に対する差別支配を強化し、議会制ブルジョア民主主義の欺瞞をも駆使しつつ、全線にわたって「戦争と反動・反革命の挙国体制」をつくり出すこと、以上を基本路線とするものに他ならない。一言で言えば、帝国主義戦争の本格的総合的準備に他ならない。

c　帝国主義と社会主義革命の本格的接近＝戦争と革命の八十年代へ

だが、日帝のこの死活をかけた推進は、大平がどのような甘い言葉で飾ろうとも、それは矛盾の一層の尖鋭化と深化であり、以下の事態を不可避的に進行させずにはおかず、社会主義革命の情勢を一層近づけ、成長させないわけにはいかない。

すなわち、第一に、「減量合理化」に引き続いて、産業再編に結びついた全般的資本攻勢を一段と拡大し、一方での、首切り合理化・倒産解雇攻撃・大量の失業者の慢性化と、他方での、奴隷労働強化という資本専制・賃労働の従属・労働者階級の災禍の深まりであり、小生産者の暴力的な駆逐、資本集中の推進であり、財政危機と悪性インフレの泥沼化から一層大規模な大衆収奪の国家的実施への移行・更には経済の軍事化の準備であり、そうして労働者・被搾取勤労大衆には軍事的苦役を、独占資本には一層計画的な独占利潤の保障をもたらす、官僚組織の「計画と統制」の導入である。第二に、国内での「労働力削減」・大衆の貧困・農業の解体・「労働集約型」産業の廃棄と、第三

世界への資本輸出増強―国際分業再編は、日本資本主義の腐朽化と寄生性を著しく強め、プロレタリア階級と半プロレタリア階級の下層の大衆への重圧をいよいよ耐え難いものとすると同時に、日本資本主義をして第三世界諸国の体にまとわりつく寄生体＝その収奪・「貢物」によって命脈を確保するという性格をいよいよ強めずにはおかない。第三に、こうして、生産の社会化と生産の国際的集積の新段階の一層の推進が、生産手段の資本主義私有、取得の資本主義的私的性格との矛盾を一段と激化させ、独占と競争の矛盾を更に尖鋭化させ、物資の生産と分配の社会的規制の機構を準備し、もって社会主義のための物質的諸条件をいよいよ成熟させ、死滅しつつある資本主義＝プロレタリア階級の社会革命の直接の前夜としての全性格をいよいよ明らかにする。第四に、プロレタリア階級の組織的反抗と人民闘争を更に増大・拡大・激化させ、死活をかけた闘いとして尖鋭化せずにはおかず、又民族解放闘争の一層の昂揚と激化を招来せずにはおかない。そしてこの発展が、他ならぬトラストの圧迫と帝国主義国家への隷属をこそ巨大な障害・決定的桎梏として突き出し、こうしてブルジョア階級に対するプロレタリア階級を指導勢力とし、そのもとに被搾取大衆を率いた内乱と、帝国主義に対する被抑圧民族の民族解放戦争が不可分に結びつくような、体制的危機と矛盾を深めずにはおかない。第五に、帝国主義戦争の準備そのものが、国内の階級闘争と民族解放闘争の軍事的・武装的緊張を強め、その一切の真剣な継続を武装蜂起・革命戦争へと到らしめる客観的環境を醸成せしめずにはおかず、又この帝国主義戦争の準備が、ソ米覇権争奪・その戦争の要素の動向に左右されざるをえない動揺性とひび割れを通じて、労働者と被搾取大衆の政治舞台への登場と歴史的行動への端緒が噴出していく可能性を内在させずにはおかないのである。

いずれにせよ、文字通り戦争と革命の時代へと深まっていく八〇年代全般の情勢が、金融独占ブルジョア階級によって、「総合安保戦略」をもって告知され、その最初の一歩が始まったこと―ブルジョア階級の帝国主義戦争の本格的準備の第一歩と、プロレタリア階級の社会主義革命の真に真剣な準備の第一歩、この死活をかけた闘いが全般にわたって始まっていること、ここに現在の情勢の核心がある。

d　体制的危機の第二段階への移行と革命的昂揚の第二歩への準備―現局面の性格

金融独占ブルジョアジーは大平政権擁立をテコにして、ソ米覇権争奪の激化―第三次帝国主義戦争の第一段階にあって、米帝との従属的同盟を強め、日米安保体制を強化し、米日韓軍事一体化＝朝鮮侵略反革命戦争準備体制に集中し、ソ社帝との勢力圏再分割戦に備えている。それと国内での反動の強化＝「有事」体制の実質化と、国家独占資本主義の強化をテコとする一

層大規模な搾取・収奪の系統的組織化を結びつけている。更に労働貴族を大結集して、戦争準備協力と産業報国会への「戦線統一」を促すために力を注いでいる。

確かに、大平政権擁立後の最初の一年、金融独占ブルジョアジーは、一時的な一定の「余裕と安定」を回復した。それは以下の諸要因によってもたらされた。①日帝の進路と内外政策をめぐる内部の亀裂・抗争に一定の決着をつけ、基本路線を確定したこと、②この最初の推進が、「一方では種々の関係や結合の異常に広汎に張りめぐらされた濃密な網をつくり出して、中小資本家ばかりでなく極小の資本家や経営者をも大量に隷属させているところの巨大な規模の金融資本、他方では世界の分割と他国に対する支配のための、他の民族的＝国家的金融業者団との激烈な闘争―これら全ては一切の所有者階級を（また労働貴族を）全般的に帝国主義の側に移行させている」という事態をもたらしたこと、③「減量合理化」を改良主義の破産と労働貴族の一層あからさまな協力の下に一段階乗り切り、大規模な財政投資によって、構造的不況の中でのゆるやかな景気回復に向かったことが、②に一定の基礎を与えたこと、④この上に立って、いくばくかの利潤と国家財政の小部分の配分、「産業再編―国際競争力強化・勢力圏の防衛と拡大・その軍事的保障」によるこの配分の増大の約束が、②を促進したこと、⑤米日韓軍事一体化やASEAN体制の協力圏としての確保や「エジプト―イスラエル和平」後のエジプト・トルコへの「援助」等の侵略反革命強化を、ソ社帝との対抗上、又反帝反植反覇権闘争に押されて、対中国接近や民主カンボジア支持とベトナム援助というインドシナへの欺瞞的対応やPLOへの接近等の「第三世界寄りのポーズ」の欺瞞的対応と結びつけ、おおい隠していること、⑥以上に立って、「有事」体制の実質化に端的なブルジョア階級独裁の反動化を全線におし拡げつつ、「中道勢力」を取り込んでブルジョア議会制政府を安定させ、「民主・対話・連合」の欺瞞的幻想をふりまいて分断策動を強め、「戦争と反動・反革命の挙国体制」の一層広い組織化に結びつけ、破産した改良主義の分解・結集を促進し、小ブルジョアジーを欺いていること、⑦七八年革命的高揚の第一歩を戦取した先進的プロレタリアートと人民勢力の間で、急進民主主義と反スタ・トロツキズムが指導権を握っていたため、動揺・分解・逆流を一時的に不可避としたこと、等である。

だが、これは一時的な息つぎでしかありえず、一層広く、深い矛盾の激化と諸衝突の準備でしかありえない。事実、イラン革命に引き続くOPECの原油再引き上げは、日帝をも直撃し、死活をかけた「先端技術産業の育成」を掘り崩し、朝鮮人民の南北の自主的平和統一の闘い、なかんづく南半部人民の朴打倒・民主化闘争の新たな広大な昂まりと朴の危機の進行は、米・日帝の「韓国死守・より安定した支配・南北分断固定化」を根底から揺り動かし、日帝の「生命線・環太平洋勢力圏の要」を揺り動かしている。そして国内では、労働者階級の反撃戦が、

社共・民同の改良主義・日和見主義の破産を踏み越え、右翼的帝国主義的労戦統一に対抗しながら持続・拡大し、徐々に奔流を形成しつつあり、被差別大衆の闘争も、反動の強化―差別支配の強化と犠牲の集中に抗して自主的決起・反差別共闘・労働者階級との結合の強化へ、新たな前進を開始しつつある。農民も又、戦後農業の根本的解体―離農化抗撃に抗し、政府・独占との正面切った全面的対決を形成しつつある。更に財政危機の進行と一大増税攻撃を前に、解体と没落の瀬戸際に立たされている都市の小ブルジョアジーの中でも、次第に反政府・反独占の闘いが形成されつつある。そして学生・知識人の間でも、とりわけ、朝鮮人民の闘いに鼓舞され、日本の労働者・農民の闘いに鼓舞されて、人民闘争の一翼を担い、徐々に昂揚へ向かいつつある。

こうして、今では、体制的危機の第二段階への移行が明らかとなり、革命的昂揚の第二歩に向けたうねりが徐々に始まっている。

然り！　体制的危機の第二段階への移行と、ブルジョア階級の帝国主義戦争準備とプロレタリア階級の社会主義革命準備をめぐる死活をかけた闘いの始まり―革命的昂揚の第二歩に向けたうねりの始まり、一層広く、深く、激烈な諸衝突に到る全戦線にわたる双方からの準備、これこそ現局面の真の性格に他ならない。だがそうであるからこそ、我々は、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をめざして、その主体的条件を整えるために、この一時期の死活をかけた闘い・革命的昂揚の第二歩をどのように準備すべきかを、一層厳密にしていかねばならない。

第六章　日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の政治路線と反ソ反米反覇権の国際人民闘争を結合し、「正規の攻囲」を組織せよ！

a　戦争と革命に対する労働者階級の態度を整え、革命的祖国敗北主義を真に確立せよ

我々は今、全力をあげて、日帝の帝国主義戦争の本格的準備と首尾一貫して闘争し抜く、プロレタリア階級の革命的態度を整えなければならない。

第一は、この戦争の性格・目的・根源を余すところなく暴露し、革命的祖国敗北主義を前面に押し出し、社会主義革命の準備のために闘うことを鮮明にすることである。日帝のこの戦争準備は、日帝の体制的危機を深めてきた被抑圧民族人民の民族解放闘争を鎮圧し、市場・資源・資本の投下域・被抑圧民族に対する支配権等を確保するためであり、国内のプロレタリア階級人民の反抗の増大を抑圧し、その前衛部隊を鎮圧し、資本主義

的奴隷制とブルジョア階級独裁を延命させんがためであり、更には米帝のソ社帝との全世界的覇権争奪の一角を担って、自己の帝国主義的地位の分け前を強化するためである。資本主義的独占と金融資本の支配の基礎の上では、そして帝国主義的争奪と幾百万の糸というより綱で結びついている階級の権力が支配している限り、このことは避けられない。それ故、この戦争（準備）に真に反対し、その重圧から脱出するには、反ソ或いは反米民族解放という「祖国擁護」との分水嶺をきっぱりとひき、（自国）帝国主義そのものの打倒のために、すなわちブルジョア階級独裁を打倒してプロレタリア階級独裁を樹立し、金融資本の収奪からはじめて資本主義的生産関係を廃止し、社会主義社会の基礎を創設すること、一言でいえばプロレタリア社会主義革命のために闘わねばならない。社会主義に向っての前進、これだけが唯一の可能な道であり、ブルジョア階級の打倒をめざすプロレタリア階級の国内戦を準備すること、これだけが帝国主義戦争準備に対する唯一の戦術である。この革命的祖国敗北主義を広めねばならない。そして帝国主義戦争の準備が現にもたらしている反動の強化、大規模な搾取・収奪の系統的組織化、軍備拡張、労働組合の産報化と奴隷労働の強化等の全重圧の激化に対する汎ゆる闘争を、社会主義革命と国内戦の準備に固く結合させておし広げ、これらの汎ゆる階級的諸衝突を促進し、それが生み出す団結と組織の要素、闘争力を、この思想で、この政治的自覚で満たし、革命家の組織に結合させ、整備して、社会主義革命の準備を全線におし広げていかねばならない。

第二に、ソ連社会帝国主義の批判・暴露を強め、ソ米の全世界的覇権争奪の激化と第三次帝国主義戦争の第一段階を暴露し、そうすることで現在の日帝の戦争準備が、その一環をなすアジア全域での米日両帝国主義とソ社帝の帝国主義間争闘として促進されていることを明確にし、革命的祖国敗北主義の立場と実践をおし広げていくことである。

第三に、現在の世界情勢において、ソ米覇権争奪をはじめとする帝国主義国相互間の矛盾が激化すると同時に、そのことによってソ米両超大国をはじめとする帝国主義国と被抑圧民族の矛盾が一層激化し、民族解放闘争をますます発展させている。それ故、第三次帝国主義戦争の第一段階は、民族解放闘争の抑圧、被抑圧民族に対する支配権の争奪をめぐる相互の侵略反革命戦争を主要な性格としている。従って日帝の戦争準備は、アジアにおける民族解放闘争の二つの最前線＝民主カンボジアの抗越抗ソ救国闘争と、朝鮮人民の南北自主統一・反米反日朴打倒の闘い＝のうち、後者に対する朝鮮侵略反革命戦争の準備としてあることを明らかにし、もって、民族解放闘争と結合・連帯して、反覇権・自国帝国主義打倒の戦列をつくりだしていかねばならない。

第四に、日帝の戦争準備は、日米安保体制を支えとし、米帝の戦争準備と不可分に結びつき、依存し、かつ補完している。まさにそのことによって、米帝のソ社帝との全世界的覇権争奪

と結びついてその一角を担い、米帝の国際的な侵略反革命と連動している。こうして日米安保体制を自己の帝国主義的位置の保障としているのと同時に、国内での反動・反革命のテコとしている。（こういうことに「日本のブルジョア階級独裁が米帝に一定依存し、補完され、一定支配され従属している」ことが端的に示されている）それ故、革命的祖国敗北主義は米帝追放を固く結合させることによって、真に全面的なものとすることができるのであり、日帝打倒・米帝追放を鮮明にしていかねばならない。

第五に、今日、被抑圧民族人民の民族民主革命闘争は世界革命の主力軍として巨大な発展を遂げ、又第三世界諸国の反帝反植反覇権闘争はソ米の全世界的覇権争奪と世界大戦に反対する闘争の主力軍となっている。それ故、革命的祖国敗北主義は、第三世界の反帝反植反覇権闘争を主力軍とする反ソ反米反覇権の国際人民闘争の大方向と結合し、その一環をなし、民族民主革命闘争との結合を強め、世界革命を促進するということによって、一層確固たる、国際主義に貫かれたものとすることができるし、そうしなければならない。

以上、日帝の戦争準備に対して、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をまっすぐにめざして闘い、朝鮮人民の民族解放闘争・自主的平和統一、民主カンボジア人民の救国闘争と連帯し、第三世界の反帝反植反覇権闘争を主力軍とする反ソ反米反覇権の国際人民闘争の大方向と結合して闘わねばならない。

こうして社会主義革命を実現し抜くことだけが、わが国の全人民を帝国主義戦争から脱出させ、その重圧から解放すると同時に、二超大国とその世界大戦に対峙する革命的防壁・砦を築き、アジアの社会主義国との緊密な同盟を築き、「自国の」侵略反革命・新植民地支配・他民族抑圧を真に廃絶し、民族解放闘争に真の支援をなしうるその大後方へと転化させることができる。これこそが、日本のプロレタリア階級にとって迫りつつある歴史的使命であり、この革命的自覚と決意をよびさますために奮闘しなければならない。

事実、帝国主義戦争の接近は社会主義革命の情勢を近づけ、それは更に今日の世界情勢全体によって促進されている。それ故、帝国主義戦争の接近という下におけるプロレタリア階級の階級闘争の一切のあらわれ、その真剣な継続は、ただ社会主義革命をめざしてのみ可能である。その要こそ、国家権力の問題、国家と革命の問題に他ならない。

b　国家と革命に対する労働者階級の態度を整え、暴力革命・プロレタリア階級独裁を真に確立せよ

七〇年代後半の体制的危機の第一段階と革命的昂揚の第一歩は、国家と革命に関して、プロレタリア階級に巨大な教訓を与えた。この教訓を吸み尽し、現在の情勢に応じて広め、深め、打ち固めねばならない。

ブルジョア階級、なかんづく金融資本は、その独占の力の絶対的な不可避性をもって、ブルジョア国家権力―官僚・警察・軍隊からなる官僚的＝軍事的国家機関と直接に融合するほどに、それを固く掌握し、金融寡頭制の強化と共に反動と暴力への熱望を強め、プロレタリア階級の弾圧のためにこの国家機関を膨張させた。そして体制的危機にあって、それの当面の政治委員会―ブルジョア議会制政府からの相対的独立性を強め、その独自の政治的イデオロギー的支柱としての天皇制を前面化し、これと一体に差別分断支配を強めた。こうしてブルジョア階級独裁たる本質を赤裸々にしたのである。すなわち、プロレタリア階級の階級闘争をブルジョア社会の秩序内に抑圧し、賃金奴隷制のくびきにしばりつけておく、ブルジョア階級支配の機関・彼らの組織された政治暴露―官僚的＝軍事的機関であり、彼らのプロレタリア階級に対する全国的な戦いの機関＝テロルの機関であり、彼らの生産手段の独占を擁護するものであることを焼きつけた。そして（戦後）ブルジョア民主主義が、国家権力のこの本質をおおいかくす欺瞞的形式に他ならず、階級闘争がいくらかでも深刻となり、尖鋭化するや否やこの本質は露わとなり、あらゆる深刻な問題はただ内乱の手段によって決着づけられることを萌芽的に示した。これこそ、七六年秋～七八年夏の全経験に他ならない。

現在、ブルジョア階級はこの継続の上に、体制的危機の一段の深化と一層広く深く尖鋭化していく階級闘争に対応して「革命的情勢に応じた予防反革命・内乱鎮圧体制」として一層強化しつつ、とくに、日米安保体制の戦争準備体制としての強化―米軍と結びついた自衛隊の質的増強＝米日韓軍事一体化に力を注ぎ、この両者を結合させて「有事」体制の実質化に力を注いでいる。そしてこれを、労働貴族と社会帝国主義者の協力によって一定の「安定」をえているブルジョア議会政治を前面に押し出し、「戦争と反動・反革命の挙国体制」として組織するために「民主・対話・連合」の欺瞞によっておおい包んでいる。

こういうことから、一方では再び議会制政府をめぐる闘争にプロレタリア階級の矛先を引き込んでいく傾向、更に「天皇制国家官僚に対立する民間独占の代表―民主大平」などというウソが真剣に吹聴され、他方では、ファシズムを強調して急進的気分の自己満足と民主主義的危機感をあおるにすぎない空文句が広がっている。我々は、こういう両傾向を批判し、ブルジョア階級独裁の反動化と大平政権の特殊に欺瞞的側面を表裏のものとして「戦争と反動・反革命の挙国体制」に結びつけて暴露し、ブルジョア民主主義の欺瞞を暴き、ますます耐え難く増強されていく官僚的＝軍事的国家機関の膨張を、階級対立の非和解性が激化し、プロレタリア階級の組織的反抗が日増しに増大し、昂まっている現実と結びつけて暴露し、大会戦を避けられないものとしていることを明らかにしなければならない。そしてプロレタリア階級は、社会主義の勝利のためには、自己を支配階級へ、支配階級として組織されたプロレタリアートへ高め

上げねばならず、それはただ、暴力革命によってブルジョア国家権力を打ち砕き、自己の武装力に直接立脚してブルジョア階級に対する独裁を実行すること＝プロレタリア階級独裁としてのみ可能なこと、プロレタリア階級の階級闘争はまさにこのことにまで拡張し、発展させねばならず、これを頑強に準備し、実行するものとして闘い抜かねばならず、こうして大会戦を意識的＝組織的に準備しなければならないことを絶えず明らかにする必要がある。反政府闘争もこのために利用しなければならない。そして勝利の唯一つの保障である「社会主義の勝利のためにはプロレタリア階級は支配階級になるべきであるという自覚に貫かれた巨大な組織性」を、現に生み出されている条件―プロレタリア階級の日増しに増大・拡大していく組織的反抗と生産の社会化―に基きつつ、革命的宣伝・煽動・組織の活動を一層精力的に工業的に発達させ、全国的革命家の組織をあらゆる工場・地域に張りめぐらして建設し抜いていくことによって発達させていかねばならない。

その上で、現在、我々は政治的攻撃の矛先を次の点に向けねばならない。第一は、現在の重大な攻防環である「労戦統一」において、労働貴族―両翼の社会帝国主義潮流を、ブルジョア階級独裁の社会的支柱・戦争準備の協力者としてあばき出し、彼らに対する闘争を全方面から強化し、彼らの制圧している陣地を奪い返し、プロ独準備の一環につくりかえていくことである。

第二は、日米安保体制の朝鮮侵略反革命戦争準備体制としての再編強化の暴露を強め、今や広大な規模で歴史的闘争へと進み出している朝鮮南半部人民の朴打倒・民主化闘争と結合して、ブルジョア階級独裁の打倒・米帝追放の煽動をおし広めることである。

第三は、被搾取勤労大衆・被差別大衆の、搾取と反動と差別強化に抗する闘いとの共同闘争において、官僚的＝軍事的国家機関の粉砕を、その第一の共通の利益・真の結合の前提条件として前面に押し出し、この煽動を強化していくことである。

c　新旧修正主義、社会帝国主義と闘い、社会主義労働運動の創出・発展へ闘う統一を促進せよ

現在の全階級情勢の中で一つの結節環をなしているのは、労働運動の指導権をめぐる闘争であり、ブルジョアジーとの同盟・忠勤のための「統一」（真のプロレタリア大衆からの分裂）か、社会主義労働運動の創出・拡大への闘う統一の促進か、をめぐる闘争である。

既に七〇年代中期以降、労働運動における二つの傾向、二つの潮流の公然たる対立が発展してきた。一方には、六〇年代以来系統的に買収・育成されてきた労働貴族・帝国主義労働運動が、体制的危機と共に大々的に登場し、「中道勢力」に代表される「安保体制擁護―国防協力、天皇制支持―国体への忠誠・

治安強化、国際競争力強化と大国化」を政治的背骨とし、暴力的な全般的資本攻勢の忠実な協力者・資本の公然たる手先として立ち現われた。と同時に、プロ独を放棄し、ブルジョア民主主義を賛美し、「国民の党」として「人民的議会主義、独占の民主的規制による利潤の公正な分配―労働者消費の拡大と健全な資本主義―福祉国家、非武装中立」等の「革新連合政府―国民春闘」なる、空想的社会改良計画をもって労働者を欺き、体制的危機を補完し、いくばくかの改良的施し物と議会内での伸長を確保してきた社共・民同労働官僚の破産が吹き荒れる資本攻勢とブルジョア階級独裁の反動化を前に白日のものとなった。彼らも又この破産を通じて階級協調を強め、「安保・国防」問題、天皇制攻撃、治安強化への思想的政治的屈服を深め、資本攻勢の前に「春闘」そのものの崩壊と、議会的地位の後退を帰結させ、「成田治安立法」賛成とレ・パ攻撃容認からその尖兵へというように、「白衛軍」の側に身を投じたのである。

更に、金融独占ブルジョアジーの「総合安保戦略」が実行に移されるにつれて、民同労働官僚も自己の特権的地位を確保するために、同盟・JCとの「戦線統一」へとなだれを打って移行しつつあり、社民政治の動揺・分解・再編をつき動かしている。この「戦線統一」が、全面的産業合理化と勢力圏拡大、対ソ対抗と第三世界に対する侵略反革命、日米安保体制をテコとした帝国主義戦争準備を公然と擁護し、「戦争と反動・反革命の挙国体制」の支柱を担うものであることは、労働サミットに端的に示されている。この「戦線統一」とは彼らが最後的に、本来のプロレタリア階級・真のプロレタリア大衆から分裂し、ブルジョアジーと融合し、彼らがその指導機関を制圧している労働組合機構をブルジョアジーに奉仕する産業報国会へと変質させ、彼らの「公認」の地位・特権を維持せんとするものであることは、彼らの駆け引きが進むにつれて一層公然たるものとなっている。

このような事態の進行と共に、日共・協会・平和と社会主義グループは、国内政治における失地回復をはかるためにもソ社帝との結合を強め、ソ社帝の攻勢的世界再分割―アジアでのベトナムを足がかりとした南下政策に望みを託し、それとの結合でもってブルジョアジーを揺さぶり、小ブルジョアジーや労働者大衆の増大する不満と動揺をこの方向に吸収せんとしている。こうしたソ連派の現代修正主義―社帝潮流が望んでいるのは、今日の日帝の体制的危機の突破を、ソ社帝との同盟によるアジア集団安保―ソ・日・越・東南アの国際分業によって可能にせんとし、そのために日帝の政策変更を要求し、独占を規制しようというものに他ならず、一部のブルジョアジーとの同盟、小ブルジョアジーの危機感の動員に他ならない。

このようなブルジョアジーの公然・隠然の手先、ブルジョア分遣隊たる労働貴族とその司令部たる社会帝国主義潮流と仮借なく闘うことなしには、プロ独・社会主義革命を準備することはできない。こうした潮流・勢力のくびきから労働者を思想的

・政治的に解き放ち、それを食い破り、放逐していく闘いを推し進めることなしに、ブルジョアジーの打倒を準備することはできない。そのためにはプロレタリア大衆と結びつき、社会主義と労働運動を結合する革命的党活動をつくりあげていかねばならない。

事実、上記の潮流の対極に、プロレタリア階級の新たな胎動を示す闘いと勢力がかたちづくられ、拡大している。七〇年代前半期の萌芽的闘いをへて、中期以降、労働者の生命・生活・権利を容赦なく大規模に破壊し、資本の専制と賃労働の従属を飛躍的に強める暴力的な資本攻勢が、官民・大小・現役予備役を問わず全体的に吹き荒れる中で、それによって揺り動かされ、めざめさせられ、資本に対する闘争へと駆り立てられた労働者階級の組織的反抗は、改良主義者の破産・分解を食い破り資本の手代との衝突を深めつつ、新たな発展を逐げている。膨大な下層未組織労働者の反倒産・反失業の闘争、ブルジョア的制約と合法的枠を突き破って持続する自主管理―自主生産の闘い、臨時・パート・家内労働者・失業者の決起と組織化、造船労働者をはじめとする基幹産業での資本とその手代に対する実力的決起・諸衝突、全逓反マル生闘争のような職場闘争の波状的昂まり、個別企業・個別産業の枠を越えた地域共闘と全国的結合への発展の傾向、現役―予備役労働者軍の計画的協力等々。

こうした経済闘争の発展ばかりでなく、三里塚・狭山等の政治闘争―政治的分野をとらえる闘争という意味でのーを結合し、人民闘争の主導力としての役割を発揮し、このことによってブルジョアジー、社帝潮流との対立を一層広め、深め、激化させ、七八年三・二六の爆発と千葉動労の社会帝国主義者との決定的分裂・武装対峙を頂点に、先進的プロレタリアートの闘争は、既に政治舞台で彼らを震撼させる力を発揮するところまで突き進んでいる。こういう中で「社会主義をめざす労働運動」が先進的労働者の共通のスローガンとなり、社会主義と結合し、労働者階級の革命的前衛党の建設の重要性を自覚しはじめている。

このような階級間の諸衝突、資本の支配に対して広がりゆく又多面的となっている闘争の発展 —— この対立の背後から姿を現わしている真の根本問題とは、生産手段の所有制の問題‖資本家階級が生産手段を独占し、労働者階級が賃金奴隷として彼らに従属せしめられていること、このことが資本の労働に対する支配の基礎にあり、資本家階級と労働者階級の真の対立とはこれをめぐる対立であり、生産の社会化の発展がこの対立を押し上げざるをえなくしているのであり、上記の労働者階級の闘争の発展―分散的な闘争から荒々しい階級闘争としての発展、生産を支配する力をわがものとする自覚、巨大な組織性の萌芽・要素の成長は、資本家階級の収奪―生産手段の社会的共有への転化へ突き進んでいくことによってのみ、社会主義的生産を組織する力として真に発展・開花しうるのであり、そのためにブルジョア階級独裁の打倒・プロレタリア階級独裁の樹立のために闘わなければならず、その自覚・組織性・闘争力へと転化

・発達させなければならない。プロ独による資本の収奪と物資の生産―分配に対する労働者統制、これだけが深まりゆく体制的危機の下で現状を根本的に打破する唯一の活路であり、この物質的諸条件は、生産の社会化とプロレタリア階級の階級闘争として日々拡大せしめられている。核心はプロレタリア階級独裁であり、この要をつかみ、この要のために、労働貴族・社帝潮流と闘わねばならず、この要に一切を結びつけて全闘争を更に持続・深化・拡大し、この要で統率していくこと、このことこそが、〈二つの傾向・二つの潮流〉の対立の公然たる発展を、〈帝国主義と社会主義の分裂〉として組織し抜く根幹であり、プロレタリア階級の真の階級的戦闘的統一をつくり出していく根幹である。

第一に、我々は先進的労働者との間に、又真のプロレタリア大衆との間に強固な結びつきをつくり出し、彼らの一層の自覚と結束、戦闘的進出を促し、援けるために奮闘しなければならず、なかんずく、プロ独を要として労働貴族・社帝潮流の大連合―ブルジョア階級との融合と闘い、その革命的能力を鍛え上げるように、頑強な働きかけを強めねばならない。現下の「労戦統一」をめぐる一大攻防戦を、我々が彼らを社会主義革命へ準備させ、教育し、訓練していく戦場とし、我々のこの活動を飛躍的に高める舞台としなければならない。まさにその前進基地として、「革命の旗」を武器に、一つ一つの工場に共産主義前衛の分遺隊＝工場細胞を建設し、工場における革命的党活動をつくり出していかねばならない。社会主義労働運動をつくり出していくその全基礎を確立し、拡大していくことである。

第二に、労働者大衆を大胆に立ちあがらせ、職場からの階級的実力的決起を組織し、拡大・持続し、戦闘的労組・争議団の断固たる突出、実力闘争と基幹産業・官公労の戦闘的先進的労働者および下層未組織の労働者大衆の決起とを結びつけ、この力を基礎にして、社会帝国主義者を労働組合の指導部から追放し、労働者階級の階級闘争の一機関―社会主義革命のために労働者大衆を準備させ、教育していく一機関としての階級的労働組合運動の強化と発展のために闘わねばならない。

第三に、右翼的「労戦統一」と闘い、階級的労働組合運動の強化のために闘う、全ての共産主義的政派・先進的労働者の間での共同戦線をつくり出し、共同行動と共同の努力を形成しつつ、その中で、「社会主義をめざす労働運動」を口先のものに終わらせ、プロ独を彼岸化し、現在の闘いとの間に万里の長城を築くサンディカリズム的偏向・戦術的左翼反対派と粘り強く闘いマルクス・レーニン主義の革命党建設に結合させ、統合していく活動をおし広げねばはらない。〈戦争と革命〉〈国家と革命〉をめぐる焦眉の政治態度を、この闘いの政治的背骨として力強くおし出し、政治的武装をおし広げていかねばならない。

d　プロレタリア階級を全ての人民闘争の指導者へと高めあげ、社会主義統一戦線を形成せよ

我々は、以上の基礎の上に立って、プロレタリア階級の政治的発達と成長を促進するために、今日、覇権主義と帝国主義戦争に反対し、民族解放闘争に連帯し、ブルジョア階級独裁の反動化と差別支配強化に反対し、金融寡頭制の圧迫・搾取・収奪に反対して、拡大発展しつつある人民闘争の先頭に、プロレタリア階級が立って主導力を発揮するように呼びかけ、導いていかねばならない。

疑いもなく、現在様々な水路を通じて人民闘争の大きなうねりが次第に形成されつつある。そして、プロレタリア階級が自己の解放とその条件をつくり出していくには、これらの闘いの最良の闘士・指導者とならねばならず、又そうなってこそ始めて、人民闘争は大きな奔流となって動き出し、真に巨大な発展をとげ、日帝打倒・米帝追放　と結びつくことが可能となる。

我々はそのためにも、次の三点をたえず強調しなければならない。①人民闘争の発展は、プロレタリア階級がブルジョア階級の打倒―なかんずく金融資本の支配をくつがえし、金融資本を収奪し、社会主義社会の基礎を創建することをめざして闘い、その眼目としての暴力革命によるブルジョア階級独裁の打倒＝プロレタリア階級独裁樹立をめざして闘い、これに結合して闘うことによってのみ、革命的な発展をとげることができること、ここにこそプロレタリア階級の指導的役割があり、そうしてこそ、全ての被搾取勤労大衆を、資本の軛とブルジョア国家の圧迫・帝国主義戦争の重圧からの解放へと導くことができること。他方では、人民闘争の指導的役割を通じて、全ての被搾取勤労大衆を、プロレタリア階級の革命的闘争に対する支持、結合へとかちえねばならない。

②今日の日帝の体制的危機の中で、ブルジョア階級は米帝に依存し、その独裁を補完され、一定従属することによって、自己の国際的地位を保障していること。このことが、一方では、日帝の反動化と戦争準備が日米安保体制によって支えられ、促進されていることに現われ、他方では、とくに小生産者への圧迫、搾取と収奪、その暴力的駆逐を一層重圧的なものとし、この重圧がプロレタリア階級と貧農の上にものしかかっていることに現われている。だからこそ、反米民族解放等の社会排外主義に結びついていく偏狭な民族主義と闘いつつ、日帝打倒と固く結びついた、日帝打倒の不可欠の政治的条件としての米帝追放の任務を掲げ、人民闘争を一層広大なものにし、とりわけ朝鮮人民の民族解放闘争との結合を強め、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命へ領導していかねばならない。

③他方では、プロレタリア階級は、まさに「狭い同職組合的枠にとじこもらず、社会生活の全ての現われと全ての活動舞台に、勤労被搾取大衆全体の指導者として登場する限りでのみ、

革命的となり、社会主義的に行動することができる」。こうした萌芽は、すでに、労農団結・反差別共同闘争・地域共闘として生まれ始めている。我々は、このプロレタリア階級の闘争を更に発展させ、急進民主主義の幻想・空文句と闘いつつ、マルクス・レーニン主義党のプロレタリア階級に対する指導の強化を通じ、社会主義労働運動の断固たる創建を通じて、又このことに固く結合させることによって、この萌芽を社会主義統一戦線へと形成していかねばならない。まさにそうすることによって、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の闘いは幾百倍・幾万倍の力を発揮することが可能となるであろう。

第七章　マルクス・レーニン主義の全国単一党創建の真の長征へ！

以上の革命的政治を真に実行し抜いていくために、我々は是非ともマルクス・レーニン主義で武装された全国単一党＝プロレタリア階級の単一の戦闘指令部を創建しなければならない。これこそ日本社会主義革命に勝利するプロレタリア階級独裁の準備の核心である。我々は、日共現代修正主義と分岐して以降二〇年にわたっているが、未だこの事業に勝利しえていない。それはつまるところ、マルクス・レーニン主義の原則と毛沢東思想を真に闘い取り、それに厳格に基礎づけられた日本革命の政治路線を真に確立しえてはいなかったからであり、急進民主主義と反スタ・トロツキズムにまといつかれ、従って、プロレタリア階級に依拠し抜く革命党建設の組織路線と革命的党活動・組織的作風を築き上げることができず、経済主義や戦闘団主義の、小サークル主義的セクト性をはびこらせてきたからであった。しかし、今や我々は長い苦しみの後にこの思想ー政治路線も闘い取り、また組織路線を打ち立て、それと共に統合の事業の第一歩を戦取した。ここに真の胎動がある。と同時に、史上三度目の戦争と革命の時代ー日帝の体制的危機と〈戦争と革命〉の接近という今日の現実そのものが、日本共産主義運動の諸潮流の分化・再編を促し、各々の性格を純化させ、歴史的転換点を形成している。それ故、我々は今、全力を上げて、この分化・再編に分け入り、マルクス・レーニン主義の全国単一党創建の大道を切り拓いていくために奪闘しなければならない。

a　トロツキズム潮流の反動性を暴露せよ

第四インターは、戦争と革命の時代ー日帝の体制的危機にあって、日共現代修正主義や社会党ー協会派の公然たる尻押し部隊へと変質している。この「変質」をこそ、トロツキズム潮流の無力と反動性として暴露し、批判しなければならない。今日、

彼らはベトナムのカンボジア侵略・併呑を賛美してやまず、そのことによって、ソ社帝の世界支配をめざす覇権主義を「世界革命」への道として唱和している。こうした態度をもって日帝の対外政治批判をくり返しつつ、日帝の体制的危機の促進を、「社共政権樹立」に託し、それを過渡的スローガンとして掲げている。こうして第四インターの左翼改良主義・日和見主義は、今では、日帝の方向転換＝日米安保体制から日ソ安保体制への転換ーソ・日・越・東南アジアの国際分業と「国有化による独占に対する下からの民主的規制」という、まごうことなき民族民主路線＝宮本一派・協会・こえ派の左からの補完物・尻押し部隊の道をひた走っているのだ。

b　急進民主主義の混迷と動揺を批判・改造せよ

こうした傾向と断固たる一線を画すことができず、依然としてトロツキズムとの折衷をもって「反スタ」を掲げ、急進民主主義の動揺をくりかえす革共同中核派、及びブンド系の急進民主主義潮流の動揺と混迷も又避けられない。この部分が今日の日本階級闘争の中で一定の戦闘性を保持しているとしても、日本革命を民族解放闘争・社会主義国の継続革命と有機的に結合したものとして闘い取ることはできないばかりか、プロ独の樹立と社会主義革命の遂行へとプロレタリア階級の階級闘争を確固として鍛え上げ導くことができず、体制的危機と帝国主義戦争の接近の中で、民主主義闘争の急進化・戦闘化にのみ腐心するのである。それに加えて日米安保体制に対する日和見主義ー日米戦争論が拍車をかけている。こうした小ブルジョア的な危機と憤激・決意を「左翼的空文句」で粉飾している彼らは、一方での「突撃」による縮小再生産と他方での民主主義的大連合の間をたえず動揺しないではおかない。動揺・混迷・分解ー前途はこれ以外にありえない。

他方、毛教条派ー人民民主主義潮流の反ソ祖国擁護主義への転落がなだれを打って始まっている。民族民主路線という点では宮本一派と何ら変わることのないこの潮流は、ソ米覇権争奪激化と共に、「三つの世界論」を世界革命戦略にまつりあげ、教条化することによって、かつての反米反独占＝反米愛国から反ソ愛国＝反ソ連米擁帝へとなだれを打って転換した。彼らは、ソ社帝のアジア南下と日米安保体制を後楯とした日帝との帝国主義間抗争を民族矛盾と言いくるめ、支配階級との連合の下に、ブルジョア民族主義ー社会排外主義の道をひた走っている。こうして彼らは、日帝を擁護し、ブルジョア階級独裁の国家権力に対する武装解除を広め、階級投降主義として立ち現われている。社会主義革命路線の清算をもってこうした潮流に合流している塩見一派や、「社会主義革命の準備」の名でもって、こうした潮流と融合し、欺いている立志社等は、その欺瞞性の故に罪悪も又大きいと言わなければならない。こうした潮流と断固た

る闘争を進めることは緊切の義務となっている。

c　マルクス・レーニン主義の全国単一党建設へ、全ての先進的労働者の思想的＝組織的統合を推し進めよ

我々は以上の潮流との闘争を推し進めつつ、その対極に生み出され、形成されていかずにはおかない、マルクス・レーニン主義分派・グループとのより大きな統合を闘い取っていき、マルクス・レーニン主義の全国単一党創建を前進させていくために奮闘しなければならない。しかもこの事業は、ただ共産主義者だけのものではなく、全ての先進的労働者の共通の事業にしていかなければならない。

既に日本労働者階級の先進的層はかなりの広汎さでかたちづくられ、多大の成長と進歩をとげている。社会帝国主義潮流と手を切り、それと対抗して、労働者大衆の組織的反抗の先頭に立って指導し、又人民闘争の主導力としての役割を担い始め、更に社会主義と結合し、革命党建設に結合しようという自覚も生まれている。と同時に、今日の情勢は、この広汎な先進的労働者をも試練にかけ、ふるいにかけざるをえない。だからこそ、我々は上記の潮流との闘争によって彼らの思想的・政治的教育を強め、彼らとの結びつきを強めて共同の隊伍を形成する中で彼らの闘いが労働運動内の〈帝国主義と社会主義の分裂〉へと促進していくことをたすけ、彼らを強固に思想的＝組織的に統合していく働きかけを系統的に組織し、革命党建設の事業を共に担い、一層首尾一貫した革命的活動へと移り進んでいくように組織していかねばならない。

労働者階級の解放が労働者階級自身の事業であるからには、労働者階級の階級闘争は社会主義革命の勝利をめざして闘われねばならない。そのためには、マルクス・レーニン主義の革命党を自らつくりだすことが不可欠であること、その眼目がプロレタリア階級独裁にあることをくり返し訴えねばならない。なぜなら、ブルジョア階級は、自己の生産手段の独占を擁護し、労働者階級を賃金奴隷制のくびきにしばりつけておくために、強大な中央集権的国家機構を幾千幾万の糸というより綱でもって固く掌握し、自己の独裁を築いている。労働者階級がこれと闘い、打倒するには、そしてプロレタリア階級独裁をテコに社会主義革命と社会主義建設を遂行し抜くには、真に革命的な思想で統合され、最も政治的に訓練され、中央集権的組織性を鍛え上げた革命党なしにはありえないからである。又新旧修正主義―社会帝国主義、すなわちブルジョア的「労働者」党と真に闘争し、打倒するには、プロ独を眼目として根本的な思想的・政治的分裂を闘い取り、あらゆる方面で全面的な闘争を系統的に推し進めねばならず、それはマルクス・レーニン主義の革命党建設を基礎にしてのみ、首尾一貫して遂行しうるからである。そして現在ではとくに、戦争と革命、国家と革命に対する態度を整えることが不可欠である。こうして、全国の先進的労働者

を強固に思想的に統合し、それを組織の物質的統一で打ち固め、一糸乱れぬ整然たる革命的活動をつくり出す時にこそ、プロレタリア階級は必勝不敗の勢力として立ち現われ、その歴史的使命を果すための、革命的攻撃の総力を発揮させることができるのである。

第三部　党建設――マルクス・レーニン主義の単一党建設へ、新たな長征へ出発せよ

我々は今、共産主義者同盟に新しい時代がすなわち、分派から統合の時代が開始されたことを宣言しなければならない。それは、この報告の第一章及び序文の中に統合の歴史的意義とブンドの総括としてくわしく展開されている。更に第二部に於いては史上三度目の戦争と革命の時代を見据え、その下での国家と革命、戦争と革命をめぐる我々の見地とプロレタリア階級の活動の方向性を統一的に明らかにしてきた。これらを基礎づけたのは、ブンドにまつわりついていた、思想路線の急進民主主義、反スタ・トロツキズムの清算と克服のための斗いであった。それは今日我々の綱領として定式化され我々の活動の内実、規模、範囲を明らかにしている。いわば、急進民主主義からマルクス・レーニン主義への転換、すなわち綱領の転換である。我々は斗い取ったこの綱領（政治、思想路線）の転換を更に戦術・組織の転換にまで貫き通しマルクス・レーニン主義の単一党創建を目ざし当面、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの結成へ自力更生と、更なる統合の両面で全力を投入していかねばならない。

第一章　ブンドの分派から統合の時代を、自力更生と統合をもって更に推し進めよ！

我々共産主義者同盟マルクス・レーニン主義派と共産主義者同盟游撃派は統合の実現によって党建設の新たな基礎を創出しその斗いの前進の一歩を我がものとしている。我々はこの斗い取った地歩を強固に打ち固め第二の斗い、すなわち、ブンド系マルクス・レーニン主義分派の統合へと突き進んでいかねばならない。

そのための第一の活動は、我々の綱領＝思想―政治路線に厳格に規定付けられた自力更生の面での党建設のための斗いである。我々はかかる側面での斗いの軸に全国政治新聞を要にした全面的政治暴露を組織して、今日の情勢すなわち、人民斗争の発展・爆発、帝国主義の反動化とそれへの社会帝国主義の忠勤と云う総じて革命情勢の端緒的開始の下で日々抗議と反抗を強めるプロレタリア階級、被搾取勤労人民の、その全ての斗いのあらわれをとらえて、暴力革命、プロレタリア階級独裁、社会主義革命の宣伝・煽動を持ち込み、これらの闘いを通じた計画的、系統的政治教育を行っていかねばならない。そうして、プロレタリア階級の先進分子はもとより、労働者多数の反抗を促し、彼らの政治意識と革命的積極性を培養して、大胆に革命的自覚と決意を呼びさまし、彼らを揺り動かして、この情勢に応じた組織、すなわちマルクス・レーニン主義の単一党創建へと動員していくのである。

しかも、こうした我々の党建設の闘いが決して平板な道のりでないことは明らかだ。体制的危機とその下でのブルジョア階級独裁の国家権力の反動化は、政治警察による革命的翼への奇襲的予防反革命攻撃の激化として今日日常化しつつあるし、それと軌を一にした社会帝国主義潮流の公然たる反革命的純化はマルクス・レーニン主義党建設をめぐって、全ての領域での彼らとの闘争が不可避であることを示している。ひるがえってわが革命的翼を見るならば、その主流、その主勢力は依然として急進民主主義、反スタ・トロツキズム諸派であり、マルクス・レーニン主義分派の政治的・組織的力量は今日的には少数派の位置でしかない。このことは、かかる政治勢力の情況を踏まえた上で綱領の転換を、戦術、組織の転換として貫き通し、マルクス・レーニン主義党を創建せんと考えるなら、現代修正主義、社会帝国主義潮流はもとより、急進民主主義潮流の中にわけ入って、批判と闘争を能動的、積極的に組織してこそなしうるのだということを示している。

その闘いの核心をなすものは、我々がいかなる内容の宣伝・煽動を組織して、思想的・政治的にこれらの潮流との明確な分岐を明らかにしていくかということであり、それに基づいたプ

ロレタリア階級の政治教育を通じてマルクス・レーニン主義党に組織的に結合させていくかということである。そのためには、社会帝国主義の位置と役割を明らかにしておくことが必要である。彼らは今日、労働者階級の「上層」に依拠し、恐慌と不況の中で賃上げ闘争に限定された階級闘争さえ放棄し、階級協調の立場に立って経営参加を行い、資本と結合し、社会主義革命から資本を防衛し、資本の代理人として工場内の奴隷労働を強制している。しかもこの政治的反映としての社会党、共産党、民社党などは連合政府をもって自民党にとってかわった形でブルジョア階級独裁を執行しようとしている。これに対して革命的翼内の急進民主主義諸派は、総じて社帝批判を、資本主義的生産関係における生産手段の所有制、プロレタリア階級の経済的従属の問題を抜きにして、生産における人と人との関係、工場内での奴隷労働や分配制、搾取に資本主義批判を一面化して、その上で工場内での奴隷労働に対する反合理化闘争や、搾取に対する賃上げ闘争を戦闘的に闘うことで、この修正主義、社会帝国主義潮流との分岐を明らかにせんとして、又ここを核心として宣伝と煽動を組織している。しかしこれでは何ら思想的・原則的批判を行ったことにはならない。戦闘的経済主義の見地から経済主義を批判するだけであり、根本は改良主義という共通の基礎なのである。又この政治的反映は、ブルジョア階級独裁の国家権力を打倒する暴力革命、プロレタリア階級独裁をあいまいにし、議会で選出された政府と政策に反対し、これを打倒、阻止する民主主義闘争だけになる。これが発展すれば議会主義になるのであり、急進民主主義の戦闘的経済主義は経済闘争、民主主義闘争を戦闘化し発展・爆発させながら、プロレタリア階級独裁、社会主義革命を宣伝・煽動し、その準備を整え、実行させる活動が放棄されてしまうのである。その結果、改良主義、議会主義を完全に批判し切れず、結局修正主義、社会帝国主義との分岐をあいまいにしてしまうのである。

それゆえ我々は、こうした現状を踏まえ、マルクス・レーニン主義党創建を押し進めんとするなら、一層全面的政治暴露と政治的煽動を強化し、プロレタリア階級への共産主義的政治教育を全面的に組織していかねばならないのである。今日のように、政治暴露が雇い主と政府に対する経済的暴露におとしこめられ「労働者階級の政治教育に、その政治的意義を発達させることに積極的にとりかかる」活動が少なく、自然発生性への拝跪が生れていることを考えるなら、我々のこの活動がいかに重要かということは明らかである。

上記の点を踏まえ、更に今日始っている党派、潮流の分化と再編を見ておかねばならない。それは戦争と革命の嵐の時代の序曲戦の下で、それぞれのよって立つ政治的思想的傾向が様々に試練にかけられていることの証しでもある。従って当然にも一切の政党を巻き込むかたちでそのことは進行している。この再編と分化において、ブルジョア政党内のそれはともかくとして、我々ブンド系分派、サークルにおいて象徴的な出来事は、

様々な意味で赤軍（プロ革）の議長であった塩見君が演じてくれている。彼は第一次ブンドが修正主義へ転落した共産党を批判し、闘争した日帝打倒、社会主義革命の路線を「革命的清算」の名の下に、いとも簡単に投げ捨て「毛沢東思想」派の一部に追従し「小ブルジョア急進民主主義の社会主義革命路線からプロレタリアヘゲモニーの下での二段階革命路線へ」とそのことを通じて「ソ社帝重視の反帝、反独占、民族民主主義革命路線」を打ち出し、旧来の急進民主主義から一転して、修正主義の反ソ容帝の祖国防衛主義へと転落していった。更に国際主義派の諸君が、同じく社会主義革命路線を放棄して人民民主主義革命路線へと転換し、限りなく日共(プロ革)に接近している。全てこれらの出来事は、今日の革命的情勢の端緒的開始の下で、一方では国際共産主義運動の分化と再編と結びつきながら、党派、政治勢力のダイナミックな分化と再編が開始されていることの証査である。

ではこの再編・分化の核心をなす問題は何かといえば、帝国主義戦争と社会主義革命の接近、その下での国家と革命、戦争と革命をめぐる政治態度の問題であり、それに規定された諸々の傾向への再編ということであり、その組織的反映である。我々はその中で、国家と革命では暴力革命、プロレタリア階級独裁の原則を堅持すること、戦争と革命をめぐっては自国帝国主義打倒の社会主義革命の原則を堅持し、この時代に於る共産主義者の任務として統合を実現し、そうした仕方でこの分化と再編の中で主導力を発揮せねばならない。同時に修正主義、社会帝国主義と容赦なく闘争し急進民主主義、反スタ・トロツキズムを批判して我々のマルクス・レーニン主義党の個性を作り出していかなければならないのである。ただこういう活動を通じてのみ「有産階級の手で作られた、従来のあらゆる政党に対立する特別な政党」としてのマルクス・レーニン主義党は創建しうるのである。

第二の我々の活動は、第一の自力更生の党建設を基礎としてブンド系　マルクス・レーニン主義分派の統合を更に押し進めることである。我々はこの統合のための活動において一定経験を蓄積してきた。これを十分に利用し統合を実現し、マルクス・レーニン主義の第三ブンド創建に向うのである。その核心をなすブンド総括及び情勢認識と任務、更に党建設についての我々の立場は六点にまとめられている。これは我々の統合の六条件であったことがらを更に前進させたものである。

(1) ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドを結成する活動で一致すること。

(2) 急進民主主義をマルクス・レーニン主義にとってかえ、反スタ・トロツキズムを批判して毛沢東思想支持で一致すること。

(3) 反ソ反米反覇権の国際人民闘争と日帝打倒・米帝追放・プロレタリア階級独裁・社会主義革命の政治路線を結合し推進することで一致すること。

(4) 戦争と革命の時代として国際国内情勢認識を一致させ、革命的祖国敗北主義、自国帝国主義打倒という戦争に対する社会主義革命の原則、暴力革命、プロレタリア階級独裁というブルジョア国家に対するプロレタリア革命の原則で一致すること。

(5) 全国政治新聞の発行を軸にプロレタリア階級独裁、社会主義革命の宣伝・煽動を実行し、経済闘争、民主主義闘争を発展させ、共産主義と労働運動を結合させて、労働者階級を組織してマルクス・レーニン主義党を建設する。人民を結集し、社会主義統一戦線を創出し、正規の攻囲を推進し、革命戦争・武装蜂起を目指す当面の戦術で一致すること。

(6) 職業革命家の組織を中核とし、工場細胞を基礎として、中央集権制を組織原則とし労働者階級の前衛的先進的部分を組織し、大衆の支持を獲得してマルクス・レーニン主義党を建設する組織路線で一致すること。

以上六点を、我々は統合＝党建設の前進地平を踏まえ改めて提起し、ブンド系マルクス・レーニン主義分派はもとより、ブンド系諸派への論戦の提起を行い、より大胆にブンド総括論争を発展させていかねばならない。この活動を進めるにあたって我々は、統合を呼びかけた紅旗、怒涛派の諸君との間においては、それぞれの分派が「共同の活動へ、党の共通の綱領の作成に、わが党の戦術と組織の共同の討議へうつっていけるだけに、すでに（論争）は成熟している」と考えている。問題はそれぞれの部分性や歴史性を法外に誇張したり、又はそれに固執し共産主義者の団結というそれ自体は誰も反対しない真理の一般的承　ではなく、路線的一致を基礎にした実践的団結、又そこに意識化された党建設のための活動を集中していくことだと考えている。それは我々の思い込みや主観ではなく、帝国主義の侵略、反革命、搾取、抑圧、差別に抗して日々闘いを強めている先進的プロレタリアの願いでもあり、多くの共産主義的グループの共通の認識である。再三明らかにしているように、我々は統合を実現することでこの闘いの最先頭に位置した。だがマルクス・レーニン主義の単一党から見れば、ささやかな第一歩にすぎない。何としてもブンド系マルクス・レーニン主義分派の統合を実現し、第三次ブンドを結成し、この希求に応え切っていかねばならない。

以上明らかにした党建設のための二つの活動を精力的に推進し、自力更生と統合で大いに奮闘し、プロレタリア階級独裁・社会主義革命をまっすぐに目指し、当面ブンド系マルクス・レーニン主義分派の統合、第三次ブンドの結成からマルクス・レーニン主義党の創建へと前進せねばならない。次に我々はこの二つの活動を確固としたものとして確立するために、更には党建設の基本的活動の定形化のために我々の不十分な点、克服すべき問題を明らかにしておかねばならない。この点での核心は何かといえば、今日のプロレタリア階級、被搾取勤労人民の反抗と憤激の増大、大衆の自然発生的高揚が高まり運動が広まって

いく情勢に応じた政治煽動、全面的政治暴露についてである。我々は常々このことを意識的に解決せんとしてきた。だが未だこの活動においては、その規模と範囲が狭く、同時にそのための計画的、系統的活動を作り出していく上において様々に立ち遅れており、手工業性が残存し、宣伝・煽動・組織化の方法を大工業化し切っていない。その結果、プロレタリア階級の先進分子を政治的に教育し、我々の党へと組織していく活動が立ち遅れている。他方でこのことは、組合主義的政治に基礎を置く修正主義、社会帝国主義との批判と闘争を十全的に組織しえないこと、更に急進民主主義的政治に基礎を置く中核派、第四インター、解放派やブンド系諸派との思想闘争を攻勢的に組織しえない弱点となって現われている。

我々は何としてもこの不十分性を、党建設の計画の中で正しく解決していかなければならない。我々は、そのために唯一中心的役割を果しうるのは全国政治新聞の計画であると考えている。定期的にひんぱんに発行されるこの新聞の計画の中で、政治煽動と全面的政治暴露を強め、全人民的暴露の演壇として、同時にあらゆる方面から党建設に着手するという集団的組織者としての役割をこの計画の中で獲得していかねばならない。こうして、新聞を軸にした党活動を定形化し先進分子を党の隊列に結集させると同時に、それを中核として労働者多数の獲得を目指していくのである。又そのことだけが、我々の打ち立てんとしている職業革命家の組織を軸として、中央集権制を組織原則とし、工場内下級委員会を基礎とするマルクス・レーニン主義党を創建しうるのである。

〈革命の旗〉を要に、プロレタリア階級独裁、社会主義革命の宣伝・煽動を強化し、経済闘争、民主主義闘争の発展を促し、共産主義と労働運動を結合して、中「下」層労働者に依拠しマルクス・レーニン主義党を建設するのである。

a　党建設の一般原則

「有産階級の団結せる力にたいする闘争において、プロレタリアートが階級として立ち現われることが出来るのは、プロレタリアートが有産階級の手で作られた従来のあらゆる政党と対立する特別の政党を自らの手で構成する場合だけである。政党への団結は社会革命とその窮極の目的の勝利――階級の廃止――を確立するための必要不可欠なことがらである」（第一インター規約）。我々はブルジョア政党、修正主義、社会帝国主義政党はもとより急進民主主義、反スタ・トロツキズム潮流と公然と対立するマルクス・レーニン主義・毛沢東思想で武装した単一の全国党を創建しなければならない。

マルクス・レーニン主義党は、プロレタリア階級の前衛であり、プロレタリア階級の最高の組織である。党は共産主義革命、プロレタリア階級独裁のための政治闘争に向けてプロレタリア

階級の大衆、他の組織を指導する。プロレタリア階級は革命的階級として、社会革命、政治革命を実行するためにはマルクス・レーニン主義党に組織されなければならない。

マルクス・レーニン主義党はプロレタリア階級独裁の集中的表現として中央集権制を組織原則としなくてはならない。我々はこのマルクス・レーニン主義党の原則を闘い取った統合、その綱領、思想政治路線と結合し基礎づけ、当面するマルクス・レーニン主義の第三次ブンド創建の原則として建党の闘いに貫いていかねばならない。

b　マルクス・レーニン主義の第三次ブンドを結成せよ

プロレタリア階級の前衛であり、組織された部隊であり、その最高の組織として、プロレタリア階級独裁の集中的表現としてのマルクス・レーニン主義の単一の全国党創建をめざし、我々は当面闘い取ったブンド総括を武器にブンド系マルクス・レーニン主義分派を統合し、急進民主主義、反スタ・トロツキズム諸派との思想闘争を通じた批判、改造を行ないマルクス・レーニン主義の第三次ブンドを建設していかねばならない。そのための基礎を我々は綱領として提起している。党建設においては「思想政治面での路線が正しいかどうかが全てを決定する」のである。この正しい思想―政治路線は、突然ある日、指導者の個人的思いつきによって発見される「真理」などではない。人民闘争と革命運動の歴史的経験、まさに階級闘争の鉄火の中でその蓄積を必要条件としている。かってブンドが、日本共産主義運動の革命的伝統の継承、発展をかけ、日本共産党の修正主義、日和見主義と訣別して以来の二十年間、日本階級闘争の先頭で闘うことによって、日本共産主義運動に数多くの教訓を与えてきた、この歴史的経験を総括し、基礎としてマルクス・レーニン主義の第三次ブンドを建設するのである。

従ってこの第三次ブンドの路線は、第一次、第二次ブンドの正しい総括によって導かれている。第一次ブンドは、修正主義に転落した共産党と訣別し、議会主義の平和革命を批判して暴力革命、プロレタリア階級独裁を堅持し、日本革命の政治路線を日共の反米反独占民族解放民主主義革命路線を批判して、社会主義革命路線として定式化し確立した。たしかにそれが、「国家と革命」の問題、権力問題に対する急進民主主義的態度、権力規定における経済主義的偏向と結びついて、日米安保体制の下での日帝、米帝の関係において存在する一定の国家的従属関係を、日帝打倒、社会主義革命との関係でおさえることができず、米帝追放の任務がそれらと結びつけられていないが、基本的に正しく、我々は継承しなければならない。次に第二次ブンドは当面するマルクス・レーニン主義の第三次ブンド創建との関係でいかに総括されねばならないかといえば、第二次ブンドが、革共同に反対し、アジアの社会主義国・民族解放闘争と結合

しようとしたのは正しいが部分的にトロツキズムがあり、民族解放闘争を「民族解放・社会主義革命」とし、社会主義国を「労働者国家」と規定し、否定している。この見地は改めねばならない。反スタ・トロツキズムはキッパリと清算しなければならない。第一次、第二次ブンドが獲得した、日本革命の政治路線、国際路線を正しく発展させ、継承しつつブンドの思想路線、共産主義と労働運動を分離した急進民主主義は厳格に清算されねばならない。思想路線における急進民主主義は、日本革命の政治路線を不十分さを含みつつ正しく提起しつつも、それを言葉だけのものとし、実際は日帝の侵略、抑圧、反革命に反対し、帝国主義の政策とそれを打ち出してくる政府に反対する政治路線であった。労働者階級の階級闘争、人民闘争の目標を反戦闘争、民主主義闘争、経済闘争に狭める経済主義である。だから対極に急進民主主義のテロリズムが発生し日帝打倒・プロ独・社会主義革命を実際目標にせんとするが、プロレタリア階級の階級闘争でそれを実現するのではなく、社会主義革命の原動力を学生の闘争に求めプロ独を武装闘争に一面化してしまったのである。我々はこの思想路線における急進民主主義を総括し、共産主義と労働運動の結合を軸に資本主義批判、帝国主義批判でのマルクス・レーニン主義的見地を確立し、それに基礎づけられた我々の路線を、人民闘争の発展、爆発の中に持ち込み、プロレタリア階級独裁、社会主義革命を宣伝、煽動し、先進的プロレタリアを組織すると同時に、ブンド系マルクス・レーニン主義分派を統合し、単一のマルクス・レーニン主義の全国党創建の中核、その推進勢力としての第三次ブンドを創出していかねばならない。すでに明らかにした如く、その闘いの第一歩は統合、団結として党建設の新たな前進として闘い取られている。我々はこの第一歩を更に打ち固め、革命情勢の端緒的開始に応え、単一党創建の気運を更に醸成させ、様々な共産主義的諸グループ、サークルを我々の綱領、思想―政治路線の赤い糸で結びつけていかねばならないのだ。

c　党の型 ―― 職業革命家を中核として、工場細胞を基礎とする中央集権制

我々の党の型は、我々が定式化した規約に集中的に表現されている。

マルクス・レーニン主義党の組織はブルジョア階級独裁、政治警察と闘争し、プロレタリア階級の階級闘争を系統的にプロレタリア階級独裁、社会主義革命に導くために、職業革命家の組織を中心とし、中央が全党を指導し、上級が下級を指導し、多数に少数が従い、組織に個人が従う中央集権制を組織原則としなければならない。この原則をふまえ、第一次、第二次ブンドの党の型を総括し、我々のマルクス・レーニン主義の第三次ブンドの党の型を決定していかねばならない。

第一次ブンドの党の型は、産別委員会＝労働組合フラクション方式であった。しかし、実際は労働運動に基礎は存在せず、学生運動を基礎とする学生同盟＝学生自治会フラクション方式であった。これに対し第二次ブンドは、学生フラクション方式を維持しつつ、労働運動に着手し、基礎を確立しようとした地区党＝地区委員会方式をその型としていた。我々のうちたてるマルクス・レーニン主義の第三次ブンドの党の型は労働運動を基盤とする工場細胞＝工場内下級委員会方式でなければならない。すはわち、地区党連合方式から工場細胞方式へである。これは、我々の第三次ブンドが政策反対、阻止、政府反対、打倒の民主主義の改良の政治闘争と、ブルジョア国家権力打倒、プロレタリア階級独裁、社会主義革命の政治闘争を区別し、プロ独・社会主義革命の宣伝・煽動を実行し、経済闘争、民主主義闘争の中に持ち込む「計画としての戦術」を採用するからであり、宣伝、煽動、組織化の内容、方法と、組織活動に規定されるものである。定式化すれば、①大会が中央委員会を、中央委員会が地方委員会を任命する。②地方委員会は執行機関として地区グループと工場内下級委員会を任命する。地区グループは地方委員会から委託を受けて、地区の工場と労働者に全国政治新聞をはじめとする党の文献を配布し、又党の指令を伝達するという最も重要な活動を専門的に遂行する。工場内下級委員会は地方委員会に代って工場内で、党の全活動を遂行する。従ってさらに、各々の活動を遂行する各々のグループを組織する。③中央委員会と地方委員会は、各種の特殊な実務活動を遂行するグループを任命する。このような党の型で、工場内下級委員会が、つまり工場細胞である。

この様にして、工場細胞を通じて労働者階級を、その多数を、前衛的、先進的部分だけでなく大衆までも獲得するのである。そのために工場細胞を基礎として、①労働者階級の「下層」「中層」に依拠し、②「上層」に依拠する修正主義、社会帝国主義の改良主義労働運動、帝国主義労働運動を批判し、③経済闘争、民主主義闘争を戦闘的に闘い労働組合の指導権を奪取し、階級的労働運動を推進し、④暴力革命、プロレタリア階級独裁、社会主義革命を宣伝・煽動し、⑤前衛的部分を組織して大衆の支持を獲得し、マルクス・レーニン主義党を建設していくのである。その際の基礎であり、最前線となるのが工場細胞である。故に、この工場細胞を労働組合の指導的機関とするのではなく、プロレタリア階級独裁、社会主義革命を一貫しておし進め、プロレタリア階級の一切の闘いの現われを把えて、そこへ訓練、組織していく革命的な指導者の組織として建設していかねばならない。我々は、かかる細胞建設を攻勢的におし進め、一つ一つの工場を我々の要塞として打ち固めるためにプロレタリア階級独裁、社会主義革命を宣伝・煽動して、共産党や社会党、民社党、総評、JC、同盟が改良主義労働運動や帝国主義労働運動によってブルジョア国家権力の打倒と資本家階級の収奪を回避し、それと全く逆に、国家権力と資本に結合していることを暴露し、批判と闘争を組織していかねばならない。そうして経済

闘争と労働組合を拠点として労働者階級を支配している修正主義、社会帝国主義をその基礎から揺り動かし経済闘争を戦闘的に闘い、彼らから労働組合の指導権を奪取し、階級闘争を堅持した労働組合運動を推進するのである。こうして社会主義革命のための、プロレタリア階級独裁を樹立する政治闘争のための全ての活動を工場内で実行し、労働組合運動、経済闘争、民主主義闘争をそれに従属させるのである。

同志諸君、以上明らかな如く我々は、急進民主主義を清算し、反スタ・トロツキズムを批判して、毛沢東思想支持を掲げて、綱領の転換から戦術、組織の転換へ、分派から統合、マルクス・レーニン主義の単一党建設の路線を明らかにしてきた。この闘い取られたばかりの第一歩を、何としても当面マルクス・レーニン主義の第三次ブンド創建へと発展させ、革命情勢の端緒的開始からその本格時代へ、戦争と革命の嵐の時代へ出撃していかねばならない。毛沢東が打ち出した「マルクス・レーニン主義をやるのであって修正主義をやってはならない。団結するのであって分裂してはならない。公明正大であって陰謀術策をやってはならない。」という「三つのやるべきこと、三つのやってはならないこと」を断固として実践し、我々の党建設の基本原則として、プロレタリア階級の単一司令部建設へ前進しよう。

d　宣伝・煽動・組織化と全国政治新聞

我々は、当面、急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの創建を目指し、思想路線の転換を闘い取ってきた。それを、分派から統合を現実のものとして闘い取る中で戦術、組織の転換として貫いていかねばならない。その中心的役割を果すことが出来るのは、原則的資本主義批判、現代帝国主義批判に於けるマルクス・レーニン主義の見地に基礎付けられた我々の宣伝、煽動の型であり、その内実であり、その拡大である。我々はこの点を明らかにすることを通じて組合主義的政治と共産主義的政治の区別を明確化し、また、全国政治新聞の意義と役割を定式化する中で、手工業性でことたりるとする経済主義を批判して我々が必要と考える革命家の全国的組織としてのマルクス・レーニン主義党の組織計画を明らかにせねばならない。

そのことは、今日の人民闘争の発展、爆発とに象徴される革命的高揚の第一歩という情勢を踏まえ、この情勢を「国家と革命」、「戦争と革命」の見地から光を当て、プロレタリア階級の前に革命情勢の広さと深さを説明することであり、全国的暴露を組織して、彼らの革命的自覚と決意を大胆に呼びさまし、彼らをふるいたたせ、彼らを助けて革命的行動にうつらせ、プロ

レタリア階級独裁、社会主義革命を目ざす指導階級として登場させていくことである。そのために、今日、国家独占資本主義の下での搾取、収奪、抑圧に反対し、反抗を強める人民の経済闘争の中に、暴力革命、プロレタリア階級独裁、社会主義革命の宣伝、煽動を持ち込み、工場内での奴隷労働の状態や、雇い主と政府に反対する闘争に宣伝・煽動をとどめる経済主義を批判して、国家独占資本主義から社会主義へ前進するための暴露、すなわち、商品関係とブルジョア民主主義でおおわれた資本主義とブルジョア国家の本質を賃金奴隷制とブルジョア階級独裁として暴露し、資本家階級が生産手段を独占し、国家権力を掌握し労働者階級を経済的に従属させ、政治的に抑圧していること、これが資本家と労働者を平等な関係とする仮象でおおう労働力の売買関係によって媒介され、隠ぺいされていることを暴露せねばならない。資本家階級と労働者階級の非和解性を暴露するのである。こうして、ブルジョア国家権力を暴力革命で打倒し、全人民の武装で新しい国家権力を樹立するプロレタリア階級独裁を、また、それを必要条件として資本家階級を収奪し、生産手段を社会の共同所有とする社会主義革命を、それが労働者階級の解放を実現する意義を宣伝・煽動するのである。

次に、帝国主義の戦争と反動への熱望の下での侵略、反革命、差別、抑圧、搾取、収奪などに反対し高揚する人民闘争の中に暴力革命、プロレタリア階級独裁の宣伝・煽動を持ちこまねばならない。そのためには、帝国主義批判に於ける急進民主主義的見地を清算し、マルクス・レーニン主義の見地を確立しておかねばならない。

帝国主義は国家独占資本主義であり、生産の社会化を発展させ、資本家階級の支配を強化し、労働者階級の階級闘争を激化させ、社会主義革命をもたらすこと、すなわち「国家独占資本主義が社会主義のもっとも完全な物質的準備であり、それと社会主義とよばれる一段との間にはどんな中間の段もないような歴史段階」という基本観点を押さえ、その観点を欠落させ、帝国主義は資本輸出で植民地支配・民族的抑圧をもたらすことだけを独自化し、そのための侵略、抑圧、反革命の政策の体制とする急進民主主義の一面化は清算されねばならない。なぜなら、この結果は侵略、反革命と戦争に対する民主主義闘争を戦闘化し発展、爆発させるだけになり、帝国主義の政策とその結果に対する闘争をプロレタリア階級独裁をめざす政治闘争とすることになるからである。帝国主義が社会主義を物質的に準備し、プロレタリアートの社会革命の前夜であるという見地から、プロレタリア階級独裁、社会主義革命の実現のための宣伝・煽動が持ち込まれねばならない。

また、こうした我々の宣伝・煽動のカナメを修正主義、社会帝国主義の暴露と批判とに結びつけねばならない。「帝国主義との闘争は、日和見主義との闘争と不可分に結びつけられないなら虚偽の空文句にすぎない」のだ。今日、社会帝国主義、修正主義は、日本帝国主義が人民闘争の発展、爆発に対抗し、ま

た、革命情勢の端緒的開始という時代に対応して、ブルジョア階級独裁の国家権力を反動化し、天皇制を前面化して警察、軍隊、官僚機構を肥大化させ、他方で議会制ブルジョア民主主義の統治形態を通じて連合政府によってこの革命情勢の端緒的開始を乗り切らんとしている時、かかるブルジョア階級独裁の反動化を支え、執行し、積極的に連合政府に動員されんとしている。これに対して、工場内での奴隷労働の暴露を基礎として自然発生的な反合、賃上げの宣伝、煽動にとどまるならだ、また、帝国主義の侵略、反革命の種々の政策反対、阻止や、政府反対、打倒の民主主義闘争のための宣伝、煽動にとどまっていたら、国家権力をめぐる問題として彼らを批判・暴露し、プロレタリア階級をプロレタリア階級独裁、社会主義革命の思想武装でもって組織することは出来ない。資本主義の諸結果をめぐる態度の問題として、日和見主義か、急進的反対派かの相違しか明らかにすることはできないのだ。我々は、修正主義、社会帝国主義の本質を帝国主義の植民地支配に基づく超過利潤の一部で買収された労働貴族であり、すでに一つの特殊な階層をなし、国家独占資本と民間の独占資本の下の労働組合の指導権を握って労働者大衆を支配し、もって帝国主義の社会的支柱となっていると暴露する。更に今日では、体制的危機の救済者としてブルジョア階級独裁を支えているのだ。

我々は以上、闘い取った綱領、思想―政治路線に基づいて宣伝、煽動、組織化の内容を明らかにしてきた。次にこの内容を基礎に、その方法の転換を闘い取り、レーニン党組織観を確立していかねばならない。宣伝、煽動、組織化の内容の拡大、すなわち、反戦闘争、民主主義闘争にそれをとどめるのではなくプロレタリア階級独裁、社会主義革命にまで拡大するためには、宣伝、煽動、組織化の方法もそれにともない機械制大工業化しなければならない。その軸は、全国政治新聞の発行、配布である。かつて我々は、宣伝、煽動、組織化に際して、集会、デモにヘルメット部隊を登場させ、それらを諸活動の軸としていた。いわば宣伝、煽動の内容を狭め、一面化することによって導かれた手工業性である。これでは当然のこととして、武装闘争を闘う非合法組織が公然、合法の集会、デモに参加することになり武装闘争への着手は不可能になる。逆に、全国政治新聞を軸とした宣伝、煽動、組織への転換をかちとれないまま武闘闘争に着手し、非合法組織に移行すれば、宣伝、煽動を放棄するか、刺激的テロルにそれを置きかえざるをえないのである。

全国政治新聞の発行、配布を軸とすることによってのみ、革命の根本問題である国家権力をめぐる諸階級の相互関係を対象とする宣伝、煽動が可能であり、それらを通じた全面的な政治的暴露を組織し、大衆の政治意識と革命的積極性をそだてることができるのである。また、全国政治新聞は集団的宣伝者であり、集団的煽動者であるばかりでなく、集団的組織者でもある。全国政治新聞の発行、配布は全国的な規則的な共同的な事業である。この活動を通じてプロレタリア階級独裁、社会主義革命

の活動の舞台を拡げ、規則的、共同的活動にもとずいて、人民闘争の全てを革命に結びつけ、あらゆる方面から党を建設することができる。レーニンが「なにをなすべきか」で明らかにした「政治的な煽動の必要な拡大がなされるための基本条件の一つは全面的な政治暴露を組織することである」「全人民的暴露の演壇になれるのは全国政治新聞だけである」「生き生きとした政治活動は、もっぱら生き生きとした政治的煽動から始めるほかなく、そしてこの生き生きとした政治的煽動は頻繁に発行されて規則正しく配布される全国政治新聞なしにはありえない」これである。我々はこの観点に立脚し、宣伝、煽動、組織化の内容の拡大―転換からその方法の転換を全国政治新聞を党建設の基軸として位置付けることで闘い取っていかねばならない。

以上明らかにした我々の党建設の基本路線に沿って、直ちに第三次ブンドの創建へと歩みだしていかねばならない。第一歩を打ち固めよ！分派闘争の時代を真に止揚するマルクス・レーニン主義の第三次ブンドの赤旗を掲げ、大胆により大胆に前進しよう。

第二章　日本共産主義運動の分化・再編に分け入り、大胆に党派論戦を組織せよ！

戦争と革命の時代、第三次帝国主義戦争の第一段階とも云うべき今日の時代特徴は「社会主義革命の実現のために、政治権力を獲得する準備をプロレタリア階級に全面的に整えさせると云う任務を客観的にのぼらせている」（綱領）が故に戦争と革命・国家と革命を巡ってそれぞれの党派の思想―政治路線をめぐる一層激しい論争の煮つまりを不可避とせざるえないのである。

すでに現在、このことは諸党派・諸政治勢力の分化と再編として開始されている。我々はこの再編の中に斗い取った我々の思想―政治路線を高々と掲げわけ入り、その主導勢力として自己を打ち鍛えていかなければならない。そのことは、マルクス・レーニン主義を確立しマルクス・レーニン主義の第三次ブント結成―プロレタリア単一党創建をめざす我々にとって大きな飛躍を要求するものである。ではかかる分化と再編は今日何を巡って何に規定されて進行しているのであろうか、まずそのことを明らかにし、それを通じてわれわれの進むべき道を明確に提起していきたい。もっともわれわれが今ここで諸潮流、諸党派に対する批判を明らかにせんとする意図はただ単に他党派の誤まり限界性をあげへつらって、それを我が党の正当性、積極性の証明とせんがためにあるのではない。そのようなことは歴史が日々の階級斗争の現実が早晩証明してくれるであろう。

今、われわれが諸潮流、諸党派を批判するのは、これらの勢力が即自的にではあれ一定の程、プロレタリア階級、被搾取勤労人民の気分を一つの側面、一つの部分という形において代表

し、それぞれ先進的分子と結びついており、これらの諸勢力の誤った見地が結果としてプロレタリア階級の政治的成長を押しとどめ、日本革命の政治路線をねじまげるものであるが故に、かかる勢力との論戦は不可避であり必要でもある。論戦を通じながらプロレタリア階級に日本革命の正しい道をさし示していくことこそが今日我々に課せられた義務であるからに他ならない。

まさしく我々の諸党派批判とはかかる党派斗争の基準として実践的意味と意議をもつものである。しかも、それと同時にこのことはマルクス・レーニン主義の第三次ブンドープロレタリア単一党の創建に向けて今后団結していくべき誠実な、マルクス・レーニン主義の見地に立った党派を見分け、発展的に論争を組識していくためにも役立つものでなければならないことは云うまでもない。

では今日の諸勢力の分化と再編は何を巡る問題としてあるのか、何に最も象徴的に示されているのか、それは帝国主義戦争と社会主義革命を巡る問題であり、国家と革命に対する政治態度を巡る問題である。

それは帝国主義戦争の第一段階とも云うべき今日の時代にあって戦争と革命の要素の増大を正しく把みとりプロレタリア階級をプロレタリア階級独裁に向けて首尾一貫して指導しうるのか否かを問う問題としてあるのである。

a ブンドの総括論争とマルクス・レーニン主義

実際、この間のブンド系諸派の論争はこの戦争と革命、国家と革命をめぐる政治態度をめぐって、又それを要求する仕方で様々に発展している。原則的にそのことはブンドの急進民主主義をどう総括して、反スタ・トロツキズムを批判してマルクス・レーニン主義、毛沢東思想をいかに確立していくのかと云う総じて思想路線をめぐる論争から、現代帝国主義批判をめぐる論戦として、実際の人民斗争の指導をめぐる問題をも含みこむものとしてある。だがこうした論戦を把え返して見る時今日ブンド系分派を大きく二つに区分することが出来る。その一方は無総括主義である、そしてこの傾向は様々な色合いの相違はあれブンド系の多数派として存在している。これらの部々はかつて、ブンドが70年安保斗争で武装斗争を追求したことを口実にして急進民主主義の総括を回避し、ブンドは斗った革命的であった。中核派、解放派、第4インターは闘わなかった。日和ったとして、ブンドの分派状況と（正確には崩壊したのに）更に中核、解放、第4インターが今日の人民斗争の主勢力である現実から逃亡し、自己満足している傾向である。わけても象徴的なのは、ブンド総括を軍事と非合法問題に切り縮めてしまっている諸君にこの傾向は代表されている。他方でブンドにたいする清算主

義がある。かつてブンドが現代修正主義に転落した日本共産党から訣別し、トロツキズムの革共同に反対して打ち立てた政治路線（その内容に於いて弱点はもっているが）、日帝打倒、社会主義革命路線をいとも簡単に投げすて、反独占小ブルジョア民主主義の「毛沢東思想派」へ追従する傾向である。彼らにあっては戦争と革命への政治態度においては、自国帝国主義打倒の社会主義革命の原則を放棄し、祖国防衛を主張している。国家と革命をめぐっては暴力革命を一応主張しつつプロレタリア階級独裁・社会主義革命を放棄し、人民民主主義革命の修正主義路線を提起している。我々がブンドの急進民主主義を清算し、反スタ・トロツキズムを批判してマルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成を当面の党建設路線とすることから、これらの両傾向との思想斗争は不可避である。

では、かかる傾向への区分性は何によってもたらされたものであろうか。それは他でもなくブンドをどのように総括するのか。またどのように総括してはならないかと云うブンド総括の基軸と方法を巡る問題である。

我々はブンドの総括を急進民主主義と反スタ・トロツキズムの清算と批判、克服に据え、今日我々が継承すべきものと清算すべきものを明らかにしてきた。我々が提起したブンド統合の六条件はかかるブンド総括の成果でありブンド総括そのものである。しかもこのことは、すでに述べたように一方に於いてブンドを正しく総括できず、総括の要をつかみとれず、よって今日の情勢の煮つまりの中で階級斗争をプロ独—社会主義革命に向けて首尾一貫して、系統的に領導すべき革命党としての飛躍をはたせないブンド諸分派の存在を一層くっきりと浮きぼりにしたのである。

今日、多くのブンド諸分派はそれぞれ第二次ブンドを根本的に総括せず、その部々性に依拠し、それを立脚点としている。したがってブンド総括自体もその部々性の強調、特殊性に終止しているのが実情である。すなはち、それぞれにおいて第二次ブンドの党建設の敗北を語り、また思想問題における弱点を指摘し、労働運動と共産主義の結合の見地の不徹底を「総括」してみせている。しかし、このそれぞれの指摘がそれ自体として一定の妥当性を持っているにせよ、それが部々性にとどまりしたがって当然に、思想路線、政治路線の全領域に於ける急進民主主義、反スタ・トロツキズムの清算、克服をマルクス・レーニン主義、毛沢東思想として獲得し、しかもこの綱領の転換から戦術、組織の転換として貫徹しえず結局、首尾一貫してプロレタリア階級人民をマルクス・レーニン主義党に組織してプロレタリア階級独裁、社会主義革命へ動員していくことが出来ないでいる。

今日ブンドを根底から総括できない諸君が依然として第二次ブンドを越えることが出来ないのは当然であるが、彼ら第二次ブンドの無総括主義に共通しているのはブンド七回大会路線を基礎としての性格と位置である。それはあたかも七回大会の位

置にとどまることが「第二次ブンドの主流の継承」することだとでも考えているかの如くである。彼らの一部は「ブンド主義」をふりかざすことにより我々を批判しているが、このことこそが逆に、「ブンド主義」そのものが正反両面にわたって正しく検証され総括されなければならないと云うことへの彼らの無自覚さを暴露するものに他ならないのである。

さて、このような七回大会の墨守派、すなはちブンドの無総括派の代表として我々は蜂起派を挙げることが出来る、と考える。蜂起派の諸君は我々の統合を野合であると批判し我々の斗い取ったマルクス・レーニン主義の原則を「民族共産主義への屈服」であると攻撃している。彼らはこの概念を持ち出すことによって、今日の国際共産主義運動の大分裂を全て一律に裁断し、ベトナムも民主カンボジアも中国もそして更にはソ社帝さえも「民族共産主義」で裁断しその空論主義を自己暴露している。彼らによれば今日の社会主義中国とソ社帝とベトナムと民主カンボジアの「路線を巡る政治対立の正体も『労働者国家』の民族利害をめぐる対立に他ならない」のであり、「民族共産主義は賃労働と資本の対立という基本矛盾にもとづく階級原則とプロレタリア国際主義を民族主義に従属させる思想であり、過渡期世界においては権力を奪取した『労働者国家』の党が自国の経済建設という狭い一国的な民族的利害のために国際プロレタリアートと世界革命の利益を犠牲にすること」だと云うのである。

要するに彼らは今日の社会主義中国が即座に世界革命戦争に打って出ないことをもって「民族共産主義に転落」したと中傷し「スターリンの一国社会主義論がマルクスの社会主義論を葬り去った」としてプロレタリア階級独裁下での社会主義継続革命と云う毛沢東思想の軸芯への無理解に基づいて反スタ・トロツキズムを全面開花させ、あまつさえ「民族共産主義との世界革命戦争に備えよ」というおどろくべき混乱の極に達した主張を揚げている。しかし、前述した如く反スタ・トロツキズムの全面化という点に於いて何ら目新しい主張ではない。むしろそれは彼らが今日第二次ブンドの反スタトロツキズムの「正統な継承者」であり、一層それを純化した部分であると云う意味においてブンド無総括派とその行きつく先を見てとることができるのである。

蜂起派によれば、今日の『労働者国家』の民族共産主義への転落」の根拠は「米中ソ三角核均衡体制」のもとでの一国社会主義建設の不可能性を根拠とする堕落ということになるのであろうが、そもそも彼らの云うところの「米中ソ三角核均衡」なるものが結果として戦争不可能論のカウシキー主義に行きつくものに他ならず米ソの覇権争奪戦が今や増々第三次世界戦争の要素を増大させていると云う事実から目をそむけ、また一方で、の第三世界人民を先頭とする反撃、革命の要素の増大の意義を全く理解しえていないことの証左に他ならない。とまれ今日蜂起派の諸君に問われているのは、国際共産主義運動の大分裂への政治的態度を「民族共産主義」として反スタトロツキズムの

見地から突き出すことではなく、又、ブンドの総括を「階級服務の思想、共産主義軍事思想、本質的非合法党思想の獲得」として把えるのではなく、第二次ブンドの思想、政治路線の具体的切開を通じて急進民主主義の清算、反スタ・トロツキズムの克服をマルクス・レーニン主義、毛沢東思想支持を要につかみ取ることである。

戦旗派の諸君に於いても同様のことが云えるであろう。戦旗派の分裂、そして今日に致る論争がブンド総括との関連に於いてどのような内容上の根本に迫る論戦かと云えば、やはりブンド総括の要、したがって急進民主主義の清算、マルクス・レーニン主義の獲得と云う問題をめぐるものではないと云わざるをえない。

戦旗派の諸君も蜂起派と同様に第二次ブンド（七回大会）の政治路線は正しかった。しかし思想問題と組織路線に於ける欠落があったと云うものであり、片や思想問題を血債の思想として強調し、片や組織論を強調して方法論体系主義とでも云うべき傾向に陥っている。しかし、やはり彼らの思想政治路線が急進民主主義であるということにおいて両派は共通しており、「帝国主義の腐朽性に抗し共同反革命を蜂起—内戦へ」あるいは「帝国主義、植民地従属国、『労働者国家』三ブロック階級斗争を世界プロ独—世界共産主義の勝利へ」でも明らかなように、帝国主義の反動的諸政策や、侵略反革命に対して急進的に斗いつつもプロレタリア階級独裁・社会主義革命に向けた首尾一貫した宣伝、煽動を放棄し、したがって当然にもそう云う内容に於いてしか、労働者階級の政治的発達を引き出し切れていない。

また彼らは七回大会を墨守し、そのために自らの反スタトロツキズムを克服しえていないがために、毛沢東思想をレーニン主義の継承として正しく評価しえず具体的には、ベトナムのカンボジア侵略と云う厳然たる事実を前にして、「国際共産主義運動の歴史的段階や、現情の中からその意味と位置（ベトカン問題、ベト中問題）をとらえなければならない」として「五〇年代、六十年代のソ連によるポーランド、ハンガリー、チェコ侵攻などソ連スターリン主義の問題とされてきた事態がソ連のみに個有な問題ではなく、中国、インドシナ、アフリカ等、共産主義と民族解放を目ざす斗いの全般に内在する問題としてあることが、今回の事態を通じて明らかとなった」（「戦旗」）とやはり、ここでも又反スタ・トロツキズムが全面化し、それを今日の国際共産主義運動の把握の要としている。

我々は戦旗派の諸君に対しても我々のブンド総括の観点、立場を明らかにした上でブンドの総括論争を積極的に呼びかけるものであり、戦旗派の諸君がブンドをその全体に於いて総括しプロレタリア階級の単一の指令部の創建を目ざしブンドの総括論争に大胆に踏みこむことを心から要請しないわけにはいかない。

こうしたブンドをその思想、政治路線から正しく総括しえない、無総括派、七回大会墨守派とは異なり、そして現実にはよ

り一層悪質でもある傾向がブンドの中から発生している。そうした諸君に対して我々は自覚的でなければならない。

それは「ブンドを総括」すると称してブンドを全面清算し、その歴史を平然と投げ捨てた諸君である。国際主義派がそれであり、彼らはブンドの何を清算し何を継承するかを問うことなく全面清算によって結果としてブンドの総括を放棄した。彼らは今日社会主義革命路線を放棄し人民民主主義革命の日共《プロ革》派の路線へと乗り移ったのである。いわく「ブンドは小ブル急進主義であった」「第二次ブンドは予行演習であった」と云うブンドの全面清算の口実を総括に置きかえてである。

また、塩見君は「社会主義革命路線の革命的清算」を掲げ、旧赤軍（プロ革）派の分裂に致る全過程において、アレコレの路線的修正、手直しの無総括主義で延命させてきた急進民主主義を、今日一転して清算主義の手法で修正主義に向けて発展させ「プロレタリアヘゲモニーのもとでの社帝重視の反覇権反帝、反独占民族民主革命路線」を主張し、一流の強盗ソ社帝への対抗のため二流の強盗日帝と手を結ばんとして反ソ祖国擁護派、祖国防衛主義へと転落している今日、塩見君はいよいよ「社会主義を含み、これに連結する民族民主革命」が「レーニン的二段階戦略」であるなどと云う転倒的珍解釈をもって「ブンドの小ブル社会主義革命路線の克服」を叫び、その正体が見破られていない、「毛沢東思想派」の一部に迎合している。

彼らは同様に社会主義革命に反対し修正主義への道を掃き清めており彼らブンドの全面清算派の行きつく先が同じ修正主義の道であるということは我々にとってきわめて教訓的である。

それは今日我々がどのようにブンドを総括すべきかを教えており、どのように総括してはならないかを教えている。

我々は、こうしてブンドの全面清算派と斗いつつブンド総括の要をその立場と観点を今日なお部分的にしか把みきれないでいる諸君に働きかけ総括論争の発展を促し、しかもそれを当面する党建設の軸であるマルクス・レーニンの第三次ブンドの結成と結びつけて発展させていかねばならない。

我々は今日、かかるブンドの総括を一定の共通基盤の上に立って形成しうる諸君として紅旗派と怒とう派を挙げることが出きる。怒 涛 派について述べるならば、彼らが急進民主主義と反スタ、トロツキズムの清算と克服を正しく提起しながらも「ブンド主義の清算」と云う提起に示されるように、ブンドそれ自体の総括を曖昧にし、それをコミンテルン―日本共産党―怒 涛派の総括へと解消していく傾向があることを指摘しておかねばならない。それは彼らがブンド七回大会を歴史的に共有していないと云う事情があるにせよ、現代修正主義に転落した日本共産党とは云うまでもなく、革共同とも明確に区別されてブンドに結集し、今日では、その一分派であると云う自己の位置を曖昧にすることは、つまるところ党の歴史的成果なり弱点を曖昧にすることであり、党建設に於いてブンドの統合と云う当面する建党の斗いについて確固とした立場を提起しえなくなるのではないだろうか。

ブンドが日帝打倒、プロ独―社会主義革命を政治路線の根幹に据えることによって反帝斗争と反修斗争を結びつけて日本階級斗争を実践的にも理論的にもケン引してきた意義をしっかりと承認し、そうであるが故にも、そこに内在していた急進民主主義と反スタ・トロツキズムを真に清算し脱却することこそが単一のマルクス・レーニン主義党の創建の中核体へと自らを高め鍛えあげていくことであり、又そのような責任を負っていると云うことなのである。

だからこそ、今こそ浮動的な、そして投機的な傾向と厳然と一線を画し首尾一貫して党建設を推し進める道、ブンドの総括と統合、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの結成、そしてそれを中核体とするプロレタリア単一党建設の道を選択すべきであることを我々は彼らに訴えなければならない。

（尚、この政治報告が作成された時点に於いて以上のように怒 涛 派の諸君への意見を有していた。しかし、今日怒 涛 派の諸君が日本共産党（マルクス・レーニン主義派）の諸君と統合した事態を踏えて考えるならブンドの統合、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの結成と云う任務を共有することは出来ない。我々は今後ブンドの総括論争と云う領域ではなく、更に単一のプロレタリア階級の指令部建設と云う領域に於いて、大いに日共ML派の諸君とも議論を発展させていきたいし、今回の統合を踏え、そうした仕方でこれまでの怒 涛 派の諸君との議論を継承していきたいと考えている）。

紅旗派について述べるならば彼らのブンド総括の見地とブンドの統合に向けた提言と努力は我々は積極的に評価するものである。だが彼らはブンドを急進民主主義として正しく総括しながらもその根本的根拠が反スタ・トロツキズムと不可分なものであることを把み取れず反スタ・トロツキズムの批判が中途半端なものに終っていることを指摘しなければならない。このことは彼らの提起する統合の六条件に反スタ・トロツキズムの批判・克服が掲げられておらず、一国社会主義建設を承認するか否か、そして、それを承認する根幹としてプロレタリア階級独裁を堅持した社会主義継続革命の承認が現代修正主義との分水嶺として明らかにしうるのか否か、よって反スタ・トロツキズムの清算、毛沢東思想支持を明確化しうるのか否かという点で曖昧さを多分に残している。

具体的には、彼らが今日の中国共産党の反覇権外交戦術を「スターリン外交」と同列に論じ、またベトナムの民主カンボジア侵略に対してはベトナムを批判しつつも、中国とベトナムの紛争については中国を批難するという混乱した政治態度がある。それは紅旗派の諸君が一体どのような政治の継続としてあるのかという点の解明に無自覚であり、彼らの反スタ・トロツキズム批判の欠落、不徹底の証しと言えよう。そしてそれは当然にも紅旗派の諸君にとっては今日の国際人民闘争が第三世界人民を主力軍とし当面する課題が反ソ反米反覇権にあることが理解

できないのである。

もとより、このような紅旗派や怒濤派に対する批判は彼らがブンドの総括作業をマルクス・レーニン主義の獲得という方向で提起していることを高く評価した上でのことであり、彼らとのブンドの総括論争は今後もより一層発展的に進められなければならない。

以上のように今日のブンド内論争は我々の統合の斗いにも大きく規定され、促進されつつ、それぞれの党派の政治傾向を一層明瞭にさせずにはおかないものである。まさしく、マルクス・レーニン主義の獲得をかけて前進する我々の斗いは一方で全面清算派を反面教師として生み出しつつ更には七回大会墨守派たる無総括派に対してもブンドの総括を要求し、突きつけ、曖昧な中間的な、そして時として保守的ですらある態度を許さず、はっきりとそれぞれの道を歩むことを強制してきたのである。

事実、先に挙げた蜂起派の諸君がそうであるように、それは反スタ・トロツキズムへの一層の純化と「帝国主義の重心攻撃」なる主張をもって急進民主主義の沼地へと一層のめり込んでいく部分を生み出していることにそれは示されている。

b　国際共産主義運動の分裂に規定された政治勢力の分化

先にも述べたように、今日の戦争と革命の時代たる時代特徴は、革命党派とプロレタリア階級にとって国家と革命、戦争と革命の問題を現実的課題として一層鋭く問うものである。我々がブンドの総括を通じて獲得してきた急進民主主義の清算の地平こそは、まさしく国家と革命をめぐる問題に対する急進民主主義的態度、日和見主義を克服することにあった。

それは今日、日本階級闘争の深まりと発展のなかで人民闘争の高揚に一定の役割をはたしている諸党派にあってもそれが修正主義、現代修正主義、総じて社会帝国主義との分岐を形成しているという点で評価しつつも、この国家と革命をめぐる問題での日和見主義が色濃く存在していることを指摘しないわけにはいかない。

彼らが帝国主義の反動的諸政策に屈服する社共を弾劾し、戦闘的にそれに反対し、人民闘争の推進部分という意味で我々は彼らを評価し具体的、実践的分野における共闘を追求するが、しかし、それは論争、党派闘争を回避することではない。なぜなら、彼らは帝国主義の侵略、反革命、反動、差別、抑圧、搾取、収奪などに反対する人民闘争の発展・爆発を見、これらの政策に反対し、これを阻止し、この政策を実行する闘争の直接の延長に国家権力をめぐる闘争を展望している。したがって政府打倒の経済闘争、民主主義闘争の戦闘化が目的となってしまっている。この結果、プロレタリア階級独裁、社会主義革命の宣伝・煽動が放棄され、修正主義、社会帝国主義を根本から批

判できないでいる。我々は、革命情勢の端緒的開始という今日の情勢をとらえ、ブルジョア国家権力＝軍隊・警察・官僚機構を打ち倒し、全人民の武装で新しい国家権力を樹立する暴力革命、プロレタリア階級独裁を眼目とする帝国主義打倒・社会主義革命の宣伝・煽動を人民闘争の様々な水路の中に持ちこみ、ここに向けて、それらの闘いの発展と爆発を促していかねばならない。そうして共産主義と労働運動を結合させ修正主義・社会帝国主義との闘争を組織し、労働者階級を組織してマルクス・レーニン主義の単一党を創建していくのである。こうした基本的なマルクス・レーニン主義と急進民主主義との論戦を一層大胆に我々は組織していかねばならない。

そして、ここにおける党派闘争の基準もやはりブンド総括の見地をそこに押し拡げていくことによって可能であり、正しいものとなろうことは明らかである。

我々は国際共産主義運動の大分裂に規定された現下の日本における共産主義運動の分化と再編を次のように押さえることができると考える。

我々を含む若干のマルクス・レーニン主義の部分を除いて、①日共、社会主義協会、平和と社会主義等の紛れもない現代修正主義、社会帝国主義。そして今日ではトロツキズムの第四インターが遅ればせながらこれに連なろうとしている。②「毛沢東思想派」と総称される反独占人民民主主義の修正主義と、③急進民主主義・反スタトロツキズムを思想路線とする勢力である。

今日では、これら諸潮流は国際共産主義運動の大分裂、具体的には、ソ社帝を後楯としたベトナムのカンボジア侵略、このことと結びついた中国の対越白衛反撃戦という事態を前にして一層明瞭にそれぞれのよってたつ政治傾向を特徴的に明らかにしている。

ソ連は、ブルジョア階級独裁と資本主義を復活させ、日先での「社会主義」実際は帝国主義に変質転化した。これに対して第四インターは、ソ連を特権官僚の支配する堕落した労働者国家、つまり生産手段は国有化され、プロレタリアートが支配階級となったプロレタリア階級独裁ととらえている。中核派はソ連の国家、社会の階級的性格をとらえることができず、ブルジョア階級独裁でも、プロレタリア階級独裁でもない超階級的なスターリン主義の支配ととらえている。いずれもソ連社会帝国主義の美化であり、同時にプロレタリア階級独裁の社会主義である中国を官僚主義あるいはスターリン主義として中傷している。総じてトロツキズムは社会主義において共産主義を実現するためにはプロレタリア階級独裁は必要としないとする点で修正主義である。

更に現在、ソ連が社会主義から変質転化し、官僚ブルジョア階級独裁の社会帝国主義として登場していることが、米ソの第三次帝国主義戦争を不可避としている。これに対し第四インターは、帝国主義間戦争の不可避性を否定してカウツキー流の超

帝国主義論となっている。

それにともなってソ連社会帝国主義の米帝国主義に対する覇権争奪を民族解放と社会主義の名で積極的に支援しているトロツキズムから登場した社会帝国主義である革マル派はまず一国での社会主義建設の闘いを全面否定し、その存在そのものを、「スターリニスト的疎外」として打倒・解体を願ってやまない。それは、今日のベトナム・カンボジア・中国間で発生した事態を「われわれはスターリニスト国家間で勃発した本格戦争（そのような戦争の多くは現段階にあっては、中・ソ代理戦争へと発展する必然性をもつ）をまのあたりにして、あらためて民族共産主義の腐敗を確認しなければならない。」として、社会主義中国を批判し、中傷し、ソ社帝を美化している。彼らは米ソ覇権争奪を、米の守勢・ソ連の攻勢と認識しているが、彼らのソ連批判なるものは反共主義・祖国防衛主義以外の何ものでもなく、その意味で、日本帝国主義と融合している。

さて①の部類において、日共・協会はさておき、第四インターの諸君は「労働者国家無条件防衛」をふりかざしてソ社帝を擁護し、そればかりか「国際的にも『革命の覇権』が『帝国主義ブルジョアジーの覇権』を粉砕することを我々は断乎として支持する。『インドシナ革命の覇権』が東南アジアに対して行使されることを人民は無条件に支持し、防衛しなければならない」と、白を黒といいくるめ、ソ社帝の覇権行為を世界革命の前進であるかの如く吹聴し、ベトナムのカンボジア侵略・併呑を支持し、ベトナムのカンボジア・ラオス従属化ーインドシナ連邦構想なる地域覇権主義を支持し、それを人民に強要しているのである。これが示していることは、第四インター・トロツキズムがまさにソ社帝、ベトナム等の「社会主義建設」路線と通底するものとしてあるからに他ならない。すなわち社会主義建設を先進国の高い生産力水準と後進国の資源の結合に求めるというソ社帝の「社会主義大家族論・国際分業論」を手本とする徹底した生産力主義がその根底にある。

しかも第四インターは国内においてはあろうことか、社共・社会帝国主義を現存する労働者階級の指導部として承認し、社共のめざすものがブルジョア階級独裁の補完にすぎないことをおおいかくし、「社共は労農政府を樹立せよ！」と要求するにいたっている。まさしく彼らの正真正銘の修正主義への転落を如実に示している。それは彼らの社会主義革命論にも見てとれるが、所有制をカナメとした生産関係の変革を抜け落とし、資本主義の修正・改良・政策の変革を要求し、ブルジョア階級独裁の国家権力を打ち砕き、プロレタリアートの掌中に国家権力を奪いとることをあいまいにし、政府問題にすりかえ、政府の交替に一切を流し込んでいるのである。それ故今日、彼らが要求する国有化と労働者管理なるものは、プロレタリア階級独裁を欠落させた「社共ー労農政府」下のそれでしかなく、徹頭徹尾、改良主義・経済主義の代物でしかない。

②の「毛沢東思想派」と総称される部分については、まず彼

らこそ毛沢東の業績と中国革命において果たした革命的役割を最も矮小化し、歪曲している部分であることを明らかにしなければならない。

マルクス・レーニン主義を継承・発展させ、あらゆる教条主義と果敢に闘い、中国の国家と社会の具体的分析を通して、中国革命の勝利を指導し、更にはプロレタリア階級独裁を樹立し、プロ独を堅持した社会主義継続革命ー一国社会主義建設を打ち立てた毛沢東思想の革命的精神を忘れ、彼ら「毛沢東思想派」のほとんどは、毛沢東教条主義として登場している。彼らは、まさに各国の社会の具体的性格分析を通して、それぞれ異なった革命の道をつかみ出すことを否定し、中国革命の教訓を教条化し、機械的にあてはめ、日本に持ちこんでいる。

彼らは今日では、ソ社帝と日帝（日本民族）の矛盾を第一とし、反ソ統一戦線を提唱し、ブルジョアジーとの連合をも可能であると主張している。そして、対ソ民族防衛を吹聴し、後押し、プロレタリア階級に日帝への屈服・協力を呼びかけている。彼らの中から、プロレタリアートの階級的成長を妨げ、社会主義革命の敵対者・民族投降主義への転落者を生み出すのは明らかである。

また「毛沢東思想派」といわれる部分の中から、「三つの世界論」をもって毛沢東思想からの逸脱であると批判し、アルバニア共産党を支持する部分も生み出されているが、結局のところこうした部分は、反スタ・トロツキズムを密輸入し、またぞろソ社帝との和解を進むことは明らかである。

しかし一方、毛沢東思想を正しく評価し、マルクス・レーニン主義を復権せんとする部分も生み出されつつあり、我々はこれを歓迎する。

次に③の部類に属する諸勢力について述べておきたい。

これらの急進民主主義諸派は、日帝の戦争と反動の熱望のたかまりと闘い、人民闘争の高揚に一定の役割をはたしている戦闘的潮流・中間主義である。中核派、解放派がそれであり、いくつかのブンド系分派もそれにつき従っている。彼らは基本的にプロレタリア階級独裁と社会主義革命の首尾一貫した闘いを宣伝・煽動・組織することができず、彼らに共通する反スタ・トロツキズムは、中国をはじめとしたアジア社会主義国に敵対し、ソ社帝美化に連なっている。

革共同中核派は、その国際情勢の分析においてソ連社会帝国主義を暴露・批判しえず、米ソ覇権争奪の激化、ソ社帝第一級の「戦争放火者」とする第三次帝国主義戦争のはじまりを見抜くことができず、今日の戦争の要素の増大を日米間の、帝国主義間矛盾としてしか把えられず、安保粉砕闘争からも事実上召還せざるをえない。そのことと通底して社会主義中国や、民主カンボジア非難の大合唱に加わっている。

更に、彼らの反スタ・トロツキズムの空論的「世界革命」に立脚した誤まりと反動性は、レーニンの民族・植民地問題の無理解（そのトロツキー的解釈）を自己暴露しており、朝鮮革命

に対する見解に如実に示されている。すなわち朝鮮人民の自主的平和統一をカナメとする、共和国における社会主義継続革命と固く結びついた南半部の民族民主革命の決死的闘いに対し、「金日成の半国社会主義建設」という中傷と「朴・金同時打倒」なる内容をもって朝鮮人民の闘いの方向をねじまげ、日本プロレタリア階級人民の任務をねじまげている。また中核派の「先制的内戦戦略」とそれと結びついた「対カクマル戦争」は、ブルジョア階級独裁の国家権力の打倒をあいまいにし、革命戦争を社会帝国主義の革マル派の打倒に一面化している。更に、人民共闘路線による「日帝・大平体制打倒」として、自民党大平政権の打倒が日本帝国主義打倒であるかのようなアジテーションに終始し、「侵略を内乱へ」という戦略が示す如く、日帝の侵略の反対者・反政府勢力以上でも以下でもない。

革労協(社会党社青同解放派)は、彼らの思想・政治路線、綱領的見地の雑駁さが今日一層暴露され、ベトナムのカンボジア侵略という事態に対する政治態度を鋭く迫られる中で、反スタ・トロツキズムへの純化の道をたどりつつある。それ自体、彼らの先進国革命主義とでもいうべき、先進国プロレタリアートの即自性に拝跪し、立脚した政治路線の行きつく先でもある。彼ら解放派は、総評内官公労部門の青年労働者を反幹部・民同批判を通じ一定糾合することに成功しているが、戦闘的組合主義の温存・固定化を通した彼らの経済主義・急進民主主義では、プロレタリアートの階級闘争を正しく組織することも、それをプロ独・社会主義革命と結びつけることも不可能である。

そして、前述したようにこれらの諸勢力・諸党派と区別して論じなければならないのが、革マル派である。

もはや先進的プロレタリアート人民にとって、革マル派が革命運動に対する意識的敵対者・武装せる反革命であることは共通のの確認であり、三里塚・狭山闘争をはじめとする人民闘争に対する中傷とデマを投げつけ、最悪の反革命集団として登場していることは衆知の事実である。

彼らが反革命であるのは、トロツキズムから生まれた社会帝国主義者として、徹底して、そして終始一貫したマルクス・レーニン主義の体系的反革命的修正主義であり、戦争と革命の要素を認めず、帝国主義戦争を否定し、よってプロレタリア階級の革命的前進と、それがプロレタリア階級独裁と社会主義革命に突き進むことを否定し、その前進をおしとどめ、圧殺することを自らの思想ー政治路線としているところにある。彼ら革マル派が暴力革命・プロレタリア階級独裁を彼岸化し、反革命へと転化していった事実こそ、かって日和見主義であった者を今日の階級闘争の煮つまりが一層完成された反革命への強化を強制しているという歴史の冷厳さを我々に教えている。

まさしく革マル派との対決は、不可避である。

長征　創刊号
一九七九年一〇月八日発行
発行編集　共産主義者同盟（革命の旗）中央委員会
発行所　赤流社
連絡先　TEL（〇三）四〇七―三五一一
東京都世田谷区千歳郵便局私書箱四号
定価　六〇〇円

日帝打倒・米帝追放・プロレタリア階級独裁・社会主義革命の勝利をめざし

革命の旗

を読もう！

毎月5日発行（定価・八頁二〇〇円）一九八〇年より月二回刊（毎月5日、20日発行）

年間購読・開封二五〇〇円（密封三〇〇〇円）

「革命の旗」（および赤流社出版物）取扱い店

札幌・アテネ書房、ひらひら、札幌ルビコン、札幌大生協。小樽・小樽商大生協。本荘・北陽堂。仙台・八重州書房、萩書房。浦和・荒井書店。東京・ウニタ、模索舎、文献堂、寅書房、高野書店、四谷文鳥堂、コマバ書店、幻游舎、明大生協（本校・和泉・生田）、吉祥寺ウニタ。横浜・横浜ルビコン。名古屋・名古屋ウニタ。京都・セイレイ社。大阪・ウニタ、曽根崎書店、大阪大生協。吹田・関西大生協。神戸・神戸大生協。広島・広島ウニタ。福岡・九大生協（教養）。沖縄浦添・沖縄舎。

定価　600円　赤流社・東京都世田谷区千歳郵便局私書箱4号　TEL (03)407-3511